

# 北の内遺跡

昭和54年10月

栃木県教育委員会

## 序

足尾山地の南端佐野市北西部の洪積台地上には、弥生時代再葬墓で著名な出流原遺跡をはじめとして、数多くの埋蔵文化財の包蔵地が所在することで知られております。

昭和51年6月当時、佐野市赤見地区において国道293号線の道路改良工事が実施されておりましたが、その工事中、数多くの土器破片とともに、縄文時代の住居跡が露出している旨、地元研究者より当教育委員会に連絡がありました。当教育委員会では埋蔵文化財の取扱いについて、県土木部と協議し、現状保存が不可能なことから、記録保存調査を実施することにいたしました。

発掘調査につきましては、ちょうどこの時期、当教育委員会において数遺跡の発掘調査を実施中であり、本遺跡の発掘調査体制を組織することが困難な状態でありましたので、細谷正策、尾花源司の両先生に調査に関する御指導をお願いすることとなった次第であり、公務御多端の折、両先生の調査及び整理作業の両面にわたる献身的な御努力に対して深甚なる謝意を表するものであります。

このたび、これら調査結果を整理し、報告書として公刊する運びとなりました。不備な点もあろうかと存じますが、関係各方面において御活用いただければ幸いです。

最後に、調査に際しまして、種々御協力いただいた佐野市教育委員会、地元関係者の方々、更には県土木部、佐野土木事務所の方々に対しまして厚くお礼申上げます。

昭和54年10月

栃木県教育委員会

教育長 渡辺幹雄

## 例　　言

1. 本書は一般国道293号線・佐野道路改良工事「佐野市赤見地区」にともなう北の内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および報告書作成までの費用は県土木部の負担により県教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査は、川原由典、岩上照朗、細谷正策、尾花源司が担当し、佐野土木事務所、佐野市教育委員会に御協力いただいた。
4. 本書の執筆責任者は目次記載のとおりであるが、遺構トレース、写真図版は岩上が、遺物実測は岩上、細谷、尾花がおこない、トレースについては川原、岩上が担当した。
5. 本書の編集は、川原、細谷、尾花の協力を受けて岩上が担当した。

6. 発掘調査、報告書作成については多くの人々の御指導、御協力を受けた。御芳名を記し謝意を表したい。

佐野中央公民館矢島俊雄、細谷小教諭梁木誠、文化課文化財調査係、海老原都雄、大金宣亮、橋本澄朗、八巻一夫、田熊清彦、熊倉直子、初山孝行、桜岡正信、芹沢清八、中山晋。

(敬称略)

## 本 文 目 次

序 .....	
例言 .....	
I 発掘調査の経緯と経過 .....	1
1. 発掘調査に至る経緯 (川原由典) .....	1
2. 発掘調査の経過 (川原由典・岩上照朗) .....	2
II 遺跡の環境 .....	5
1. 遺跡の立地 (川原由典) .....	5
2. 周辺の遺跡 (川原由典) .....	5
III 発掘調査 .....	7
調査の状況 (岩上照朗) .....	7
1. I 区の発掘調査 (細谷正策) .....	8
2. II 区の発掘調査 (尾花源司) .....	19
3. III 区の発掘調査 (岩上照朗) .....	23
4. IV 区の発掘調査 (岩上照朗) .....	26
5. V 区の発掘調査 (岩上照朗) .....	31
6. 北の内遺跡出土石器 (岩上照朗) .....	48
7. 北の内遺跡出土土製品 (岩上照朗) .....	53
IV 北の内遺跡出土土器 .....	54
1. 縄文時代中期後半 (岩上照朗) .....	54
2. 称名寺式土器について (岩上照朗) .....	57
3. 三十稻場式土器について (岩上照朗) .....	63
4. 歴史時代土器について (岩上照朗) .....	66
V まとめ (岩上照朗) .....	71

# I 発掘調査の経緯と経過

## 1 発掘調査に至る経緯

昭和51年6月初めに佐野市史編さん室矢島俊雄氏（現佐野市中央公民館）より、佐野市赤見地区の道路改良工事現場から土器類がかなりの量出土している旨の連絡が県教育委員会文化課によせられた。当該地は県遺跡地図でNo-892番の出流原遺跡（弥生時代再葬墓を主に検出）の南に隣接したところであり、県教委としては未登録の遺跡ではあったが、地元では北の内遺跡として知られていた。このため当委員会では現地調査が実施できる6月23日まで工事を一時中止してもらいたいとの旨を、県土木部、佐野土木事務所に口頭による申し入れをおこなった。この申し入れは受け入れられ、現地立合いののち遺跡の取り扱いについて協議することとなった。

6月23日、文化課、県土木部、佐野土木事務所の関係者が現場立合いを行なった。現場は既に側溝の埋設が終了し、路盤の削掘がはじまり、一部には路床のバラスが敷かれ始めており、事は緊急を要する状態であった。

このため遺跡は発掘調査により記録保存を計ることとなったが、現状では遺物の出土は認められるも、遺構検出がなされていないため、翌日24日にバックホーンにより遺構の確認を実施することとした。その結果、縄文時代、平安時代の遺構が検出されたのである。

しかし、早急に発掘調査を実施するとしても、県教委においては既に数遺跡の発跡調査が進行中であり、北の内遺跡を担当する人的な余裕がなく、担当者を外部に求めなければならず、多少の曲折はあったものの、岩上照朗（現文化課指導主事、当時氏家高校教諭）、細谷正策（旗川小教諭）、尾花源司（石塚小教諭）の各先生方に担当者として引受けられるか否かを打診したところ快諾を得たことにより、調査は夏休みが利用できる7月26日～8月30日（実働30日）の期間に実施することとした。

調査体制は下記のとおりである。

事務局

鹿目文雄 文化課長（現栃木県社会福祉協議会事務局長）

富祐次 文化課長補佐（現博物館建設準備班学芸嘱託）

池田進一 文化財調査係長（現住宅課副主幹兼住宅管理係長）

川原由典 文化財調査係技師

発掘調査担当

岩上照朗（現文化課指導主事）

細谷正策（佐野市立旗川小学校教諭）

尾花源司（　　石塚小学校教諭）

（川原由典）

## 2 発掘調査の経過

### （1）発掘調査

発掘調査は、既に道路予定地内で一部の工事が開始されており、表土の削平がなされ、バラス等の敷設がおこなわれているため、人力による排土は困難であるとの判断にたち、重機（バックホーン）による排土を行なうこととした。バックホーンによる残土は逐次ダンプカーに積載のうえ別地点に運搬することとした。遺構の検出されるのは黒色土下のローム層からのため、排土はこの面まで重機により一度に実施することとなり、その後は作業員による精査をおこない、遺構確認のうちに内部調査を実施することによって作業能率を高めることにした。（川原由典）

### （2）発掘調査日誌抄

昭和51年7月26日（晴れ）

発掘調査現地に調査担当者集合。調査の方法の検討、調査範囲・期間の確認を行なう。調査対象部分全面砂利が敷かれているため、27日から29日まで重機による削平を行ない、遺構の確認を行なうこととする。

7月30日（晴れ）

レベル原点、実測基準点を設定。I区からIII区まで確認された遺構順に番号を付す。IV区東半、人力による表土剥ぎ。佐野市史編さん室矢島俊雄氏來訪（以後絶大な御協力を頂く。）

7月31日 晴のち曇（夕方遠方に雷鳴）

I区、人力による遺構確認の段階。（埋積土とローム層の区別が難しい）II区古墳時代住居跡荒掘り。III区、称名寺式土器片の出土が多いことから、該期の住居跡を想定して、その平面形をつかもうとする。IV区、表土剥ぎ。

8月1日～5日（8月3日雨天中止）

I区、先述の通り土壤内の埋積土と周辺のローム層上面と判別がつき難いため、ローム層をある程度掘下げて土壤の平面形をつかもうとした。（ローム上面にて東西に二本、南北に五本の試掘溝を設けて掘下げようとした。）II区、住居跡完掘する。実測、清掃後写真撮影II区はこの他梢円形を呈する土壤（前期土壙）、袋状土壙、円形土壙、柱穴様小ピットが確認されている。8月4日よりこれらの調査開始。III区、IV区歴史時代住居跡の西半部

分を完掘（4日），一応長方形を呈するらしいが，壁の立ち上がりは不明瞭であった。5日より埋甕周辺に付属の施設等の確認のため精査。その結果，垂飾1点（図-78の3）と1号埋甕の蓋として使用されたと思われる石灰岩製の板石検出。IV区の敷砂利の排除開始。IV区，歴史時代住居跡については，III区と連続するので8月1日より人力によって調査を続行。8月5日の段階で縄文土器片を多量に散布する地点3ヶ所，土師器片を多量に散布する部分を1ヶ所確認。

#### 8月6日～8月10日（8月7日雨天）

I区，土師住居跡，二基を荒掘り開始（8月10日より）。同時に縄文時代土壌に造構番号を付す。（この段階では総計40基の土壌を確認）8月9日，土師住居跡は二基とも半分が調査区域外にかかることが判明，その調査法について協議するが，国道側溝下にかかることにより調査不可となる。II区，土壌三基のうち一基（楕円形土壌）は，埋積土の上面より後期初頭，底面近くより織維土器が出土することを確認（8月9日）。同時に他の一基（2号土壌）は袋状を呈していることが判明する。III区，埋甕の埋設のための掘り方，埋甕内の土壤観察のため，埋甕とその周辺を半分に断ち割る。（8月9日～10日）IV区，表土削ぎの結果，住居跡は検出されず，屋外の埋甕と縄文時代の土壌，歴史時代の土壌，同溝状造構を検出（8月8日～10日）。IV区より柱穴様小ピットをいくつか検出したが，その並び方に規則性がない。

#### 8月11日～15日（11日，15日雨天中止）

I区，小土壌より爪形文土器出土。知見にない土器片であったので，土壌内埋積土を注意して掘り下げたが，下位より称名寺式期の土器片が出土した。（草創期の爪形文を意識していた我々は多少がっかりする。）その他の土壌の精査。II区，各造構清掃後，写真撮影。III区，各埋甕の出土状況を実測。IV区，歴史時代住居跡精査しカマドが二つあったことを確認。埋甕の出土状況写真撮影，実測。

#### 8月16日～20日（16日雨天中止）

I区，縄文時代の土壌の調査，古墳時代住居跡2基完掘。2号住居跡の東側に貼床を検出。貼床下に縄文時代の土壌あり。II区，ほど調査完了。III区，ほど調査完了。IV区，各埋甕の出土状況実測。各埋甕の埋設のための掘り方を観察するため。それぞれ半分に断ち割って調査する。IV区，上壌の平面形確認しようとするが，ローム層と土壌内の埋積土の区別がつき難いためかなり難しい。従って遺物が集中して出土している部分を中心に周開を開げていって土壌の全容をつかもうとする。20日よりV区の調査を開始。

#### 8月21日～8月25日

I区，土壌の完掘と実測，写真撮影を行う。IV区，I区と同様。V区，8月22日まで，造構の平面形をつかむため人力による表土剥ぎ。その結果，住居跡と考えられるもの5基，方形（埋積土黒色土）の土壌と円形の土壌を確認した。住居跡は互いに重複関係にあるの

で、新旧関係を確実につかむために調査の方法を検討する。住居跡は、完掘できるものは2基しかなく、他の4基は全て北半が調査区域外になっている。23日より住居跡を掘下げる。土壌については25日までに完掘、実測、写真撮影。

8月26日～8月30日

V区、住居跡の精査。実測、写真撮影（29日まで）。26日より、調査部分全測図作成開始。  
30日、近辺の山頂より、遺跡の遠景を撮影。 (岩上照朗)

## II 遺跡の環境

### 1 遺跡の立地 (図-1, 2)

本遺跡の所在する佐野市は関東平野の北部に位置し、栃木県の南西部にあたる。佐野市の南を東流する渡良瀬川が境となり、群馬県館林市と接している。北には足尾山地の山々が接近し関東平野の北端となっている。

北の内遺跡の所在する位置は佐野市街地北西 6 km の出流原町にあり、出流原小学校校庭前の水田、畑地などを中心とする洪積台地上に形成されている。この台地上には北の内遺跡と一部が重複する出流原遺跡が北西に隣接して所在しており、昭和39年、40年に発掘調査され弥生時代中期の再葬墓である約37個の小堅穴が検出されている。この台地は起伏が少なく、平坦面を形成し畑地、水田、雜木林となっているが、ここ2~3年は住宅の建設が多くなっている。この附近の標高は約60mであり、西側水田面からの比高約2.5 m 前後を測る。台地の西には出流川が台地直下を南流し、東1.5 kmには南流する旗川がある。この両河川に狭まれた南に延びる供積台地上には遺跡が密集し、佐野市の遺跡分布の多い地区として知られている。この供積台地は宇都宮近辺でいう宝木台地に比定されている。  
(川原由典)

### 2 周辺の遺跡 (図-1)

北の内遺跡の所在する赤見附近には多数の遺跡の存在が知られているが、そのほとんどは、今日まで何ら保護の手もさしのべられず、悠久の眠りについたままのものもあれば、その眠りすら許されず、開発の手により調査もされず破壊されたものも多く存在する。今回調査された北の内遺跡も開発との事前協議の不手際からおこったものであり、文化財保護にたずさわる者として心の痛みがある。

以下北の内遺跡の周囲に存在する遺跡を若干記してみる。

#### 1. 北の内遺跡

出流原遺跡 (昭和39・40年に明治大学が調査し、総数37個におよぶ小堅穴と100個近い弥生式土器が発掘された)

#### 2. ドーキ遺跡 (土師器の包含地)

#### 3. 千代岡西遺跡 (縄文土器・須恵器散布地)

#### 4. 町屋遺跡 (縄文時代・前期遺物散布地)

#### 5. 八長寺跡 (板碑等の出土が知られており、古代寺院跡と考えられる。)

6. 潤竜寺裏遺跡（縄文時代前期遺物散布地）
  7. 般若庵寺跡（鬼瓦、布目瓦の出土が知られており、古代の寺院跡ではないかと考えられている。）
  8. 東山古墳群（約11基近くの古墳がならんでいる。主体部は横穴式石室であり、埴輪円筒、須恵器などの出土遺物が知られている。）
  9. 中山古墳群
  10. 蓮沼古墳群
  11. 梨の木遺跡（縄文土器包含地）
  12. 13墓塚古墳（供養塚の可能性もある）
- 以上が、北の内遺跡を中心とした附近の遺跡を抽出略記したものである。（川原由典）

### III 発掘調査

#### 調査の状況

北の内遺跡の発掘調査は、国道新設工事により、ローム層上面まで削平された段階での調査だったので、遺構すべてを、表土層より掘り下げていって調査したのではない。更に調査前、道路敷内は、削平された後（ブルトーザーによる）全面的に砂利が敷かれていた。削平された段階で、各遺構の上部は破壊されていたが、調査を円滑に行うために敷砂利の除去を機械力をもつてした。これはなおいっそ各遺構の破壊を進めたものであろう。このことは、次の各遺構に顕著であった。IV区より出土した屋外廐施設、II区、III区より検出された伏甌の遺構などである。とくにIV区の埋甌は、調査の結果、胴下半の残存しかなく、埋甌使用土器の各々の形態・文様を充分につかむことはできなかった。

調査は全域をI～Vの5つの区域に分けて実施したが、図-2でも分かるように、地点を別にする地区を調査したわけではない。道路の予定線は台地を東西に横切るものである。調査区はいわば北の内遺跡の一部に大きな試掘溝を設けるものであったのである。但し、I区とII区、II区とIII区、III区とIV区、IV区とV区の間に道路敷を切断するように4本の暗渠排水のための水路が埋設されていた。従って便宜的に5つの区を設定したのである。I区については細谷正策が主として担当し、同様にII区は尾花源司、III～V区については岩上照朗が担当した。

調査は、上記三者とも学校公務の間を縫って行なわれたのであるが、調査期間として利用できる期間は三者とも夏季休業中のみしかなかった。しかし調査を要する範囲は東西約130m、面積約2,200m<sup>2</sup>と夏季休業中に完掘するのは不可能のような状態であった。よって三者の協議の上、担当区毎に検出される遺構を全掘するのではなく、各担当者の責任において、各区全面的な遺構の分布状況を見た後、残りの良好なもの或いは、出土遺物の多いと考えられるもの、更には遺構の分布状況を把握する上で重要と考えられるもの（これについても平面形のみをおさえて考へることは困難であるが、遺物の多寡、削平されてもなおかなり残りの良いものなどを指針にした）。なお、埋甌、住居跡は必ず精査することとした。をピックアップして調査することとした。これらについては以下、各区の調査の項で主な遺構として記載した。その他のものについては、各区の調査状況の中に概略を記載した。（図-3参照）

I区・土壌	55基（うち断面袋状のもの6基）
・炉穴	1基
・屋外廐	2基

・屋外埋甕施設	1基
・古墳時代住居跡	2基
II区・土壙	10基 (うち断面袋状のもの1基, 繩文前期土壙1基)
・柱穴様小ピット	4基
・屋外埋甕施設	1基
・古墳時代住居跡	1基
III区・土壙	2基
・柱穴様小ピット	9基
・屋外埋甕施設	3基
IV区・土壙	10基 (1基は歴史時代)
・柱穴様小ピット	11基
・歴史時代住居跡	1基
・溝状遺構	1基
V区・土壙	8基 (うち断面袋状のもの1基)
・繩文時代住居跡	5基
・屋外炉	2基 (うち1基は住居跡か)

これらの遺構の分布状況は後述する、時期的にかなりの差異はあるが、繩文期のものについては、住居跡を最も東（台地の奥部）にして、埋甕施設、土壙、埋甕、土壙の順に台地の縁辺（西）に向かって各集中地区がある。（岩上照朗）

以下、各区毎に調査状況を記載する。

## 1 I 区の発掘調査

### (1) 調査状況 (図-3)

第I区の調査範囲は東西およそ40m南北、およそ12mにわたるものである。緊急調査のため、排土の予定、削平状況などから第1区を手はじめとして調査にとりかかることにした。本区はすでにローム面まで工事のため削られており、トレーナー、グリッドによって調査することが無意味な状況であった。そこでまず、全面をはいで、さっそく遺構の確認をはじめた。その過程で遺物の多くのものが移動しており、遺構もかなり削り取られていることが判明した。また、南北の両側には国道側溝が作られており、黒色土からの落ち込みを判別するセクションの設定もあまり信頼性をもちえるものではない。遺構平面プランの確認は東側から西へというふうに進めていく。確認されたプランから発掘を始めたが、かなりの数の土壙が存在するようであった。しかし、一つ一つの土壙の遺存状態はあまり良

好ではなく、その規模、形状を確認し得ないものが多い。従って一つ一つの土壌の精査を望むことができなかった。ここでは主な遺構としていくつかのものについて記載することとする。

検出遺構（主なもののみ）は次のとおりである。古墳時代竪穴住居跡2基、炉穴1基、土壌10基（うち袋状であるもの6基）であった。但し、発掘調査区域は道路の範囲のみであり限定されていたため、完掘できなかつたものが数多くある。古墳時代竪穴住居跡は、2基とも大略半分調査区外に延びるので、双方とも半分の調査しか実施できなかつた。土壌の大部分からは縄文時代後期の土器片等が検出される。その分布状況は、本調査区内では東端と中央部に集中していることが看取できるが、発掘調査区域全体からみれば、土壌の集中度の濃さを指摘できる。この他、本調査区の西端と南側において炉跡が二基検出されているが、双方ともに工事によるかなりの削平のため、これらの伴う遺構、遺物の出土はなかつた。

本調査区は、西端で段丘崖を臨み、水田面の比高を2.5mを測る。台地の縁辺にあたる部分である。東側は暗渠排水路によって第2区と区別される。調査面積約650m<sup>2</sup>。

## （2）検出された主な遺構

### 1号土壌（図-4、図版-1）

開口部（確認面）では東西約160cm、南北約140cmをはかり、不整な椭円形を呈している。開口部から約20cm下がったところで断面形はいったんすぼまり、東西約135cm、南北約130cmとなる。以下はやゝふくらみながら底面に達する。底径約130cmの円形をなし、ほゞ平坦な面である。最大の深さ開口面（確認面）から約93cm。埋積土はロームのブロックを多く含み、上層部において木炭の混入を多くみることができた。（図-4、断面図）これら埋積土はかなり結っており、壁の立ち上がりをつかむことは少々難しかつた。

遺物としては、埋積土中位（IV層下位）より半欠の称名寺式深鉢、称名寺式の土器片の出土があつた。

### 2号土壌（図-5、図版-2）

1号土壌のすぐ西側にあり、開口面（確認面、ローム漸移層）での平面形は、南北2.3m、東西約2mの不整な椭円形を呈している。深さは約42cmをはかり、底面は、東西約1.75m、南北2.15mであり、ほゞ平坦な面であった。底面はとり立てて硬くしまっていたりはしていない。南東の開口部に舌状の張り出しが窺えるが、これは本遺構に伴うものとは考えられない。（ローム漸移層を調査時掘り過ぎたものであろう。）東側に、径約40cm、深さ約75cm（確認面より）の柱穴様のピットが検出された。遺物の検出はなかつたが、土壌の開口部（確認面での）を切断する形で構築されていたので、本土壌に伴うものではないと考えられる。

えた。

土壙内の埋積土の状況は、図-5の断面図のとおりである。上層（I, II層）にローム粒の多量の混入、下層（IV, V層）になる程黒色土の混入が多くなるようである。土壙の底面はローム層上面に構築されている。埋積土の状況から、本土壙の埋没が人為的なものであったとは考えられない。なぜなら、人為的に土壙を埋めた場合、その埋積土は、単一層的な様相を示すか、ロームブロックの混入が埋積土下層になる程多くなるものと考えたからである。

遺物は、図示（図-38）したもの全てが、埋積土中位（II層下位）より出土した。II層は断面図（図-5）でみると、I層の下にレンズ状に堆積した層である。II層はどの程度の時間をもって堆積したものであるかは不明であるが、遺物は本土壙が廃棄された後、いくらかの時間をおいてII層の堆積の早い段階に、II層内に含まれたものである。更に、遺物のその大きさから（主として図-38の1~5）自然に流れ込んだものとはいえないだろう。これらの遺物はII層の堆積中のいつか、人為的に投げ込まれたものと考えた。従って本土壙より検出された遺物の本土壙に捨てられた時間は少なくとも同時である。

### 3号土壙（図-7）

本土壙は第1区の南東部に位置する。開口面（確認面—ローム層上面）での平面形は東西約95cm、南北約110cmの不整な楕円形を呈する。深さは約40cmをはかり、底面は東西約75cm、南北約80cmの大略円形である。底面は鍋底状である。形態、規模とともに並みの土壙壙であるが、これより、瓜形を有する土器（三十稻場式）の出土をみたのは印象的であった。埋積土はロームブロックや炭化物を多く混入する褐色土單一層で、人為的な埋没を感じさせる。瓜形文土器の他何片から称名寺式土器破片が検出されたが、それらは埋積土の上層にて出土した。なお瓜形文土器は半欠品であるが正位に埋設されたような状態で出土し、埋葬施設としての使用されたような感を持たせる。但し本土壙は、道路工事によりかなり削平された段階での検出であるので、原形を確実におさえることはできなかった。

### 4号土壙（図-6）

本土壙は、第1区の北東端より検出された。国道側溝により北半の調査は不可能であった。開口面（確認面—ローム層上面）は径約130cmの大略円形を呈している。断面形は上が小さく、下の大きい袋状を呈している。底面までの深さは約170cmと深く、底面は平坦な面で径約166cmの円形である。埋積土（図-6断面図）は、おおむねレンズ状の堆積を認めることができる。土壙の底面はかなり粘土化したローム層に作られ、平坦な面であった。

遺物は埋積土上位（I層下位）より多量の称名寺式の土器片が検出された。以下には

検出されなかった。I層は土壤の埋没の最終的な段階で堆積したものであり、遺物は流れ込みの可能性を考えなければならないのであるが、遺物そのものには時期的な差は認められない。

#### 5号土壤(図-6)

4号土壤の西側に隣接して検出されたものである。調査の結果、大小2つの土壤の切合いか確認された。開口面(確認面→ローム層上面)は、大は径約210cm、小は径約85cm、深さは大は約110cm、小は75cm、底面は大は径220cm、小は約110cm。小は形状的に上小下大の袋状を呈している。埋積土は大については、かなり不規則な堆積である。平面形についても大土壤は不整な形であり、がたがたした感じを持たせる。或いはいくつかの土壤が重複したものであったかもしれない。小土壤については埋積土の調査はできなかった。

遺物は双方ともに顯著なるものはなく、小土壤より若干の土器片(図-42の5、6)が見られるのみであった。

#### 6号土壤(図-8)

本土壤は第1区のほど中央にて検出された。開口面(確認面→ローム層上面)での形状は東西約120cm、南北約112cmの不整な橢円形を呈する。また北半は浅く広いくぼみの一部となっているため約16cm低くなっている。開口面から底面までの深さは約150cm、底面は東西約145cm、南北148cmの不整な円形であり、平坦な面である。更に底面中央部には、径約35cm、深さ約18cmのピットが確認された。断面の形状からすると、いわゆる袋状土壤である。埋積土(図-8、断面図)は、おおむねレンズ状の堆積を示しており、自然の埋設と考えられるものであり、上層部には僅少な炭化物、微細な骨片が見られる。下層ではローム粒の混在が著しくなる。

遺物は埋積土上位(I層下位~II層)より土器片(称名寺式期のもの)が何片か検出された。

#### 7号土壤(図-9)

本土壤は2号土壤の西側すぐにあるものである。開口面(確認面、ローム層上面)での平面形は東西約1.5m、南北約1.65mの橢円形を呈している。深さは最深部で約95cmをはかる。断面形はいわゆる袋状を呈しているが、中間部分でややふくらむ形態となっている。底面中央部には、東西約60cm、南北約46cm、土壤底面よりの深さ20cmの小ピットが検出された。この小ピットの断面形はほど鍋底状を呈しており、西半部分から土壤の底面にかけて厚さ5.5cmの焼土の堆積を見ることができた。焼土は本土壤が、炉穴様のものとして長い時間使用されたようなしっかりした堆積を示しているのではなく、一時的に燃焼を

うけたものようであった。但し焼土が底面直上より層をなして検出されたことは、本土壙の使用当初の段階に伴うものと考えられる。底面中央に穿たれた小ピットも、この焼土と何等かの関連があったものではないだろうか。類例は多くは知らないが、黒羽町浅香内8H遺跡F1の土壤に見ることができる。(栃木県立黒羽高校社会部「浅香内8H遺跡」昭和50年2月、15ページから18ページ)、土壤内より出土した土器の時期は本土壙のそれよりかなり先行するが、底面中央部北よりの小ピット内の焼土について、小形の掘り込み炉とみて、袋状土壤に初生的に付随するものであろうとし、その用途についてはよく判らないとしている。本土壙についても用途を考察するのに積極的な論拠はもてないが、本土壙の焼土については、厚さが5cm程度と薄く、多少ローム層を混入するなど、それ程明瞭な層ではないので、本土壙の使用当初の段階に伴うものとはいえる。本土壙を使用するに中心的なものではなかったと思う。

遺物は、埋積土の上位に含まれていたものであり、土壤の最初の段階に伴うものではない。土壤がある程度埋没した後、一括して廃棄されたような状態で検出されたものである。遺物は全て称名寺式土器破片であった。

#### 8号土壤(図-10、図版-3)

本土壙は、I区の中央部や南寄りにて検出された。開口面(確認面—ローム層上面)での平面形は、東西に長い不整な楕円形である。長径は約90cm、短径は約70cm、深さ46cmをはかり、東西約130cm、南北約190cm、深さ約13cmのなだらかな落ち込みの北側を占めるものである。底面は、東西約76cm、南北約55cmをはかり、ほど平坦な面である。なお底面は、ローム層となっている。

遺物は、打製石斧が三個のみである。石斧は、土壤の底面より出土し、互いに重なり合っていた。うち2個は、後述するが、1個体の分銅型打製石斧を2つに割いで、2個としたものであった。3個とも刃部を南北に向けた状態で出土した。

#### 9号土壤(図-11)

本壙は、I区の南東部、調査区域ぎりぎりの地点より検出された。平面形は、径約115cmの円形であり、深さは約90cmをはかる。断面形はやゝ袋状であるが、明瞭なものではない。底面は平坦であり、径約99cmの円形である。埋積土は単調なものであって、明瞭に何層かに分けられるものではないが、下層になる程、ローム粒の混入が多くなっている。

遺物は、埋積土上層(図-11、断面図)II層より縄文土器片4片が検出されたが、いずれも小破片であるので図示しなかった。

土壤の西端より、1つの埋甕が検出された。埋甕は、西側の立ち上がりの一部を破壊して埋設されたものである。

### 炉 穴 (図-12, 図版-2)

本遺構は、隣接する土壤に切断された形で検出された。I区の北側の境界線に接している他の周辺部の調査は不充分であった。従って西側に隣接する土壤との関連をつかむことはできなかった。平面形（確認面—ローム層上面）は、径約135cm、をはかり、深さ約62cmの底面まで壁の立ち上がりはなだらかである。埋積土内には多量の焼土が確認され、底面に近い程、純粹な焼土が堆積している。更に周辺にまで焼土の広がりを見る事ができた。黒色土を少量混入する埋積土の中からは微細な骨片が検出され、何の骨であるかは不明であるが、小動物を焼いたかのような感をもたせた。土壤内には焼土の堆積の他、何等施設的なものは検出されない。遺物についても上記骨片以外、縄文土器片3片の検出があった。いずれも繊維を含んだ、縄文早期後半の条痕文系の土器片である。

### 1号住居跡 (図-13)

本住居跡の南半は調査区域外にあるため、全容はつかめない。北辺は約3.6m、残存壁高は約37cm。おそらく隅丸の方形を呈していたであろうと考える。主柱穴は2本検出され、いずれも径20cm前後、深さ約30cmである。炉跡は地床炉で、何等施設のない単純なものであった。焼土はあまり厚く堆積してはいない。その範囲は40cm×30cmをはかる。底面は、ローム層中にあり、かなり硬くしまっている。とくに炉周辺はよく踏み固められていて、検出が容易であった。壁溝の検出はない。

遺物は、炉の周辺より1個体分の甕形土器の破片が検出されたのみであった。

### 2号住居跡 (図-14, 図版-3)

本住居跡も北半は調査区域外であったため全掘できなかった。南辺は5.2m、深さは約23cmをはかる。全体的な形態は不明であるが、おそらく隅丸方形であったろう。住居跡の南側と東隅において、2個の土壤を切断しているようである。東隅の土壤は縄文期の袋状土壤であるが、南側については、本住居跡に伴う張出し部分と考えられる。全体的にロームを踏み固めた貼り床で覆われ、とくに東隅の土壤の上は明瞭であった。西隅に径約88cm、深さ約60cmの小ピットがあるが、この部分よりの遺物の検出はなく性格不明である。

南張り出し部を除き、壁下には溝が一列する。（幅約24cm、深さ約8cm）南張出部の北側より木炭が少量検出されたが、焼土などほとんど見ることができず、焼失家屋とはみられない。柱穴は不明である。

南張り出し部は、東西約110cm、南北約110cmをはかり、底面は住居跡床面と同レベルになっている。また張り出し部の東隅に径約50cm、深約40cmの円形ピットがある。

遺物は、甕形土器（土師器）1、壺形土器（土師器）3検出された。出土位置は、南東隅より壺、張出部北より甕形土器であった。

## 2号住居跡内土壤（図-15）

2号住居跡により開口部は破壊されていた。そのためその形状規模ともに不明であるが袋状を呈していたものと考えられる。確認された平面形は長径約300cm、短径約230cmと梢円形である。壁は確認面下40cmで最大となっており、320cm×250cmをはかる。底面はほぼ平坦面で、260cm×240cmである。底面南西部に径約60m、深さ約25cmの小ピットが穿たれていた。

埋積土は、上層が2号住居跡の貼り床となっているロームのかなり硬いものがあり、以下、黒色土にローム粒の混入した層が続き（下位になる程ロームの混入は多くなる。）わずかに木炭を含む。

遺物は埋積土中位より、纖維を含んだ土器片2片とチャート製の石器1点があつた。

## (3) 遺物について

### 1号土壤（図-37、図版-16）

1は、底部の欠損した深鉢である。土壤の中央部に横位の状態で検出されたものである。平縁で口縁下に一条の横走する沈線を持ち、頸部のくびれが弱くスマートな形態である浅いヘラ描沈線によって文様の区画がなされており、沈線間に無節の繩文（L）を充填する。文様の構成は渦巻文、7字文が基調となるが、割付がうまくなく同一文様の繰り返しは見受けられない。また頸部文様帯は上半部下半部とはっきりと分割されない。

2～5は称名寺式期の口縁部近くの破片と胴部の破片である。4を除いて他のものは、浅いヘラ描沈線によって曲線的に区画され、その中に繩文を充填させている。4は称名寺式期の口縁部及び把手に利用される文様である。7は、ミニチュアの壺形土器であり、粗雑な作りで文様は見受けられない。

7を除いて焼成はいずれも良好である。

6は、文様からみて、称名寺期のものと考えにくい。比較的厚手の土器である。

### 2号土壤（図-38、図版-17）

1の口縁部は無文に作り、かすかな波状を呈している。波頂部には小さな突起が見られる。口縁無文帯と胴部文様とは微粒起によって区別される。胴部文様は、地文に繩文を持ち、口縁の波頂部に対応して「U」状に、谷部に対応して「V」状に細いヘラ先による沈線が施され、沈線間を磨消している。下半部はヘラによって荒く仕上げられ文様はない。焼成は良好。表面黒褐色、裏面褐色。

2は、胴部中位の大きな破片から復元実測したものである。弱いくびれ部に、地文の繩文に貫入するような横位の磨消帯が見受けられる。磨消の両側には微隆起が認められるが、

これは磨消した結果できたものであろう。裏面はよく磨かれており、丁寧な作りである。焼成良好、色調黒褐色。

3~13は本土壙より検出された土器片であるが、大きく二つのタイプに分けられる。その一つは、8、9のように口縁に無文帯を施し、その下に微隆起線を横に走らせる。加曾利E式末期によく見受けられるもの、一つは称名寺式期のものである。更に称名寺式期のものは、3~5、11、13のようにヘラ描の浅い沈線によって区画されその中に繩文が充填される類と、6、7のように沈線によって区画された中に刺突が施されるものの二タイプある。10の口縁部片は流れ込みの可能性を考えなければならない。

本土壙出土土器群で注目すべきことは、1~2、8~9、12のように単独で検出されれば、加曾利E末期と目されるのであらうものと、3~7、11、13の明らかに称名寺式期とされるものの併出であろう。長時間に亘る土壙の埋設の結果そうなったのだといわれれば反論の余地はないが、同様に加曾利E末期と称名寺式期の併出した例として、埼玉県志久遺跡第8号住居跡出土土器群をあげることができる。加曾利E末期の細分の可能性を示唆しているものであろう。詳しくは後述する。

### 3号土壙（図-39、図版-18）

1は、土壙内上層の方から埋甕のように正位の状態で検出された。本土壙は調査を受ける以前にかなり削平されていたので、土壙内充填土上位から検出されたとはいえ、その削平を考えれば、土壙に伴うものと考えて良いと思う。器形的な特徴は口縁部のかすかな外反と口唇内側のわずかな突出、胴部が円筒形であるがやゝふくらみを見せること。文様の特徴を挙げると、口縁に無文帯をつくり、一種の構状の把手をつけると同時に胴部との境界に断面台形の隆起線を貼付けること、胴部以下は全面に明瞭な瓜形を斜位に施すことである。瓜形は人間の瓜を利用したらしく、一部に指文が残っている。胎土は砂粒を多く含み、表面ざらざらした感じを受けるが、焼成はかなり良い。色調は表面黒褐色、裏面淡褐色である。

2、3は称名寺式の土器破片であり、両者とも曲線的な沈線による区画内に刺突が施されている。2は区画の上と左に隆起線が貼付けられ、その上に刻みが見られる。

1については、口縁部に無文帯を作り、胴部との境に隆起線を持つ口縁にある構状の把手など、繩文中期末から後期初頭の土器との類似性が高いが、胴部全面に瓜形を付すなど、少なくとも本県出土の中期末から後期初頭の土器群の中から派生し得るものではない。まだ充分に検討していないが、関東一帯から福島県にかけても同様であろう。おそらく輸入品と考えられる土器である。新潟県長岡市三十稻場遺跡出土後期初頭の土器を標準として、地方的な分布を示す三十稻場式土器の中に刺突文、瓜形文を付すものがあるという話を聞く。それと対照できるかもしれないが、今のところ不明といわざるを得ない。ただ、図の

通り本土器と、称名寺式の土器が本遺跡において併出することは、注目すべきことであろう。搬入品ということは、そう簡単にいえる性質のものではない。また三十稻場式と対照できるとはい、器形的には純粋な三十稻場式のものではないと思う。

#### 4号土壤 (図-40, 図版-18, 19)

1~4は称名寺式の把手である。それぞれ形態は異なるが、「C」字形を二つ向かい合わせたような貼付或いは造り出しを持つことが共通の特徴である。また口縁は把手を波頂とした波状口縁であり、口唇部が内側に突出すること、またそこに円形の穴をもつことも大きな特徴であろう。「C」字形の貼付或いは造り出しあは、2は内側に3, 4は外側、1は上に作られており、1, 4においては「C」字形の上に二つの刺突とそれを結ぶ沈線が見られるが、2・3はない。形態的には、1は筒状、2は橈状の把手を思い起こさせるなど、立体的な造作であるが、3, 4はかなり平面的な感を持つ。1, 2, 3には、浅いへら描沈線による区画が見られ、1, 3はその中に繩文が充填される。

5, 6, 8は称名寺式土器の口縁部破片である。5, 6は波状口縁であり、口唇部が内側に突出しその上に円形の穴をもつ。8は口唇の内側への突出が見られるが、平縁であろう。5には、口縁に突起があるが、そこから一条の隆起線が円形の刻みをもって垂下する。その両側に浅い沈線によって区画され中に繩文の充填される区画文様を持つ。7は口縁部に幅広い無文帶を持ち、直下に微隆起が作られ、以下繩文が施文される。9は浅鉢形土器の口縁部破片と考えられ、称名寺式土器の中に含まれよう。

焼成は2, 7を除いてかなり良好。色調は2, 5, 7, 9が淡褐色から淡赤褐色、3, 6, 8が黒褐色、1, 4が褐色である。

#### 5号土壤 (図-42, 図版-19)

本土より出土した遺物はあまりなく、図示した2破片の他、土器小破片があるのみである。5, 6とも称名寺式の口縁部破片である。5は平縁で口唇部内部に突出がある。6は平縁であり口唇の形は単純に丸まる。いずれも破片であるので文様图形は不明であるが、双方ともへら描沈線による区画がなされている。5の区画は直線的なものと、左下の方で「J」字形あるいは渦巻文が見受けられ、6は曲線的な区画が見られる。5, 6とも区画内に繩文が充填される。焼成は双方とも良好であり、色調は5は褐色、6は淡褐色である。

#### 6号土壤 (図-41, 42, 図版-19)

土壤内埋積土上層より検出されたものを図示した。この他には微細な骨片、土器小破片の出土があったが図示しなかった。上層よりの出土とはい、土壤の検出が道路工事によりローム層上層にまで削平された時点であるたので、実際のところの土壤内における遺物

の出土位置は不明といわざるを得ない。

図-41は、深鉢形土器の口縁下部から腹部にかけての大破片である。もともとの器形は、口縁が内彎し、頸部でくびれ、腹部のやゝ張るものであったと思う。頸部に横走する一本の隆起帯を貼り、その上と下を二本単位の隆起帯によって、「H」状、曲線的（渦巻状？）に区画している。区画内不定方向に繩文が施されるが、上半と下半では繩文原体の節の大きさが異なっているのが注意される。これらの施文順序は次の通りである。隆起帯を貼り付ける。区画内に繩文を施す。隆体の両側及び内側を磨消す。焼成はかなり良く、なり　　色調は黒褐色を呈する。大木9式的な文様構成をもつものといえる。

図-42-1は口縁部破片、3は口縁部近くの破片、口縁部を無文につくり、口縁から腹部以下平行する隆起線で、逆「U」字形の磨消部を地文の繩文に貫入させている。1は逆「U」字形の上部に小突起をつくる。口縁はこの突起を波頂としてかすかに波状を呈している。2は口縁部直下に一条の沈線を施し、以下沈線による区画と区画内の繩文、円形の竹管文が見られる。4は、ヘラ描による浅い沈線によって区画され、繩文の充填と無文部が交互に繰り返されるなど、称名寺式の腹部文様に類似する。焼成は3を除いて良好、色調は、3は淡赤褐色、4は褐色、5は黒褐色、6は淡褐色を呈している。

#### 7号土壤(図-43、図版-20)

本土より出土した土器は、破片ではあるが北の内遺跡より出土した称名寺式土器の種類をある程度満足するものであり良好な資料である。ひとつは平縁で沈線による区画内に刺突が施されるか無文であるもの、平縁で区画内に繩文が充填されるもの、多少の波状の口縁を有し区画内に繩文のされるものの三種である。(本遺跡における称名寺式土器の分類については後述する。)

1は、平縁で浅いヘラ描沈線内にヘラ先によって刺突が施されている。2は波状口縁をもち、口唇の内側への突出がうかがえる。区画内には繩文が充填される。3は平縁で、沈線による区画内に燃り方の弱い繩文(L-r)が充填されている。4~6、8は、腹部および口縁近くの破片であるが、区画内には4は燃り糸、他は単節の繩文(L-r)が充填されている。7については、称名寺式のものというより、縄の内式の文様に似ている。1の文様图形について腹部上半は「V」字状の区画と垂下する「J」字文或いは渦巻文の組み合わせであろう。(勿論これは破片であるので確実性を欠くし、胴下半の文様は不明である。)2は波頂部に対応した釣針を逆にしたような区画、4には「J」字状の区画がみられる。焼成は7を除きみな良好、色調は1、3が淡褐色と黒色の混り合い、他は黒褐色を呈する。

#### 9号土壤(図-44、図版-21)

土壤内より出土した遺物は少なく、土器小破片4片以外のものはなかった。これらのもの

のについては文様等別に見るべきものはなかったので図示しなかった。ただし、土壇の東に接して埋甕が検出されたのでそれについて註記する。土器は胴部以上を欠損するものである。大きな底部から直線的に立ち上がる形で、表面には縄文が見られる。焼成良好、底部近くには二次的な焼成部分がある。

#### I 区、出土造構不明の土器 (図一45、図版一21)

1は、深鉢形土器の頸部から胴部にかけてのものである。頸部に隆帯が横走し、胴部文様と区画している。胴部には二本一组で垂下する隆帯と、波状の隆帯が施される。地文は筋のあらい縄文(L r)が頸部下半まで施され、上半は削られ無文化している。焼成はあまり良好でない。色調赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含む。

2は、胴部下半から底部にかけてのものである。やゝ頸部に張りを見せ、内外面とも丁寧に磨かれている。どのような文様構成をもつか不明であるが、浅い沈線によって区画された渦巻文が目立っている。区画内には縄文(L r)が施されるが、方向に統一性のみられないことから充填縄文であると考えられる。このような文様構成は、大木10式の古い段階に類似する。焼成は良好、色調内外面、赤褐色とする。

3は、称名寺式の深鉢の胴下半部である。文様の特徴は、浅いヘラ描沈線による曲線的(「J」字文)な区画と、区画内の刺突である。焼成は余り良くなく、淡褐色を呈している。

#### 1号住居跡出土土器 (図一46、図版一22)

口径22.1cm、器高39.9cm、底径 7.5cm。

ほど完形の土師器甕形土器である。地床炉の周辺に押し潰されたような状態で出土した。頸部以上は大きく立上がり、「く」の字状に外反するが、外反の度合は和泉期のそれ程強くない。胴部最大形は中位よりやゝ上にあり、底部に向かってのすぼまり方が急である。底部は、器全体に比して小さく安定性に欠ける。底面には木葉痕が残される。

内面、口縁部に横方向の粗いハケ目(幅15~20mm)、胴部上半、幅3~5mmの横方向の粗いヘラ先による調整、下半はヘラによる撫で、外面、口縁部上位横撫で、頸部から胴部上位斜方向のハケ目、胴部中位から下位、上から下へのヘラ磨き(幅3mm前後のものによる)中位においてヘラ磨き以前にハケによる調整が行なわれた。

色調、赤褐色(一部黒褐色)。胎土、砂粒(石英粒含)を多量に含む。焼成、比較的良好である。

器肉の厚さは、胴中位にて約5mmとかなり薄い。器肉の調整痕は観察できなかったが、器壁の調整は綿密になされている。土器製作の念入りさを窺わせるのである。  
五領期末のものとみてよいと思う。

### 2号住居跡出土土器（図-47、図版-22）

土器部壺形土器1、土師器壺形土器3である。

壺形土器(1)は、口縁部の大きく「く」の字状に外反するものである。胴部表面には浅く刷毛目が全面的に施されている。壺形土器(2)は、口縁部の外反するもので、内外面ともに赤彩されている。壺形土器(3)、(4)は、口縁部が内彎気味に開くもので、器形的にも、調整の上でも同巧のものである。それぞれの土器の計測値及び特徴は別表(43頁)にまとめた。

### 1区、炉穴、2号住居跡内土壤出土土器（図-79）

1～4が炉穴より出土したもの、5、6が2号住居跡内土壤出土のものである。

いずれの土器破片も胎土中に纖維を多量に混入している。このうち1、4、5はそれぞれ太さは異なるが条痕が施されるものである。1は口縁部の破片であり、表裏全面に横方向の条痕が見受けられる。表面の条痕は裏面に比べて細く、横方向を主とするがかなり乱雑な施され方である。表面は比較的太い条痕が施されている。色調は表裏とも黒褐色を呈し、焼成はあまり良くない。4、5は表面のみにそれぞれ横方向、縦方向に条痕が施されており、5については裏面にも浅い条痕が見受けられる。両者とも色調は赤褐色、焼成は比較的良い。2、3は表面に浅い繩文の施されたものである。両者とも繩文は二条ずつ一組となって横位に見受けられるが、どのように施文したかよくわからない。色調、2は赤褐色、3は黒褐色、焼成はあまり良くなくもない。6も、2、3と同様である。

1、4～5は早期末の条痕文系の土器であろうが、2～3、6については良くわからない。  
（細谷正策）

## 2 II区の発掘調査

### (1) 調査状況（図-3）

2区の発掘面積は約500m<sup>2</sup>でローム層上面まで削除した地点で遺構確認をした。検出遺構の数は他の地区より少なく、特に土壤群の確認は少なかった。主な遺構としては、鬼高峰期住居址1基、繩文期の土壤1基、袋状土壤1基、埋甕1基である。これらについては、後で1つづつ詳細する。

上記以外に柱穴様のピットが検出されている。埋積土を見ると黒色土がほとんどでその

中にローム塊が混入しているものが多い。いずれも平面形は方形であり、埋積土から見る限り後世のものと考えられるが、それらの並び方には規則性はなく、性格はつかめなかつた。他にいくつかの方形、円形の土壤を検出したが、埋積土は全て黒色土であり、出土遺物も全くない。後世のものと考えた。

## (2) 検出された主な遺構

### 1号土壤 (図-16)

プランは、不整形な梢円で、長径約4.2m 短径約2.3m、深さはローム面より20cm~50cm掘りこんで、底面は凹凸がはげしい。また4つのピットが検出されたが、柱穴と考えるのは早計である。遺物は縄文土器片が出土しており、中央より北側付近より、底面直上から前期関山期のものと思われる土器片が出土している。埋積土中より窓の内式土器片も出土しているが、いずれも小片であるので図示しない。前期土器片が底面より出土することにより土壤の構築時期が推定できる。しかしこの土壤が何を意味するものであるかは不明である。

### 2号土壤 (図-17、図版-4)

円形、深さ80cm前後の袋状土壤である。ローム上面より60cm下がった部分がもっとも広くなっている。また、北東側は底面からななめに円形状に一段と深く掘りこんである。遺物は縄文土器片が投げてられたようにして埋積土中位よりかたまって出土していた。そのほとんどが掘之内I式期のものと思われる。炭化物等の出土は見られなかった。石皿の破片も出土していた。

本土壤の構築時期は不明であるが、土壤内より検出された土器については、今回調査した中で、縄文時代のものとしては最も新しい時代のものである。

### 3号土壤 (図-18)

全体的には、径約158cmの円形であるが、検出した時点では、ローム層まで削平した段階のものであったため、東側のプランをつかむことはできなかった。残存する壁高は最深部でも20m前後しかない。土壤内の北西部には、土壤底面から約30cm程掘り込んで、径約70cmの円形のピットが検出された。

出土遺物はほとんどなく、土壤南側において深鉢の口縁部が伏せられたような状態で検出された。しかしこれは、底部以下は道路工事のための削平の段階で破損されなくなっている。伏墳の下はやはり、深さ30cm、径約50cmの円形ピットが掘られており、黒褐色にローム粒混りの土が充填されていた。

深鉢は加曾利E III式の初頭のものである。

### 2号土壙西側の埋甕 (図-19)

道路工事の削平のためかなりの部分が破壊されたものである。埋甕使用土器にその破片から称名寺式土器の底部と考えられるが、文様等観察することはできなかった。よって土器の復元、また破片の拓本など、底部近辺のみの破片であったため図示しなかった。

### 古墳時代住居跡 (図-20、図版4、5)

住居跡は、その中央を南北に暗きよ設置のため切られていて、一部不明な点があるため、全体のプランは確認できなかった。検出できたのは、約5.64mの東壁全体と中央が一部欠損している約5.56mの北壁である。西壁と南壁は、コーナー部が欠損しているため、正確な長さはつかめなかった。全体としては隅丸方形であると思われる。主軸の方向はN85°Eである。床面はローム層を約40cmほど掘り込んで、壁はやや外反している。柱穴は3個検出され径は32cm~48cm、深さは96cm~108cmあり、柱心間は東側が2.88m、北側が2.68mあり、覆土には多量のローム塊が混入していた。また西壁にはむなもち柱の柱穴と思われるピットが検出された。径は約70cmで深さは床面より約30cm掘られていた。床面のようすはあまりはっきりつかめなかつたが、北東部はからカマド付近にかけては、かなり匂い面がつかめた。カマドは、東壁のやや南寄りにつくられ、天井部はつかめなかつた。焼土もあまり確認できなかつた。貯蔵穴は南東隅にあり方形ですりばち状になつてゐた。また周溝がまわっていた。

遺物は全体から出土していたが、貯蔵穴付近より壺・高壺が多く出土していた。

## (3) 出土土器について

### 1号土壙 (図-48)

全て織維を多量に含み、織文が表面に施文され、焼成の甘いもろい土器片である。本土壙の底面より出土したもので、土壙の廃棄時期を考える際有力な手掛かりとなるものである。土壙の上層の方からは、土壙がある程度埋まった段階で流入したと考えられる波状の浅い沈線が全面的に施された堀之内式期の破片と考えられる土器片が出土した。

1~6いずれの破片も織文の施文は浅く、明瞭ではないが、3の破片には一部羽状を呈する様相が見受けられる。1は横位の半截竹管文、斜位の2条1組の織文が見られる。

総じて関山式期のものと考えられる。

### 2号土壙（図-49、図版-23）

1は、口径26.9cm、胴部最大径25.5cm、残存器高38.0cmで、底部は欠損している。器厚平均約0.8cmである。胎土は砂粒混入で焼成は普通である。文様をみると縄文と繩文の間が所々あいていて、また方向も一定していない。頸部のすぐ下は右から左へ斜行している。しかし胴部は水平方向や左から右へ斜行しているものもある。頸部と胴部を分けるのに二本の沈線が走っている。また沈線は頸部の縄文とそうでない部分との区分けにも使われている。これら施文順としては、器面をある程度割り付けし、縄文が必要な所だけ施文し、沈線をつけて、ドーナツ状の粘土をつけたものと思う。

2は、口径23.0cm、胴部最大径20.3cmで器高は胴部から底部が欠損しているため不明である。器厚は0.8cmを数える。文様は縄文の原体が小さく、頸部に隆帯を貼って口縁部と胴部にわけ、その後縄文を施文している。底部近くは施文していない。また縄文と縄文の間があいているがすりけしではなく、またほとんど縄文は重複していない。器面内側頸部に段がつく様な所もある。

3は、口縁部から頸部にかけての破片であり、やゝ小型ではあるが、1、2と同様のものである。

3個体とも壺の内I式期のものであろう。

### 3号土壙（図-50、図版-23）

頸部のくびれが少なく、口縁部は内彎する、キャリバー形のくずれた器形である。口辺部は無文に仕上げられ、直下に沈線が横走する。沈線下の文様は二列の刺突、沈線による縦長の区画と区画内の縄文施文、各区画間の磨消と上端の折れ曲る沈線文である。

焼成、比較的良好である、色調は褐色～黒褐色を呈する。

加曾利E III式期初頭のものであろう。

### 古墳時代住居跡出土土器（図-51、図版-24）

出土遺物は土師器のみであり、主としてカマド周辺、貯蔵穴、北東隅など住居跡の東半より多く出土している。

甕形土器（1、2）は長胴化傾向にあるもので、胴中位に最大径をもつ。口縁部はゆるやかに外反する。

鉢形土器（3）は、口縁が短く外反し、胴部以下半球状のものである。底部は平底に近い丸底。

高环形土器（4、5）は、半球状の埋部と、短いふくらみの小さい脚部をもつものである。埋部内面に放射状の暗文が目立つ。

环形土器（6～10）は、口縁部と体部との境界に明瞭な段を持ち、口縁の直立するもの

である。いずれも、薄手で均整がとれた形態であり、調整の仕方は全く同じであった。

塊形土器（11）は粗雑な作りである。

それぞれの土器の特徴及び計測値は後に別表（44～45頁）にまとめた。（尾花源司）

### 3 III区の発掘調査

#### （1） 調査状況（図-3）

第III区は、五つの調査区の中で最も狭い調査区である。南北は国道の側溝によって、東西は暗渠排水路によって区切られており、調査面積は約120m<sup>2</sup>であった。国道のNo53中心杭が本区のほど中心にある。

検出された遺構は称名寺式期の深鉢を利用した屋外埋葬施設が3基、加曾利E II式期の深鉢を利用しての伏塚が1基、土壙2基、柱穴様のピット11基である。

このうち注意すべきものは1号・2号埋葬施設とその周辺の柱穴様ピット及び遺物の出土状況である（図-3参照）。その第一点は同様な文様の称名寺式土器（埋葬施設として利用されたものも含む。）が密接して検出されたこと。第二点は、上記の土器の出土レベルとはほど同じくして、打製石斧、石槍、土製の重鉢の検出があったこと。第三点は、これらと接して平面形円形の柱穴様ピットが4基検出されたことである。これら三点をもって考えられることは、この周辺の遺構・遺物（周辺とか密接ということを客観的にとらえるのは難しいことであるが。）は互いに何らかの関係を持つことを意味するのではないかろうか。例えば、埋葬施設を中心にした埋葬にかかる祭祀のひとつのまとまりとしてとらえられるのはしないだろうか。しかし、この周辺といつてもどの程度の範囲なのかははっきり限定することはできないし、埋葬施設とその他の遺構・遺物を結びつけることは今はできない。

上記の4基の柱穴様ピットの他、III区よりは同様のピットが7基検出されているが、配列の仕に別に規則性はない、大きさ深さ等もバラバラである。その上に遺物の出土は皆無であった。時期的に埋積七が栗色を示すことから縄文期の所産と考えられたのみである。

東側の暗渠排水路にかかる歴史時代の住居跡が確認されたが、これについては第IV区にて状況説明する。

#### （2） 検出された主な遺構について

##### 屋外埋葬施設

###### 1号埋葬（図-21、図版-6）

ほど完形（胴部一部欠損）の称名寺式深鉢を正位に埋設したものである。埋設のための

掘り方はあまり明瞭ではないが、深鉢の外形に沿った形でローム層まで掘り下げている。深鉢の底部つまり掘り方の下底は鹿沼バミス層にまで達している。深鉢の頸部一部欠損は、周囲に欠損部に見合う破片が検出されなかったことから、意図的な破損とも考えられる。更に、本埋甕施設の検出面、口縁部に接して石灰岩製の板石が検出された。この板石は西方約1.4mの地点、2号埋甕施設の近くに検出され板石と接合する。或いは埋甕の蓋としての使用が考えられる。

#### 2号埋甕施設（図-3、図版-6）

称名寺式深鉢の口縁部から頸部にかけての破片が上から押しつぶされたような状態で横位に検出された。本遺構は埋甕施設というより、土器片の単独の出土といった表現が適切かもしれない。またこれに付属して土壤・掘り方等は検出されなかった。本遺構を埋甕施設としたわけは、近接して同巧の深鉢を利用した埋甕施設があること、前述のようにこの近辺にかなり深いかかわりをもった遺構・遺物が検出されたことなどから、本遺構も埋甕施設と同じ意図をもって設置されたのではないかと考えたからであった。

#### 3号埋甕（図-3、図版-7）

称名寺式深鉢の頸部中央以下が、正位に埋設されたものである。底部の穿孔はない。埋設のための掘り方は明瞭ではないが、下底はローム層上面にまで達している。掘り方が明瞭でないのは、掘ったあとすぐに土器を埋設し埋めたからであろう。

#### 4号埋甕施設（図-3、図版-7）

加曾利E II式深鉢の口縁部から頸部が、口縁部下の逆位の状態で検出されたものである。更にこの土器は65cm×53cm、深さ約20cm（残存する深さである）の不整円形の土壤中に埋設されていた。時期的にも、埋設の仕方も他の埋甕施設と異なっているが、埋甕の一つの形として取り上げたものである。この埋甕施設の性格などは分からぬが、他のものと同様単独に屋外に埋設されていた。用途の面では他の埋甕施設と同じものと考えられる。

### （3） 土 壤 に つ い て

#### 1号土壤（図-3）

調査区の北壁に接して検出されたものである。平面形は大略長方形を呈し、長さ約290cm幅約130cmをはかる。埋積土中より縄文土器片、土師器片が數片出土しているが、いずれの土器片も小さく、磨滅が激しいため図示しなかった。またこの土壤の埋積土は黒色土であり、他の縄文期の土壤のそれが、ローム層漸移層と見分けのつかないものであった。

に比べて、本土擴はごく新しい時期のものであると考えられる。

#### (4) 出土土器について

##### III区屋外埋甕使用土器（図-52、図版-25）

1号埋甕使用土器、最も残存状況の良好なものであった。胸部に一部欠損があるが、ほぼ完形の称名寺式土器である。ほど完形の称名寺式土器は本遺跡に他にはない。口縁は平縁で、頸部のくびれはかなり緩やかである。口縁部は頸部のくびれ部から少々外反気味に開いている。胸部はその上半に最大径を持ち、心持ち肩の扱った形態を持つ。全体的にみれば、器高に比べて、かなりスマートなプロポーションを持っていいるといえる。口縁部下から胸部上半にかけて、浅いヘラ描沈線による区画と区画内にはヘラ先による刺突文が施される。文様の構成は、口縁部に三角形、頸部に菱形、胸部には逆「V」字形の区画が表面に4個ずつ交互に割付けられるものである。それぞれの区画内には、「V」字形、長楕円形、首長竜の首のような形の無文部が沈線によって作られる。焼成はあまり良くない。色調は表面は黒褐色、淡褐色、赤褐色の部分が混在し、裏面はほど褐色である。

2号埋甕使用土器、頸部から口縁部にかけて残存していたものである。前述のようにこれは埋設された形で検出したものではない。しかし、1号埋甕と近接して出土したものであること、文様图形は異なるが、1号埋甕使用土器と同様沈線による区画内に刺突が施されることである。また本遺跡においては、称名寺式土器は埋甕として埋設される例が多くのことなどから埋甕使用土器とは断言できないまでも、埋甕施設とかなり深い関係にあると考えた。土器の特徴は次の通りである。口縁は平縁、口辺部は無文、文様图形はヘラ描沈線による直線的な区画と縦位の曲線的な区画を一単位とする4回の繰り返し。区画内にはヘラ先による長い刺突が施される。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

1号埋甕使用土器、2号埋甕使用土器とともに、表面全体をまずヘラで丁寧に磨いてから沈線そして刺突を行っている。

3号埋甕使用土器（図-52の3）口縁、平縁。図示したものは復元実測であるが、頸部のくびれ、胸部のふくらみともに弱く、かなりスマートなプロポーションである。文様の图形とその構成は欠損部が多いため不明であるが、残存部分で見る限り、浅いヘラ描沈線による区画文のみであり、繩文の充填、刺突文はない類であろう。第4区の2号埋甕使用土器も同じものである。焼成は良好。色調は黒褐色を呈している。

##### 4号埋甕使用土器（図-53、図版-25）

頸部以上を復元実測したものである。口縁部には隆起線と沈線による楕円形の繩文区画帯、逆「J」字の貼付けを施している。胸部には幅広の磨消帶と繩文帯を交互に配列し、

縄文帯には波状の沈線を垂下させる。口縁部は一部欠損するが、波状を呈し、把手を4個持っていたと思われる。把手間の隆線上、口唇直下の隆線上に小さな突起が見られる。器形はキャリバー状の少々崩れたようなプロポーションである。焼成は良好、色調褐色。典型的な加曾利E II式土器である。

## 4 IV区の発掘調査

### (1) 調査状況 (図-3)

IV区は、東より2番の調査区である。南北は国道の側溝によって、東西は暗渠排水路によって区切られており、調査面積は400m<sup>2</sup>であった。

検出された遺構は称名寺式の深鉢を利用した屋外埋甕施設が6基、不整形な土壙（縄文期のもの）9基、柱穴様のピット（平面形円形）4基、同（平面形方形）7基、歴史時代住居跡1基、同土壙1基、溝状遺構1基であった。このうち埋甕と、歴史時代住居跡及び土壙については後で個別に記載するので、ここでは本区の全体的な状況と注意すべき点を記すこととする。

埋甕施設は、IV区の東半に集中している様相が見受けられ、III区検出のものとは間隔があるので、一線を画するような有様である。しかし、これは道路敷以外の調査はなされていないので断定できない。使用された土器にはIII区のものと大きな時期差はない。

縄文時代の土壙の分布は、本区においては、埋甕施設の西側に多く集中している。密度からいえば、I区ほどではないにしても、II、III区よりはかなり高密度である。線的に見れば土壙はI区に集中し、II、III区に疎となりIV区に至って再び集中する様である。また更にV区に至って少なくなるようである。しかし、IV区の土壙は配列の仕方に規則性を読み取ることはできない。更に形態においても不整な円形、橢円形を呈するものとまとまった形ではないものと多岐にわたり、規模の点でも統一性に欠ける。遺物はどの土壙からも土器小破片が何片かその埋積土の上層より検出されるだけに目立ったものはない。（時期的には称名寺式期のものが多い）また発掘調査中、これらの土壙の調査は次の点でかなり困難であった。ほとんどの土壙は深くても30cm前後と浅く、ローム層上面まで掘り込まれているが、ローム層上面の色調及び硬さは土壙の埋積土のそれらと大差なく、余程注意しなければ判別のつかないものであった。これは土壙の埋没が長時間に亘ったものではないことを示すものではなかろうか。つまり、土壙が構築された後、短時間のうちに再び埋められたのであろう。何のためにかは勿論不明である。従って、土壙埋積土中より出土するもの及びその出土状況は土壙の構築時期、土壙の用途を知る上で重要なものとなるであろうが、前述のように出土するものは土器破片のみであり、しかも少ないため何も言うべきものを持たない。

但し、出土した土器破片の多くが、称名寺式期のものであったことは、埋蔵施設と何等かの関連を考えることができはしまいか。

柱穴様のピットで、注意しなければならないのは調査区の北東隅に7基検出された平面形方形のものである。7基のうち2基は、いくつかのピットが重なり合っているものである。各ピットとも埋積土は黒色土1層である。深さは浅いものは18cm、深いもので80cmであった。平面形は、いずれも40cm×40cmの方形である。これはその埋積土からみて歴史時代以降のものとみられるが、その配列の仕方に規則性を読み取ることはできなかった。或いは、すぐ東にある溝状遺構と関連するかもしれない。なお歴史時代土壤内に同様のピットを2基検出したが、この土壤より後に構築されたものと思う。

溝状遺構は、本区東端とI区の西端より二本検出されている。I区のものについては幅約1m、深さ約90cm、断面形逆台形を呈する。出土遺物はない。本区のものについても巾約1m～1.2m、深さ約94cm、断面形逆台形と同様のものであった。遺物は繩文土器の破片をかなり含んでいるが、溝内の埋積土は黒色土（ローム粒を多少混入する）であることから流れ込みであると考えられる。溝状遺構について注意すべきことは、現在のものではあるが、田畠の地区割の方向とは一致していることである。田、畠の耕作に関連のあったものであろう。

以上、IV区の調査状況である。以下主な遺構について個別記載する。

## (2) IV区の主な遺構について

### 屋外埋蔵施設

#### 1号埋蔵（図-22、図版-8、9）

脛部下半から底部にかけての深鉢が正位に埋設されていた。道路工事中砂利敷の終了した段階での発掘調査だったので、深鉢はどのような状態で埋設されたのか知ることはできなかった。以下に記載するIV区の埋蔵施設は同様の状況であった。

埋設のための掘り方は、深鉢の外形に沿った形で地山（ローム層）上面まで掘り下げてあった。確認された段階はローム層と表土との漸移的な層中であったが、掘り方内部の土層との分別が困難だったので、掘り方の平面形をつかむことはできなかった。

深鉢は底部の穿孔はない。外面の文様は脛部下半のみしか遺存していないので見ることはできなかったが、色調、胎土等から称名寺式と考えられる。更に鉢内に大きな土器破片が内部を覆うかのような状態で検出されたが、意図的にそうなったのかは判別できなかつた。

### 2号埋甕（図-24、図版-8）

1号埋甕の南東にあり、3号埋甕と接するような状況で検出された。深鉢の胴部が正位に埋設され、底部は欠損する。或いは底部の穿孔という意味を含ませているのかもしれない。土器の時期は称名寺式期である。埋設のための掘り方は明確ではないが、他の例と同様深鉢の外形に合わせて掘り下げたものであろう。掘り方の下底はローム層の上面に達している。表土からローム層への漸移的な層の上面で検出したが、道路工事によってこの面まで削平されていたことを考えれば、この深鉢が口縁部から頸部を欠いて埋設されたとはいえない。

前述のように2号埋甕は3号埋甕と接してはいるが、断面図（図-24）で観察できるようそれ程時間差がなくそれぞれに埋設されたものであろう。埋設の先後関係は断面からは分別できないが、掘り方の下底の凹凸は同時埋設では現われないと証左と思われるのである。更に第III層にそれぞれの掘り方の重複が現われないのは、それぞれの埋設にそれ程の時間差はないと解釈したのである。いずれにしても、この2つの埋甕施設は互いに深い関係にあるのではあるまいか。3号埋甕使用土器も称名寺式と考えられる。

### 3号埋甕（図-24、図版-8）

胴部下半から底部にかけての深鉢が正位に埋設されていた。底部の穿孔の事実はない。前述のように道路工事による破壊を考えれば埋甕施設の遺存状況は疑わしい。掘り方は明瞭ではないが、下底はローム層上面に達している。深鉢内の土壤の中にわずかに炭化物の混入を観察できたが、その性格については不明である。

2号埋甕と接しているが、その状況については前に記載したとおりである。

埋設用の深鉢については、表面の文様を見ることはできないが、次の点において称名寺式のものと考えられる。土器表面は丁寧に磨いてあること、胎土に砂粒を多量に混入し、あまり焼しまりが良くないことなど他の称名寺式土器と同様であることからである。

### 4号埋甕（図-23）

縄文時代2号土壙の南側で検出された。胴部下半から底部にかけての称名寺式の深鉢が埋設されていた。底部の穿孔はない。埋設のための掘り方は他の例と同様あまり明瞭ではないが、鉢の外形に沿った形で掘り下げられ、その下底はローム層上面にまで達している。

### 5号埋甕（図-25、図版-9）

歴史後代土壙に接して検出された。称名寺式深鉢の胴部下半から底部にかけて埋設されていた。底部は穿孔されていた。埋設のための掘り方は比較的明瞭に残っていたが、歴史時代土壙によって破壊されている。他の例と同様、深鉢の外形に沿って掘り下げられ、そ

の下底はローム層に達している。

#### 6号埋窯 (図-26)

歴史時代1号土壙の南側にて検出された。称名寺式と考えられる土器の底部が埋設されていた。底部の穿孔はない。土器埋設のための掘り方は、他の例と同様土器の外形に沿った形で掘り下げられたものと思うが、断面図で見られるように明瞭なものではない。

#### 歴史時代住居跡 (図-27)

本住居跡は、中央南北に幅50cmの暗渠排水路によって断ち切られている。西半は第III区に、東半は第IV区に含まれる。調査の不手際から、第III区所在部分と第IV区所在部分を別別に掘り下げていったため、ゆがんだ四辺形プランとなってしまった。住居跡四辺の長さは東辺約3.4m、西辺約3.7m、北辺約4.3m、南辺約5.1mを測る。但し西壁は不明瞭であった。平面形は南辺を下底にした台形状を呈する。床面積は約24.9m<sup>2</sup>である。残存壁高は東壁で約30cm程度である。壁脚溝・柱穴は明確にできなかったが、西壁中央に床面よりの深さ約24cm、南東隅の先に深さ約104cmのピットを検出した。その他住居跡内に大小4個のピットを検出したが、いずれも柱穴とは断じ難い。最も大きなピットはその埋積土が栗色を呈していたことから縄文期のものと考える。カマドは、東壁に2基検出したが、北側のものはかなり損傷があったので、南側のものよりも古いものと判断した。南側のカマドは、両袖内と奥に縦長の石灰岩を埋め込んでいる。遺物は、羽釜・甕形土器などの破片が南側カマド周辺に出土し、环形土器は北東隅のピットの周辺と西半に多く出土している。遺物について後述するように、本住居跡はそれ程規模が大きくないのにかかわらず、遺物の出土(主として环形土器)が多いのが特徴的である。また住居跡の掘り方は、調査の不手際があったとはいえ、全体的に粗雑な感じを受けた。(四辺の長さがバラバラであること。壁線が直線的にきちんと掘られていないことなど)更に环形土器の出土がかなりあるのに対し甕形土器や羽釜など煮炊きに使用する土器の少ないことが注目される。

#### 歴史時代土壙 (図-28)

第IV調査区の東側、溝状遺構近くで検出された。長さ約2.79m、幅約1.96mの不整長方形を呈す。最深部の深さは約50cmである。東西断面形は、中央や東寄りが最も深く、全体的にはだらかな曲線を描くが、南北は大略鍋底状、呈している。最深部には焼土層が一層をなし、その上層に炭化物を混入する層がある。これはこの土壙の中で何らかのものが焼かれたことを示している、更に底部焼土層に接して环形土器の出土が確認されたし、覆土中より多量の土師器が出土した。このことは本土壙が上師器の窯として使用されていたことを示唆しているのではないだろうか。

### (3) 出土土器について

#### 埋甕施設使用土器について (図-54, 図版-25, 26)

第IV区より検出された埋甕施設使用土器は総数6個を数える。これらは造構で記載した通り、道路工事によるローム層上面までの削平の後の検出であるので、器形・胴部文様の構成等が観察できたのは2号埋甕使用土器(図-54の1)のみであった。他の5個については、胴部下半の無文部のみの残存でしない。よって、各土器については、特別なものを探してとり立てて記載することはしなかった。なお、土器の時期については、確実な根拠をもって比定することはできないが、胎土にかなりの砂粒(長石粒・かんらん石粒)を混入すること、焼きしまりはあまり良くないことなどから称名寺式期のものであると考える。

2号埋甕使用土器(図-54の1)は、底部及び口縁部を欠損する称名寺式の深鉢である。頸部のくびれは弱く、胴部のやゝふくらむスマートなプロポーションであったと思う。口縁部の欠損は発掘調査実施前の道路工事の状況より不明であるが、底部の欠損は意図的なものである。底部の一部を意図的に穿孔した例は5号埋甕使用土器(図-54の6)にもある。胴部の文様は、浅いヘラ描沈線による区画文である。区画は頸部から胴部上半で抜く、曲線的に施されるものと、下部および上部の丸まるものの二種ある。なお、6号埋甕使用土器(図-54の3)に、ヘラ描沈線の最終部分を三本みることができる。沈線による区画内は無文のままである。器面は表裏面ともヘラによってよく磨かれており、沈線は焼きの後施されている。胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまりよくない。色調は表面灰褐色、裏面褐色、表面の一部に黒色部分ある。

#### 歴史時代住居跡出土土器 (図-56, 57, 図版-27, 28)

羽釜、甕形土器、壺形土器の一部はカマド周辺より出土したが、壺形土器の多くは西壁前、住居跡の西半より出土した。

本住居跡出土遺物数は総計23個体と住居跡の規模に比して多く、全てのものを本住居に居住した者が使用したとは考えられない。これについては後述する。

羽釜(1)は内湾する口縁部をもち、小さなツバが一周する。ツバはかなり小さく、この使用法について少々考えねばならないところである。

甕形土器(2~6)については、4を除き全て明るい褐色系統の色調をもつ。4のみ黒褐色である。また口唇の形態も4以外のものは全て角ばるのに対し、4の先端は丸まっている。これは作り方の違いに由来するものであろうか。

壺形土器(7~19)はいくつかのタイプに分けられるが、詳しくは後述する。いずれも焼成がなり良く、高温で焼かれたものと思う。18は灯明皿として使用されたものである。

高台付壺（20～23）はいずれも比較的高い高台を有するが、23のように壺の広がるものには特徴的である。

内面黒色処理を受けたものは21と22のみであった。

それぞれの土器の計測値及び特徴は別表（46～47頁）にまとめた。

#### 歴史時代土壺出土土器（図-58、図版-29）

1のみ土壺の底面に接して出土した。これ以外は全て土壺の埋積土中に一括廃棄の状態で出土したものである。

壺形土器（1～7）もいくつかのタイプに分けられるが、歴史時代住居跡出土のものとあわせて後述する。いずれも、二次的な焼成を受けており、ひびの入ったものもいくつかある。

高台付皿（10～12）は三個検出されたが、いずれも小型のものである。11、12はヘラ磨きが目立つが、10には施されない。10の皿部外面にはヘラ先による文様がある。

高台付壺（13、14）は二個検出された。14のものには10と同様ヘラ先による文様がある。14は内面に黒色処理されている。

15は壺形土器の口縁部である。

それぞれの土器の計測値及び特徴は別表（48頁）にまとめた。

#### V区遺構に伴わない土器（図-55、図版-30）

1～3は歴史時代住居跡の南側より廃棄されたような状態で出土したものである。

1は、キャリバーの形の深鉢である。口縁部は欠損が多く確実性を欠くが、断面「□」形の隆起線による楕円形の区画が現れる。区画内には縄文が横位に施される。胸部は地文縄文 内に平行沈線を垂下させ、沈線間を磨消している。焼成良好、暗褐色を呈する。加曾利E II式。

2は、キャリバー形の残存する小形の深鉢である。口縁部は無文で、内彎し、直下に二から三条の沈線を横走させる。胸部以下は地文の縄文 内に平行沈線を垂下させている。平行沈線は直線とカーブするものの二種ある。砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好。表裏面ともに褐色を呈する。加曾利E II式。

3は、胸部の破片である。広い無文部と、断面三角形の微隆起による区画が特徴的である。区画内には縄文が不定方向に充填される。焼成良好、黄褐色を呈する。加曾利E III式。

（岩上照朗）

## 5 V区の発掘調査

### （1） 調査状況（図-3）

第V区は台地の縁辺から東へ約125mから160m間に位置する。南北を国道側溝によって、

西側を暗渠排水路によって区切られている。No54国道中心杭が本調査区のほぼ中心にある。検出遺構は縄文中期後半の住居跡5基、縄文中期末の土壙3基（5号住居の東壁の土壙を含めれば5基）、同中期末の深鉢を利用した屋外炉施設2基；歴史時代に含まれると考えられる土壙5基（長方形土壙）であった。住居跡内のものも含めれば歴史時代の土壙は長方形2基、円形2基である。更に、7基の柱穴様の小ピットを検出したが、時代、性格は不明である。

このうち、歴史時代の土壙（埋積土が黒色であったのでそう考えたわけである）からの遺物は縄文土器細片の他、石鎌1点の出土しかなかったので、以下に取り挙げて説明しなかった。

5基の住居跡は、1～3号、4と5号、5と3号というように相互に重複している。その新旧関係は次の通りである。（矢印の方向はより新しい住居跡を示す。）

1号 → 2号 → 3号

4号 → 5号

5号 → 2号

それぞれの住居跡の時期は遺物の検討をまたなければならないが、大略次のとおりである。1号、加曾利E I式期の古い段階、2号及び4号、加曾利E I式期、5号、加曾利E I式期から同II式期？、3号、加曾利E III式期となる。

住居跡の全貌が明らかになったのは4号・5号2基のみで、1～3号は図の通り北半は調査区外になるので精査することはできなかった。

本区の調査は、道路部分をローム上面近くまで削平して敷砂利の工事終了後に行なわれたため、いずれの遺構についてもその落込みを黒色土中より確認することはできなかった。

## (2) 第V区主な遺構について

### 縄文時代の住居跡

#### 1号住居跡（図-29、図版-10）

本住居跡は、北半が調査区外であるため南半のみの調査である。西側は2号住居跡によって切断されている。従って全体的な平面プランをつかむことはできなかったが、観察される範囲内では壁はほぼ円弧状に回っているのがわかる。壁に沿って幅30～40cm、床面よりの深さ20～30cmの溝が回っている。ローム上面から床面までの深さは約30cmであった。床面は、非常に堅くしまった状態であり、かなり平らな面である。

ピットは、周溝内より6個、床面より6個の計12個検出されている。このうち東側周溝にかかる最も大きなピットは、平面形87cm×90cmとはほぼ円形を呈し、床面よりの深さ約76

cmをはかる。これは柱穴というより、貯蔵穴様のピットと考えた方が良いと思うが遺物の出土は皆無であった。その他のピットは径、深さとともに統一性がなく、またその配列からみてどれを主柱穴としてとりあげたら良いのか分別できない。但し、住居跡の南東の周溝内より検出されたピットは、P<sub>3</sub>は長径60cm短径約34cm、P<sub>4</sub>は同様に50cm、32cmとともに楕円形を呈し、深さは床面より各々65cm、62cmと二つともほど同様の形態を持っている。これら二つのピットは何等かの意図をもって掘られたものと考えられる。或いは出入口と考えられないだろうか。

炉址は確認できなかった。

遺物の出土は非常に少なく加曾利E I式期の土器片が数片検出されただけである。

また住居跡の西東に本住居跡によって切断されている二つの土壙があるが、遺物の出土は皆無でありどのような性格のものであるか不明である。

## 2号住居跡（図-29、図版-11）

1号住居跡と同様、北半の調査は行えなかった。従って平面プランをつかむことはできないが、調査範囲内ではほど楕円状に壁がまわっている。残存壁高はローム層上面より40~46cmで、ほど垂直に立ち上がる。調査範囲内では壁溝は確認されなかった。

本住居跡は東側で1号住居跡を切断し、西側において3号住居跡に切断されている。

床面は西側、3号住居跡と重複する面を除いて、かなり堅くしまった状態であり、保存が良い。

ピットは総数11本検出できたが、P<sub>10</sub>、P<sub>9</sub>はその位置からみて1号住居跡に伴うものであったかもしれない。またどのピットが主柱穴として使用されたのか分別することは困難であるが、深さ、大きさ、位置からみてP<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>が使用されたと考える。しかし北半について調査することができなかつたため甚だ疑わしい。

炉（図-32）は、住居跡のほど中央に構築されていた。細長い河原石9個を利用した長方形の石囲い炉（長80cm、幅58cm）である。炉下は摺鉢状の浅い楕円形の（長径75cm、短径53cm）のピットが設けられ、そのほど中央に図-60の2の深鉢が埋設されていた。

遺物は、炉址の西側より底部の欠損した加曾利E I式深鉢（図-60の1）、P<sub>6</sub>の東より浅鉢（図-60の5）の口縁部、P<sub>6</sub>の東側より深鉢の口縁部（図-60の4）と同把手（図-60の3）が、床面直上の状態で出土している。また炉址に使用された石の上から、深鉢口縁部破片と、胴部破片が出土した。その他覆土中より多數の土器片が出土している。

石器はP<sub>1</sub>内より多孔石の破片が出土し、覆土中より石錐2点が出土しているのみである。

### 3号住居跡（図-29）

図示のとおり、南半の一部分の調査がでしかない。従って住居跡の平面プラン、規模等については全くわからない。

東側で2号住居跡を切断し、南側において4号住居跡を切断しているが、その重複部分はあまり明瞭ではない。壁は南側のみ一部残されているが、残存高は約20cm程度であり、これもあまり明瞭ではなかった。

床面は比較的平坦であるが、あまり堅くしまってはいない。壁溝・炉址は、調査範囲内では確認できなかった。

ピットは、東西に2個検出されたが、その形態・大きさからみて柱穴とは考えられない。調査範囲内では柱穴の検出はなかった。

遺物は、東西ピットの周辺から比較的まとまって出土しているがいずれも破片である。加曾利E III式の土器片であると考える。

石器は、あまり多く出土していないが、スクレイバー1点、ミニチュア石器（図-77の8）1点の出土があるのみである。

但し本遺構を住居跡様遺構としたのは、次の諸点による。ひとつに出土遺物はすべて、「ウキ」の状態であり、加曾利E III式期のものが大半を占めるが、加曾利E I式期のもの、称名寺式期のもの、堀之内式期と考えられるものが混在していること。ひとつに、本遺構の大半は調査区域外にあるため、炉址、柱穴の検出がなかったことによるものである。或いは住居跡ではないものであるかもしれない。

### 4号住居跡（図-30、図版-12）

南側と北側はそれぞれ、5号住居跡、3号住居跡によって少々切断されている。平面形は長径約5.8m・短径約4.8mの不整楕円形を呈する。壁は他住居跡による切断のため、南東側と北側ははっきりしなかった。残存壁高は西側で約42cm、南側で約30cmをはかった。壁の立ち上がり方は斜である。壁溝はない。

床面は、かなり堅くひきしまった状態であり、凹凸は少ない。

小ピットは総数10本検出されているが、主柱穴は4本及至5本ではなかつたろうか。（P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>？）なお、中央北寄りに方形の土壤が検出されたが、その埋積土が黒色土であったので後世のものと判断した。また、住居跡のほど中央東西に2個の大きな円形（平面形）の土壤を検出した。（東側52cm×50cm、深さ約145cm・西側47cm×48cm、深さ約212cm）これらは、埋積土が黒色土で、遺物も小破片が覆土中より出土しており、東側土壤が住居跡の石留炉を破壊して構築されていることなどから、住居跡に伴うものではないと考えた。

なお、住居跡の西側に、深さを住居跡と同じくして舌状に張出した部分がある。この中

から図-65の3の土器が出土している。これが何のためであるかは不明である。この近辺は、住居跡の覆土とローム層との区別がつきにくかった箇所であったので、掘り足らない可能性もある。

炉（図-33、図版-12）は、住居のはゞ中央に構築されている。プランは長方形（長約80cm、幅約40cm）の石囲い炉であるが、東側は前述のように円形土壙により破壊され、北側は石を置いた痕跡はない。石囲い炉内には東寄った箇所に底部の欠損した加曾利E I式（図-65の1）の深鉢が埋設されていた。

遺物は、炉址内に埋設された土器、前述の西側の舌状の張出し部より口縁部破片、P<sub>8</sub>の内部より出土している他、石器の出土はなかった。

#### 5号住居跡（図-31、図版-13）

平面形は、東西南北四辺の長さそれぞれ5.0m、4.8m、3.8m、3.5mと不整圓丸長方形を呈する。北西隅にて3号住居跡の壁の一部を切断している。壁の立ち上がりは明瞭であり、壁に沿って溝が一周する。壁溝の幅は34cmから46cm、床面よりの深さ20cmから26cmである。ローム層上面（確認面）より床面までの深さは約35cmをはかった。床面は、長方形の土壙により攪乱されているが、大略平坦で、比較的堅くしまっている。

ピットは、壁溝内より3本、壁溝にかかる3本、床面より9本の総数15本検出された。また住居跡南側よりと西壁を切る形で平面形長方形を呈する土壙が検出されているが後世の構築と考える。また東壁を切る形で不整形の土壙が検出されているが、これも東壁を切って構築されていた。これは、後世の構築であるが、遺物を全く伴わずその時期は不明である。

炉は住居跡中央にあり、何等施設をもたない地床炉である。焼土の範囲は64cm×50cmの楕円形を呈している。

遺物の検出はほとんどなく、北壁より床面直上で深鉢の胴部下半（図-66の3）が検出された他、数片の土器破片があるのみである。

#### 1号屋外炉（図-34、図版-14）

4号住居跡の北西方、3号住居跡の西方より検出したものである。口縁部と底部が欠損した加曾利E III式の深鉢（図-67の1）が正位に埋設されていた。更に土器の周囲には、幅7~11cm、長さ12~17cm厚さ約5cmの偏平な河原石が一まわり埋め込まれていた。土器を埋設するために土器の外形に沿った形で掘り方が確認された。土器内部及びその掘り方内には焼土が充満されていた。なおこの周囲から加曾利E III式と考えられる土器片（図-69）が何片か検出されている。このことは、この炉は単独に存在したのではなく、この周辺一帯住居跡だったことを示すのかもしれない。しかし周囲には住居跡と考えられるプラン

の検出はなかったし、柱穴と考えられるようなピットも確認できなかった。またこの周辺一帯、住居跡の床面と目されるような堅くひきしまった面もない。いずれにしても、住居内に使用された炉址であるとは判断しかねるのである。

後述するように、炉址の西方約3.7cmの地点に、環状の把手を持った甕（中に骨片が検出された）の出土をみた土壌（2号土壌）が検出された。この土壌から出土する土器は概ね加曾利E III式のものと思う。本炉址とその周辺はこの土壌と何等かのかかわりを持った場と考えるのは早計であろうか。勿論この根拠は、両遺構の時間的・距離的な近接でしかないが。

### 2号屋外炉（図-3）

1号住居跡の南側、5号住居跡の東側にて検出された。55cm×45cmの範囲に焼土が確認され、炉内東側に寄って深鉢の脚部が埋設されていた。その他石匂い等の施設はない。

この炉址は、道路工事のため敷砂利を排除する際見つけられたものである。従って、この炉址が単独のものか、住居跡に伴っていたものか判別し難い。しかし、1号屋外炉址と同様、馬蹄形柱穴様の小ピット、住居跡の掘り込み等は確認されなかったので屋外炉と考えた。この周辺には何等遺物の検出はない。

## （3）縄文時代の土壌について

### 1号土壌（図-35）

第V調査区の西側に位置する。口径202cm×185cmの不整椭円を呈し、底径は195cm×187cmであった。断面形は開口部位から深さ約35cmのところでいったんすぼまる形を見せ、そこを境にして底面まで袋状に広がる形である。底面はローム層内に構築され、鹿沼バミス層まで達していない。

遺物は、あまり多く出土せず、埋積土の中から加曾利E III式期の土器片、チャート製のスクレイバー1点の出土があつただけである。

### 2号土壌（図-36、図版-13）

4号住居跡の北側に位置し、4号住居跡の一部を切断している。東側に3号住居跡様遺構があるが、その重複関係はつかめなかった。本土壌の北半は、国道の北側溝下にあり調査することはできなかった。また本土壌は、かなり深く、掘り下げるうちに国道側溝下の土が崩れる惧れのあったこと、また本土壌の検出が調査期間最終的な時期であったので平面実測のみで終了せざるを得なかった。甚だ悔やまれる次第である。

本土壌の平面形（調査した範囲内では）は南側に舌状に張り出した形を持つ。本土壌と

西側に接して同様な形の土壙（ローム層上面よりの深さ約35cm）が確認されたが、土壙内より遺物の検出はなく、その時期もわからないとともに、2号土壙との関係もわからなかった。

2号土壙より出土する遺物は、柄状の把手を2個持った壺形土器（図-71の1）と土壙東側から破片がバラバラになって深鉢形土器（図-71の2）が出土している。その他土器の底部2個と、土器破片であった。

### 3号土壙（図-3）

4号住居跡の西側に位置する。平面形は2.3m×2.15mの不整な橿円形を呈し、深さは約50cmをはかる。断面形は鍋底状である。（本土壙の南壁下に径約25cm、底面よりの深さ20cmの小ピットが穿たれていた。）西側の一部は、長方形土壙により切断されている。また北側に接して径約110cmの円形の土壙が検出されたが、これから遺物の出土はなく、本土壙との関係は良く分からぬ。

遺物は埋積土中より加曾利E III式の土器破片（図-72）と石器2点（図-75の4、5）が出土している。

## （3）出土土器について

### 1号住居跡（図-59、図版-31）

1号住居跡より出土した土器片の量はかなり少ない。また床面に付着していたものは、4の胴部破片のみであった。

1は、口縁部の把手の部分である。口縁部の突出した部分から下に降りる隆起線と条痕を有する。砂粒を多く含み灰褐色を呈する。

2は、口縁に枠状文、以下に繩文を有する大木8a式的な土器である。裏面に一稟を持つ。黒褐色を呈する。

3は、口唇がやゝ外反し、全体的に丸味を持つ。口縁無文、隆起線による区画と繩文を窺える。焼成かなり良好。褐色を呈する。

4、5は胴部の破片であり、地文繩文、その上の沈線文が目立つ。なお、4は胎土に雲母を含む。

6は、連続刺突文を有する。

土器型式は1に曾利式的な要素、2に大木8a式的な要素を窺える。更に本住居跡は2号住居跡に切断されていることから、2号住居跡（加曾利E I式後葉）よりは古いものと考えられる。

### 2号住居跡出土土器 (図-60, 61, 図版-32, 33)

図-60の2を除いて、他のものは床面直上より出土している。

図-61の1は、頸部に無文帯をもち、口縁部と胴部文様帯が明瞭に分割されるもので、整美なキャリバー形の器形をもつ。隆線による文様は口縁部にかぎり、沈線と二条の隆起線により区画と渦巻文を作出している。窓巻文は外側に突出している。頸部は無文で胴部以下との境に一筆描の沈線が施される。胴部は繩文 (Lr) を施したのみである。表面淡褐色、底面の一部黒褐色で焼成良好。胴部下半欠損。2は、石器炉内に埋設されていたものである。口縁部が朝顔状に開く器形で、器壁は口唇内側へ突出している。口縁部は無文、頸部には突帶がつば状に横位に貼付され、四つの突起を見ることができる。胴部は地文繩文で頸部の突起に対応して二本一単位の沈線が重下する。なお頸部の突帶の両側には一条の沈線がそれぞれ施される。焼成良好、色調赤褐色、胴部作面に一部黒色。器形より曾利II式的な特徴を看取ることができる。胴部下半欠損。3・4は胎土・焼成等からみて同一土器と判断できる。口縁部から頸部にかけてのものでしかないが、口縁部の文様無文の頸部、沈線など1の深鉢に酷似する。ただ、大きな立体的な把手は特徴である。推定口縁径49cmを測る。焼成良好、色調黒褐色。5は、無文の浅鉢形土器の復元実測である。色調は内外面とも暗赤褐色、焼成はあまり良好でない。

図-61の1～3は、キャリバー形の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部の文様は隆帯による区画と渦巻文であり、地文に繩文 (Lr) を横位に施す。1などは、隆帯による渦巻文は立体的な感はないが、頸部の無文帯・胴部との境界の沈線など、図-60の1と3, 4に類似する。色調は1は褐色、2・3は灰褐色、焼成はいずれも良好である。4は口縁部の朝顔形に開く器形の深鉢形土器の口縁部である。口縁部は無文、頸部に横走する二条の沈線が見られ、胴部は地文の繩文 (Rf) の中に、背中の向き合った沈線による「J」字文、二条の沈線とその間の刺突文をみることができる。色調暗褐色、焼成良好。これも曾利II式の影響の下に製作されたような感を持つ。5は深鉢形土器の胴部破片。ややふくらむ胴部破片であり、地文の繩文 (Lr) の中に、二本一単位の沈線による渦巻文、直線的な文様がみられる。色調黒褐色、焼成あまり良くない。大木8b式の胴部によく見受けられる文様である。

### 3号住居跡様造構出土土器 (図-62, 63, 64, 図版-33, 34, 35)

出土遺物は全て「ウキ」の状態で出土したものであり、次のようにいくつかに分類できる。加曾利E I式期式或いは大木8b式期のもの、図-63の2～4。加曾利E III式期のもの、図-62の1～3、図-64の1～13。称名寺式期のもの図-63の1。壇之内式期のもの図-64の14。加曾利E III式のものは文様によって更に次のように分類することができる。沈線によるもの、図-62の1、3。図-64の1～3、7、15。隆起線によるもの、図-64

の5, 8, 10~13。沈線および隆起線によるもの、図-64の4, 6, 9。

これらのものは前述の通り全て「ウキ」の状態である。また出土した土器の多くは加曾利E III式期のものであるが、その他の時期のものも多く混っており、出土した遺構を住居跡とするのは疑わざるを得ない。

#### 4号住居跡出土土器（図-65、図版-36）

遺物の量は少ないが、図示したいずれのものも住居に伴うと考えられる。1つは炉内埋設土器、他は床面直上より出土したものである。

1は、住居跡のほど中央の石囲炉の埋設土器として使用されたものである。隆起線による文様は口縁部にかぎられ、二本の隆起線と一条の沈線による渦巻文、区画が見られる。口唇には一条の横走する沈線、渦巻文の上には円形の刺突文が施される。区画内には繩文（Lr）が横位に施文される。頸部は無文、胴部との境に、一筆描によって横走する沈線があり、胴部は地文の繩文（Lr）の上に垂下する三本の沈線、一本の波状沈線が一単位となって5回繰り返される。地文の繩文は浅く、所によっては消えた部分もある。焼成普通、色調赤褐色。2は、キャリバー形の鉢形土器の口縁部から頸部にかけてのものである。口唇部は内彎する口縁部からやや直立気味に立つ。文様は口縁部の浅い繩文（Lr）のみであるが、器面全体よく磨いてあるので不鮮明である。更に口縁部の下端に浅い沈線が横走する。焼成不良、色調黒褐色。3は口縁部破片、沈線と隆線による区画文と渦巻文が施されるが、沈線による文様の作出しが目立つ。区画内には粗い筋の繩文（Lr）が施される。焼成良好、色調赤褐色、一部黒褐色。いずれも加曾利E I式或いは大木8b式期のものである。

#### 5号住居跡出土土器（図-66、図版-36）

本住居跡より出土した土器は少なく、破片が多い。3の胴下半部のみ住居跡の床面上より出土した。

1は地文に繩文（Lr）口縁部に隆起線による区画をもつ。キャリバー形土器の口縁部破片である。色調黒褐色、焼成良好。2は口縁部が内彎し、胴部のやや張る器形の深鉢形土器の口縁部である。口縁部は無文の上に沈線によって文様が描かれ、下端に隆帯をもつ。隆帯の一部は舌状に突起し、その外側に沈線による渦巻状の文様がある。胴部は地文の複節の繩文の上に沈線を直線的に或いは波状に垂下させている。焼成良好、色調灰褐色。3は胴部分のみの残存。底部は無文、胴部は地文の繩文（Lr）の上に、垂下する三条の沈線と2本の波状沈線が一単位となり、五単位施文される。うち1本の波状沈線は一条である。焼成普通、色調黄褐色。4, 5は口縁部破片であり、4には隆線による区画と渦巻、5には横走する隆起線が見受けられる。6は、頸部破片であるが、地文の繩文（Lr）の上に垂下する二条の沈線、一条の波状沈線をみることができる。

加曾利E I式期の新しい段階、加曾利E II式に近い段階のものであろう。これは4号住居跡（加曾利E I式に比定）を切断していることからも諾えるものである。

#### 1号炉使用土器と周辺出土土器（図-67, 69, 図版-37）

図示したものは、炉址に埋設された土器と周辺よりかたまつて出土した土器である。

1は炉内に埋設された、口縁部と底部を欠損する深鉢形土器。頸部のくびれは弱く、器壁は薄く仕上げている。地文は比較的節の細かい繩文（Lr）が施され、その上に二条の沈線によって「H」字状、「V」字状、逆「U」字状に区画された磨消文が全面にみられる。焼成かなり良好、色調赤褐色。2は両耳壺形土器の耳部分である。繩文の上の円形の刺突が特徴的である。

拓影図（図-69）に図示した土器破片は次のように分類した。口唇部直下に沈線をもち、以下繩文が施されるもの。繩文の中に沈線による磨消区画が施されるものもある。（図-69の1と2）口唇に沈線、沈線内には梢円形の刺突文が施され、以下繩文のもの（図-69の3, 4, 6?）地文の繩文の中に二条の隆起線と磨消しによる区画のみられるもの（図-69の8~9）この他、口縁部に隆帶、以下に繩文と沈線による区画のあるもの（図-69の5）と、繩文の中に垂下する二条の沈線（沈線間は磨消し）のある胸部破片（図-69の7）がある。

おおむね加曾利E III式期のものであるが、一部加曾利E IV式に類似する。

#### 2号屋外炉使用土器（図-68, 図版-37）

胸部破片。地文の繩文（Lr）の中に3本の沈線を縦横に交叉するように組み合わせ、沈線間に磨消し、一本は交叉部分にて渦巻をつくる。器面は縦に6区画される。焼成良好、色調赤褐色。

#### 1号土壤出土土器（図-70, 図版-37）

1, 2は口縁部無文、直下に一条の沈線、以下繩文が施される。3は、中央に断面三角形の隆起線をもつ。4は、断面三角形の二つの隆起線と幅の広い磨消しによって器面を区画するものである。5は幅の広い凝位の磨消部を有する。

加曾利E III式期のものである。

#### 2号土壤（図-71, 72, 図版-38）

図-71の1は、両耳壺形土器である。頸部以上口縁部はゆるく外反し、肩の張る器形である。口縁部は無文、頸部に一条の隆線、以下胸部下半までLrの繩文。「耳」は対称の位置にもうひとつあると思うが欠損している。「耳」部分にも一部に繩文を施文する。底部は穿孔される。内部より骨片が出土した。焼成不良、色調外面淡褐色、内面黒褐色。2は、口縁部が大きく内灣、頸部のくびれは弱く、胸部がややふくらみ、小さな底部に繞くキャ

リバー形の退化した器形である。口縁部から頸部にかけて幅広に無文部をつくり、頸部から胴下半まで繩文 (Lr) のみを施文する。胎土に多量の砂粒を含み、焼成あまり良くない、色調黒褐色。

図-72の拓影は、3を除いて、他は全て断面三角形は隆起線と隆起線両側の磨消しによる区画によって特徴づけられるものである。3は沈線によって区画されている。

加曾利E III～E IV式期のものと見られる。(図-72の4は新しい要素をもつ。)

### 3号土壤出土土器 (図-73、図版-39)

1～3は、口縁部無文帯、直下の断面三角形の隆起線に特徴づけられる。1は更に逆「U」字形の区画がなされる。4は多少先行的な要素を含む。5は、沈線と沈線による区画が窺える。1は南関東の加曾利E IV式の要素をもっている。

### 遺構に伴わない土器 (図-74、図版-39)

1の口縁部は外反し、内側に一稜が有る。器壁はやゝふくらみをみせる。口縁部は良く磨かれ無文に仕上げられる。直下に粘土紐を波状に貼付け、両側に円形の刺突を施す。以下の文様は、隆帶と沈線を利用し、複雑に作っている。焼成普通、色調黒褐色。加曾利E I式期の古い段階のものであると考える。2は一条の隆帶をもつ底部である。

(岩上照朗)

第I区 2号住居跡出土遺物

実測器番号	出土位置	器 形	計測 口 幅 底 高 径	器 形 の 特 徴	調 整 の 特 徴	粘 土・焼 成・色 調	考
1	南壁近くの床面	壺	(17.2) — —	頸部以上、袖く「く」の字状に外反する。腹窓は球形である様様。	口縁部内外横なで、肩部上半、内面横方向へのへらなで。外面斜め方向の浅いはけ目。	砂粒多量に混入。焼成は良好。内外面とも褐色。一部頸部に焼付着。	口縁部から肩部にかけて残存。内面に2条の接合模様あり。 土師器。
2	東の壁出し部、床面上。	壺	14.5 5.7	口縁部と体部の境に一突脊り。口縁部は外反し、体部は半球状に丸味を帯びて底部にいたる。均整のとれた器形である。底窓は丸底。	口縁部内外面、肩方角の入念なへら巻き。体部外面、横方向のまぶらなへら巻き。体・底部内面、底方向の入念なへら巻き。底窓外面、へら割りを残す。	白色の砂粒を混入するが、良質な粘土使用。焼成、良好。内外面とも赤褐色。	口縁部1／4欠損。 内外面とも赤褐色。 顔料塗付(かなり明確)。 土師器。
3	南東のピット付近床面。	壺	13.8 5.3	体部は内湾しつつ立ち上がりがるが、口縁部で内側で屈曲する。底部は丸底である。	口縁部外面。器体内面全横なで、体部外正面頭による器体の整形痕。底部外面、不定方向のへら削り。底窓内面一部にへらによる調整あり。	砂礫を多量に含む。焼成良好。色調外面赤褐色。内面淡褐色。	口縁部一部欠損。 外面赤褐色。 うすく塗付。 土師器。
4	南東隣付近床面より10cm程浮いた状態。	壺	11.5 5.0	体部は薙しつつ立上がり、口縁部にて内側に屈曲する。底窓は凸凹があるが、ほぼ丸底である。	口縁部内外面、体部内面、横なで。体部外面および底部外面、不定方向のへら削りとへらによるなでつけ。底窓内面へら先による押さえつけあり。	砂礫を多量に含む。焼成良好。色調内外面ともに赤褐色。	口縁一部欠損。 外面ともに赤褐色。 うすく塗付。 土師器。

第II区 古墳時代住居跡出土遺物

実測図番号	出土位置	器 形	計 面 積 口 器底 径 直 径	器 形 の 特 徴	調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	北壁そば	壺	17.2 31.0 6.5	口縁部はゆるく外反し、口部にやゝくらみをみせる。腹部は中位に丸味があるが、長脚化の傾向を示す。底部は小さく、やゝ上底である。	口縁部外側などは、断面上外側へうなじて瓶になでた後、その上に横にかかるくさび形の内面をもつて上げる。下平不定方向のへら削りをそのまま残す。腹部内面横方向へのうなぎ、底部外側のへら削り、内面へらきなど。	砂粒の混入が多いが、焼成された粘土使用。焼成良好。色調表裏赤褐色。	口縁部1欠損はゞ完形。
2	南東隅	壺	(18.5) — —	口縁部はゆるく外反する。腹部はやゝくらみを帯びた長脚であろう。全体に薄く仕上げられている。	口縁部内外は横なで、断面上外側は瓶方向のへら削り、内面は横方向になで、内面は丁寧なで痕がみられる。	微砂粗多量に混入するが、さめ細かい粘土を使用。焼成良好。色調表裏黒褐色(煤付着)裏面灰褐色。	口縁部から胴上半にかけての破片。
3	北東隅	鉢	23.5 14.0 —	口縁部は外側にしかく屈曲し、内間に一種をつくる。腹部は中位にかすかにくらみをみせるのが、半球状である。底部は平底に近い丸底で安定している。	口縁部外側横なで、横方向のへら削り。内面横方向のへらによるようなら、底部外側へら削り。内面へらによるよなで、後放射状の無いへらき。	砂粒を多量に含む。焼成良好。色調外面赤褐色(底部一部擦付着) 内面灰褐色。	完形。外表面は赤色顔料を塗付した模様。底部外面は二次焼成をうけたようである。外縁二本の接合痕。
4	北西隅	高杯	15.6 9.0 9.5 (底部下端) —	杯部は外側を有せず内側二つ折り形である。腹部は上半が「」の字状にやゝくらみを見せる形態であり、側に至って危険に広がる。側の末梢は少々めくれあがる。腹部の上半と側の境に一筋を有する。脚部の内側に斜り上に立ち上げたような放跡有り。	杯部外側横方向の密なへら削り。内面横方向の後放射状に暗線付。脚部外面上半横方向の密なへら削り。下半及び内面横なで。	砂粒多量に混入。焼成普通(少々もろい)。色調内外面赤褐色。	はゞ完形。外表面ともに赤色顔料付。全体的に厚ぼつたい感じを持つ。
5	貯藏穴内	高杯	15.0 — —	杯部上半は内側しながら開き、口内側に一筋の筋がある。下半は脚部との接合部で底盤にすばまる。	口縁部内面横なで。以下は「夢」になでた後放射状に暗線付。外側はへら削りの後、全面横方向のへらき。	痕少量、砂粒多量に含む。焼成普通。色調内外面赤褐色、外側に一部黒褐色。	脚部欠損。外表面に赤色顔料を塗付した可能性有り。
6	貯藏穴内	杯	13.0 5.4 —	外縁が明瞭に残り、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部以下は丸味を帯びる。底盤部以下は丸味を帯び丸底。口内側内面に一筋の沈線あり。	口縁部外側、体部内面全横なで。体部以下外側不定方向のへら削り。	赤色砂粒多量に混入。焼成かなり良好。色調内外面赤褐色、外側淡赤褐色。	1/3欠損。均整のとれた器形である。
7		杯	11.9 5.3 —	外縁が明瞭に残り、口縁部はやゝ外反気味に立ち上がる。体部以下は丸味を帯び丸底。口内側内面に一筋の沈線あり。	口縁部外側、器体内面全横なで。体部外側不定方向のへら削り。	砂粒多量に混入。焼成良好。色調は内外面とも淡褐色。	口縁部1/3欠損。
8	北西柱穴 そば	壺	12.5 5.6 —	外縁が明瞭に残り、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部以下は丸味を帯び丸底。	口縁部外側、器体内面全横なで。体部外側不定方向のへら削り。	白・赤色砂粒多量に混入。焼成良好。色調内外面とも赤褐色。	1/2欠損。
9	北壁そば	壺	13.1 5.4	外縁は明瞭に残り、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部以下は丸味を帯び丸底。口内側内面に一筋の沈線あり。	口縁部外側、器体内面全横なで。体部外側不定方向のへら削り。口縁部内面に内部斜方向のなで板がある。	砂粒の混入はあまりなく、緻密な粘土使用。焼成良好。色調内外面赤褐色。	1/2欠損。

実測図番号	出土位置	器 形	計測 口縁 底 径 高 度	器 形 の 特 徴	調 整 の 特 復	胎 土・焼 成・色 調	備 考
10	覆土中	环	(13.4) (4.9) —	外縁が明顯に残り、 口縁部は少々内高弧 形に立ち上がる。体 部は丸味を帯びる。 口縁部内側に一 条の 浅溝。	口縁部外曲、内面全 面横なで。体部外面 へラ削り。	赤色砂粒多量に混入 焼成普通。色調内外 面赤褐色。	1／3品。
11	貯藏穴内	环	13.0 7.0 7.5	複雑な作りであるが 全体的に丸味を帯び る。底部は平底につ くる。	口縁部内外面横なで。 体部外面削順による 器内調整。内面へラ によるなで。底部外 面不定刃向のへラ削 り。	砂粒を多量に混入す る。焼成普通。色調 内面淡褐色、外面 付着、一様赤褐色。	はゞ完形

## 第IV区歴史時代住居跡

実測面積	出土位置	形 態	計 高 度 基 準 高 度	器形の特徴	調査の特徴	胎土・焼成・色 調	備 考
1	カマド中	羽釜	(22.0) — —	口縁部は内側する形態である。口辺部から約2cmで先端部に丸味をもつツバが貼付けてある。体部はふくらむようである。	口縁内外面とツバ部多段模様で。体部上位外側へラによるなど。内面は斜方向のヘラなど。	白色・赤色砂粒を多量に混入。焼成堅密。内面とも赤褐色。	口縁部2/3品。
2	カマド横	甕	(25.0) — —	口縁部は短く強く外反し、口唇に立って立ち上がりを見せる。口唇の外側弱感。口唇は角ばる。	口縁部内外面模様で。脇部上位外側は斜方向のヘラ割り。内面は横方向のヘラなど。	赤色砂粒・白色微砂粒多量に混入。焼成堅密。色調内外面とも赤褐色。	口縁部半欠品。
3	カマド前	甕	(25.9) — —	口縁部は短く外反し、口唇の外側は弱めであるが、内側には立ち上がり見せる。前唇はやや肩の扱う形態かと思われる。瓶底の屈曲部内側に一条の浅い腹がある。口唇は角ばる。	口縁部内外面模様で。脇部上位内面は斜方向のヘラによるなど。内面は横方向のヘラ割り。	砂粒を多量に混入。焼成堅密。色調内外面ともに赤褐色。(一部赤褐色)	口縁から脇部の破片。
4		甕	(24.0) — —	口縁部はゆるく外反し、口唇部は丸味を帯びる。口唇端部に一条の浅い芯線があり。	口縁部上位内外面模様で。脇部上位内面はヘラなど。外側は口縁部横模様で後斜方向のヘラ割り。	砂粒を相当量含みあまり良好な胎土ではない。焼成堅密。色調外表面褐色。内面赤褐色。	口縁から脇部の破片。
5		甕	(21.6) — —	口縁部は短く外反し、口唇部は丸味を帯びる。口縁部上位外側に一段の疊がある。	口縁部内外面模様で。脇部上位内面斜方向のヘラなど。外側は斜方向のヘラ割り。	黒色砂粒(雪母)を多量混入。焼成堅密。色調内外面赤褐色。	口縁から脇部の破片。
6	カマド横	甕	(19.4) — —	小形の甕である。口縁部は短く外反し、口唇に立って内部に立ち上がり、外側に一級を見せる。	口縁部内外面模様で。脇部上位内面斜方向のヘラなど。外側は斜方向のヘラ割り。	黒色の赤砂粒(雪母・かんらん石)を多量混入。焼成堅密。内面赤褐色。	口縁部2/3品。口縁部外側一部に焼付。
7		甕	16.0 5.1 5.8	小さな底窓から、内窓しながら立ちあがる。体部外側にクロ状模様。	左回転ロクロ成形後回転糸切り。	白色(長石)砂粒多量に混入。焼成堅密。内面赤褐色。	ほ×光形。
8	西壁前	甕	12.0 3.5 6.0	体部中位でくびれ。口縁部まで内窓しながら開く。左右对称でなくややゆがんでいる。薄手につくられており口唇でやや肥厚する。	右回転ロクロ成形後回転糸切り。	白色砂粒多量混入。焼成堅密。内外面赤褐色。	口縁1/3欠損。粗雑なつくり。
9	夕	甕	(14.0) 3.5 7.5	粗雑なつくりの底部から体部はややふくらみを見せながら立ち上がり。口縁部に至って外反する。口唇は肥厚している。底窓内面に凸凹あり。底窓がやや外側にせり出している。	右回転ロクロ成形後回転糸切り。	白色砂粒(長石・石英等)多量混入。焼成堅密。内面赤褐色入り混る。	1/3品
10	夕	甕	15.0 4.5 7.5	粗雑なつくりの底部から体部はややふくらみを見せながら立ち上がり。口縁部に至って大きく外反する。口唇は少々肥厚する。	右回転ロクロ成形。底窓は不定方向の手筋。ヘラ割りがなされており切り離し痕が不明。	白色砂粒(長石・石英等)多量に混入する。焼成堅密。内外面赤褐色と褐色入り混る。	口縁一部欠損。

実測図番号	出土位置	器種	計 測 口 器底 縦 横 高 度	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	西壁前	环	13.5 4.5 6.0	体部はややふくらみを見ながら立ち上がり、口縫部に至って大きく外反する。底部土板を貼ったようではやや高くなる。	右回転ロクロ成形、回転糸切り。	白色・赤砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面黒褐色と褐色入り混る。	口縫一部欠損。
12	カマド横	环	12.5 3.0 6.1	器窓らしい形態。体部はややふくらみを見ながら立ち上がり、口縫部に至って外反する。全体にゆがみがあり。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。	砂礫、砂粒(長石、石英)多量混入。焼成堅緻。色温赤褐色。	口縫一部欠損。
13	西壁前	环	15.0 3.5 6.5	体部から口縫まで短く内窓しながら立ち上がる。薄く仕上げられているが、全体のゆがみが目立つ。	回転糸切り離し。	砂礫、砂粒(長石、石英)多量に混入。焼成堅緻。色温黒褐色と褐色入り混る。	口縫部2/3欠損。
14	タ	环	14.8 3.2 9.5	体部はふくらみ、口縫部外反。底部は大きく作る。	底部不定方向へラ削り。底部内面へラによる調整。	砂礫(長石)砂粒多量混入。焼成堅緻。色温黒褐色と赤褐色入り混る。	口縫部2/3欠損。
15	タ	环	14.0 3.5 7.6	体部内窓しつつ開く。口縫部外反。全体にゆがみを持つ。	回転糸切り離し後底部延縫へラ削り。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。色温黒褐色、内面褐色。	口縫部2/3欠損。
16	タ	环	14.0 4.2 7.5	体部直線的に開く。口縫部や肥厚。全体にゆがみ持つ。底部に焼成前の穴あり。	回転糸切り離し。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。色温黒褐色、内面褐色、褐色入り混る。	口縫部、底部破片。
17	タ	环	16.0 (4.0) (9.0)	体部やふくらみ口縫部外反。	回転糸切り離し。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。色温黒褐色。	口縫部破片。
18	タ	环	10.0 2.5 6.0	体部から口縫部外反しながら立ち上がる。小毛。	回転糸切り離し。	砂礫、砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面灰褐色。	ほり穴形。口縫に一帯縫付着(幻明塗として使用)。
19	カマドそ で	环	10.0 2.7 5.0	体部内窓しながら立ち上がる。口縫部かすかに外反。外面口縫部粗織。小形。	回転糸切り離し。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。淡褐色。	口縫部1/2欠損。
20	カマド上	高台付环	15.0 5.6 7.0	体部や内窓気味に立ち上がる。口縫部かすかに外反。高台部は短かい。	回転糸切り離し後、高台貼付。	赤色・白色砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色、内面一部黒褐色。	口縫部・高台部一部欠損。
21		高台付环	15.0 5.5 6.5	全体に丸味を帯び、体部以上内窓しつつ立上がる。	回転糸切り離し、後高台貼付。	砂粒多量混入(長石、石英混入)焼成堅緻。内面黒色、外 面灰褐色。	口縫部2/3欠損。内面黒色処理。
22		高台付环	— — 6.3	全体に丸味を帯びる。	回転糸切り離し後、高台貼付。高台突起上に回転ヘラ削りあり。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。内面黑色、外 面褐色。	底部部。内面黑色処理。
23	カマド前	高台付环	— — 8.2	高台部は外に強く張り出す。		砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色。	底薄片。

## 第IV区 歴史時代1号土壙

実測器番号	出土位置	器 種	計口 器底	基 盤 基盤	器 形 の 特 徵	調 整 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
1	底面	坏	10.5 2.4 6.0		小形の坏。内面底部にロクロ痕明顯。	回転糸切り離し。外底部近くに一条の溝あり。	黒色砂粒多量混入。焼成堅密。外面赤褐色。内面灰褐色。	口縁部一部欠損。二次的な焼成をうける。(ひび割れ多い)
2	覆土中	坏	(10.6) 2.6 (6.3)		小形の坏。口唇部外側にロクロ痕明顯。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒(長石粒目立つ)多量混入。焼成堅密。内外面灰褐色。	1/3品。二次的な焼成をうける。(ひび割れ)
3	覆土中	坏	00.4) 2.5 6.5		小形の坏。外面ロクロ痕明顯。底盤やへせり出す。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量に混入。焼成堅密。内外面灰褐色。	1/4品。二次的な焼成をうける。(ひび割れ)
4	覆土中	坏	(14.0) 4.3 6.5		外腹、底部内面ロクロ痕明顯。口唇やへ外反。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量(長石粒目立つ)に混入。焼成堅密。内外面灰褐色。外腹一部灰化。	1/2品。二次的な焼成をうける。(ひび割れ。一部に須割れの色)
5	覆土中	坏	(16.0) 4.5 6.3		体部から口縁部直線的に開く。外面ロクロ痕明顯。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量混入。焼成堅密。内外面灰褐色。	口縁部のみ3/4破損。二次的な焼成をうける。
6	覆土中	坏?	(18.0) —		全体に丸味を帯びた球形。外腹にロクロ痕かすかに残る。	内外面横方向のヘラ磨き。	砂粒多量に混入。焼成堅密。内外面灰褐色。	口縁部破片。ヘラ磨きは黒色処理。二次的な焼成をうける。
7	覆土中	坏?	(14.6) —		口唇部外反。外腹にロクロ痕かすかに残る。	内面横方向の丁寧なヘラ磨き。(光沢あり)	砂粒の混入少量。焼成普通。内外面灰褐色。	口縁部破片。外面黒色激しい。
8	覆土中	坏?	(14.8) —		口縁部は内窓する。外腹ロクロ痕明顯。	内面なで。	砂粒(長石粒目立つ)多量混入。焼成堅密。内外面灰褐色。	口縁部破片。
9	覆土中	坏	— 6.2		外面ロクロ痕明顯。底部やへせり出す。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量に混入。焼成堅密。外腹灰褐色。内面灰赤褐色。	底部破片。
10	覆土中	高台付皿	(11.4) 2.0 (6.2)		小形、皿部は直線的に開くが、浅い。	回転糸切り離し後、高台付。	白色砂粒多量に混入。焼成堅密。外面灰褐色。内面灰赤褐色。	半欠品。皿部外面にヘラ先による刻線がある。
11	覆土中	高台付皿	(9.4) 2.2 (4.6)		小形、皿部は直線的に開くが、浅い。	回転糸切り離し後、高台付。皿部外側なで、内面へら磨き。高台内面横線など。	砂粒多量に混入。焼成堅密。内外面赤褐色。	半欠品。
12	覆土中	高台付皿	(8.0) 2.0 (4.5)		小形、皿部は小さく浅い。	回転糸切り離し後、高台付。内面へら磨き。	砂粒多量に混入。焼成堅密。内外面赤褐色。	口縁部一部破損。皿部一部に釉付着。
13	覆土中	高台付皿	(16.0) (6.5) 7.2		体部から口縁部内窓しながら開く。高台部は低い。	器は全面に敷設なへう磨き。高台部内部にへう磨き。	砂粒(長石粒目立つ)多量に混入。焼成堅密。内外面灰褐色。	口縁部と底部破片。
14	覆土中	高台付皿	— 8.0		比較的大きい高台。	回転糸切り離し後、高台付。内面へら磨き。	砂粒多量混入。焼成堅密。内面黒色。外腹灰褐色。	底部破片。内面黒色処理。
15	覆土中	壺	(19.9) —		口縁部の断面方形で内面やへ立ち上がる。	口縁部内外直接なで、内面へら磨き。内面横方向のへら磨き。	砂粒多量混入(白色黒色)。焼成堅密。内腹灰赤褐色。	口縁部破片。

## 6 出土石器について

### 石 錐（図-75の1～4、図-77の9～11、図版-40）

図-75の1はV区2号住居跡の覆土内よりの出土である。比較的大きなものであるが、刃部の片側下半分が欠損している。基部には自然面を残す。表裏面とも丁寧に剝離される。とくに尖頭部は細かく打ち欠いている。最大長3.5cm、最大幅推定2.1cm、厚さ7mm。石質はチャートである。

図-75の3はV区3号土壙内より出土したものである。あまり均整のとれた形ではない。尖頭部の一部が欠損しているが、基部にはかすかにえぐりをみせる。表裏面とも粗雑な剝離によって仕上げられ細部の調整は見受けられない。長さ約2.1cm、最大幅2.7cm、厚さ4mm。石質は質のよいチャートである。

図-75の2はV区3号土壙の上七の中より出土したものである。大型のものである。尖端部と刃部の一部が欠損している。表裏面とも剝離は粗雑であり、階段状の剝離を多く残す。剝離は大きく、細かい調整はない。基部にはややえぐりを見せるが、えぐりを作るための調整はない。最大長4.4cm、最大幅3.2cm、最大厚6mm。石質はチャート。

図-75の4はV区3号土壙より出土したものである。細く作られておりスマートな形である。基部の一部が欠損している。表裏面とも細かい剝離によって仕上げられている。基部と基部近くに一部自然面を残している。最大長3cm、最大幅1.5cm、最大厚4mm。

図-75の5はV区3号土壙より出土した。基部のえぐりは顕著であるが、一方が欠損している。表裏面とも丁寧な剝離によって仕上げられる。とくに基部のえぐりの部分は細かい剝離が目立つ。最大長3.3cm、残存最大幅1.7cm、厚さ4mm。石質はチャートの一種であろう。

図-77の9はI区での表採品である。かなり小さいものであるが、表裏面とも丁寧な剝離によって仕上げられている。ほど完形品である。最大長1.8cm、最大幅1.3cm、最大厚4.5mm。石質はチャート。

図-77の10は図-75の3と同様大形のもので、I区の2号住居跡内土壙の埋積土上位より出土した。刃部から基部にかけてのかなりの部分が欠損する。表裏面とも剝離は粗雑である。最大長4.3cm、厚さ6mm。石質はチャート。

図-77の11はV区2号住居跡出土。石錐というより石錐に近い。比較的厚手の剝片が使用されており、表裏面とも粗雑であるが全面的に剝離が施されている。とくに劣端部には細かい剝離が施され、細く錐状に作られている。最大長3.4cm、最大幅1.5cm、厚さ7mm。石質はチャート。

### スクレイパー、剝片（図-75の7、図版-40）

図-75の6はV区より出土したものである。完形品であるが、四辺形であるなど特異な形である。表離面とも比較的大きな剝離を施したのち、縁辺に沿って細かく調整してある。縁辺は四辺とも鋭いものとなっている。最大長3.7cm、最大幅3.6cm、厚さ5mm。石質は頁岩と考えられる。

図-75の7はV区5号住居跡覆土中より出土したフレークである。背面は大きく二条の剝離が認められ、打面近くには粗雑な細かい剝離がある。末端には一部自然面を残す。打角は約120°、最大長5.1cm、幅3.2cm。石質はチャート。

### 石錐（図-75の9、図版-40）

図-75の9はI区の8はV区の表採品、8は上端と下端に1つずつのえぐりが見られるが、9は周辺をひとまわり細かく剝離している。9は石錐として使用されたものではないかもしれない。長さ、8は約4.1cm、9は約5.7cm、幅、8は約4cm、9は約5.1cm、厚さ、8は約5mm、9は約8mm。石質、8は石灰岩製、9は頁岩製。

### 石斧（図-76の1～5、7、図-77の12、図版-41）

ここで石斧としたのは、実際に使用したと考えられるもの（用途については種々論があると思うが）であり、図-76の6、図-77の8のように、その大きさからみて石器として使用するのに不適当であると考えられるものは除いた。

図-76の1～3の分銅型打製石斧はいずれも、I区8号土壙底面より、この順に上から重なって出土したものである。本土壙は小形のものであり、前述(I区遺構の項参照)のとおり形態的にも何等特徴的なものではない。しかし同一土壙に三個の石斧が、しかも底面より互いに重なりあって出土したことには特別な意味を感じる。しかし土壙より出土したものはこれ以外になく、土壙をいつの時期に何のために構築したのか説明できるものは何もない。よってこれ以上のことは今は何も言うことはできない。

1と2はひとつの偏平な原石の表裏を大きく剝離し着柄部を表裏交互に作り上げ、二つに擬割にされた結果出来上がったものである。従って実測図の右側は互いに接合する。原石に施された最初の大きな剝離は1では実測図左側の自然面の下側に見受けられ、2では同じく左側の上方にある。この剝離はおそらく一回で行なわれたものであろう。更に細かく見ると、2の実測図左側の下端に直接打撃を受けてできたと思われる段差が窺われるが、これに加えられた打撃によって原石は薄く二枚に剝がれたものと思う。両者の実測図右側の着柄部に施された調整剝離は二枚に剝いたのちに行なわれたものである。刃部は二枚に剝いた段階で相当に鋭利なものであったろう。刃部に施される調整剝離は細かいもののみである。2の左側実測図着柄部より下の周縁に行なわれた剝離は上述の階段状の部分

より前に施されたものであるから、二枚に剥ぐ以前のものである。石質はチャートの一種。3は1、2に較べてやゝ小型の分銅型打製石斧である。大体の形をつくるための、粗雑なステップを残す大きな剝離のあと、刃部及び着柄部に形を整えるための細かい剝離を施している。一部に自然面を残す。硬質な砂岩製である。

図-76の4は、I区より出土したが、造構より検出したものではなく、表土剥ぎの最中出土したものである。比較的大きな分銅型の打製石斧であるが、やゝ偏平形である。大きな自然面を残し、周縁には粗雑な剝離と刃部を鋭利にするための調整剝離を見る。あまり質の良くないチャート製。

図-76の5は、V区2号住居跡覆土より出土したものである。上方に比し下端の幅の広いバチ型の打製石斧である。ステップを多く残す粗雑な剝離によってのみ作り上げられたものである。着柄部は使用のためかかなり磨耗している。自然面を一部に残す。石質は石灰岩製である。

図-76の7はI区の表採品。かなり薄く仕上げられた磨製石斧である。表面は表裏面とも良く磨かれているが、基部と刃部に少々の打ち欠きが見られる。このうち刃部のものは使用的痕跡と考えられる。石質は硬質砂岩。

図-77の12はV区5号住居跡覆土中より検出されたもの。表裏面とも粗雑な剝離と細かい調整剝離が施されている。また表面（左側実測図）下半から刃部にかけて部分的に磨かれている。石質は紡錘虫石灰岩。

#### 石 槍（図-76の8～9、図版-42）

8はI区の調査年、敷砂利の排除の後に検出されたものである。9はIII区より出土。両者ともに一方を尖らせ、一方を鈍角的に作る。9は磨滅しており剝離の仕方は明瞭ではないが、両者とも粗雑な剝離のみにて作り上げられている。また両者とも、裏面に自然面を多く残す厚手の剝片が使用されている。石質は8は砂岩製、9は頁岩製。

#### 敲 石（図-77の1～6、図版-43）

本遺跡では敲石は岡示したもののはか、3個体分出土しているが、いずれも小破片であるため掲載しなかった。以下個別的に説明する。

1は、I区4号土壤の埋積土中より出土したものである。平面形は径約6cmとほど円形であるが、厚さ約4.8cmと部厚い砂岩礫が利用されている。周縁には一周幅約1.3cmのタキ痕が巡っている。中央の凹みは、表面に1個しか認められない。この点他の敲石とは趣を異にする。凹みの形状は、 $1.5 \times 1.5$ cmの方形であり、中央の深さは表面より1mmと浅い。何らかの回転によってできた磨滅とは見られず、連続的に敲いた結果できた凹みではないかと考える。（平面形が円形ではないこと、凹みは磨られたように滑らかではなく、

アバタ状にがたがたしていること二点がこの証左となろう。)

2はI区の表面採集品であり、遺構に伴出したものか否かは不明である。全体的な形は梢円形（長径約9.3cm、短径約5.9cm）であり、最大の厚さは4.3cmをはかる。全体的に良く磨られており、周縁にはタタキ痕などは認められないが、両側に二個ずつ凹みがあるのは特徴的である。この意味は良く分からぬが、実測図右側の凹みのひとつはあまり彫りが深くないことから、右側の凹みに親指の根元をあて、左側の二つの凹みに中指と薬指の先をあてるとき握り易いものとある。更にこう握った場合に岩石の先端には磨り潰しのための磨滅が顕著である。しかしこの場合は、敲打中央の表裏にある凹みは意味をなさなくなってしまう。中央の凹みは何のために使用されたかわからないが、これはこの敲石が単一の方法で使用されたのではないことを意味していると思う。中央の凹みは表裏に一つずつあり、表裏のとおり両者ともかなり深い。更にこれらは、梢円形であり、凹み内は滑らかではないので、1と同様、回転磨滅によって出来たものとはいえない。石質は砂岩である。

3はV区3号上塙埋積土中より出土したものである。梢円形（長径10.3cm、短径7.6cm）で幅平な（厚さ約4.3cm）河原石が利用されているが、形はゆがんでいる。表裏面中央には、それぞれ二個ずつの凹みが認められるが、凹みは両面ともアバタ状のタタキ痕があり、形も不整形である。勿論、回転磨滅によって出来たものでないことは明瞭である。敲石の両先端と両側には、タタキ痕が残されている。とくに両側のタタキ痕は、2の敲石と同様、それぞれ2個ずつの凹みを見る事ができる。石質は砂岩製である。

4はI区2号住居跡の擾土より出土したものである。梢円形（長径13cm、短径7.9cm）で、比較的厚い（厚さ6.2cm）河原石が利用されている。表裏面中央にはそれぞれ二個ずつの凹みが認められる。詳細にみてみるとこの凹みは四個とも円形ではなく、深さも0.3cm～0.1cmと浅い。また凹みの内側は磨滅したように滑らかではなく、敲きによって作り上げたように凸凹が激しい。敲石の両先端と両側にはかなり明瞭な敲痕がある。これは表面から観察すれば、凸凹のかなり激しいことが認められ、何回も敲き上げられた結果できたものであると思われる。石質は砂岩である。

5はV区5号住居跡の擾土中より出土したものである。全体形は長径約11.9cm、短径約7.5cmの梢円形で、比較的薄い河原石が利用されている。表面は中央の凹みと周縁部分を除いて良く磨かれているようである。中央の凹みは表裏面に2個ずつ認められ、そのいずれも深さ0.4cm～0.6cmと比較的深い。凹みは円形に近い形状であるが、微細に見ると、表面の凸凹が激しいことがわかる。これは凹みが回転磨滅の結果できたものではないことを示していよう。石器の周縁には幅1.5cm～1.8cmのアバタ状の敲き痕が一周する。とくに石器の両側にそれが目立つ。石質は砂岩である。

6はV区2号住居跡床面直上より検出されたものである。全体形は長径約14.0cm、短径

約8.1 cmの橢円形であり、厚さは最大で約4.5 cmである。表裏面中央にはそれぞれ2個と1個の凹みが認められるが、深さはいずれも0.2 cm前後と浅く、形状も不整形に近く、この石器がここを中心として使用されたとは思えない。また凹みの表面には凹凸が激しいことから回転による磨滅の結果出来たものとは思えない。石器の両側には、幅約2.5 cmの磨られた痕跡が帯状に認められ、この部分を何物かの磨り潰しのために使用したかのような感を持たせる。また石器下端には橢円形の敲き痕が残されており、この石器が文字通り敲石として使用されたことが窺われる。つまりこの石器は物を磨り潰すこと、敲くことの二種の方法で使用されたのである。石質は砂岩製。

#### ミニチュア石器（図-76の6、図-77の8、図版-41）

図-76の6は分銅形打製石斧に、図-77の8は磨製石斧に形状は似るが、前者は長さが約4.2 cm、後者は約2.3 cmと短く、両者とも石器として使用されたとは考えられない。出土遺構はそれぞれ、I区2号住居跡内土壌とV区3号住居跡覆土中である。石質は前者は粒子の細かい砂岩、後者は頁岩の一種であろう。両者の用途については、石器としての実用品ではないと言えるのみで、（これも形が小さいということからでしかないが）何も言うべきものを持たない。

#### その他の石器（図-77の7、図版-42）

片面は自然面のまま残し、刃部を粗雑な剝離によって急角度に作り上げたものである。自然面は加工面にも一部残る。出土遺構はI区2号住居跡内土壌である。石質はチャート。本石器に類似するものは本県においては田沼町隨岸坊遺跡（大和久慶平・竹沢謙、「田沼町隨岸坊遺跡発掘調査報告書」1968年8月の10頁）と矢板市雲入遺跡（塙静夫・田代寛「雲入遺跡」作新学院考古学資料室調査報告3、1966の10頁）などより出土している。それぞれ石斧、錐状石器と報告されている。報告書の実測図からでは刃部が急角度をなすか否か良く分からぬが、裏面に自然面或いは平坦面を残し、一方が幅せまく刃部が広くなる形状は本品と非常に類似性が高い。（雲入遺跡出土のものは両面加工で断面がレンズ状のものがあるが、全体的な形状は本品と似る。）これら二遺跡では、この石器はそれぞれ茅山式期、早期後半に伴うものとされている。二遺跡の他本県で類似のものは、鹿沼市坂田遺跡、烏山町妙光寺上遺跡より出土しているといわれるが、これらについては資料がない。いずれにしても早期後半～前期にかけての土器と出土するものである。本品の出土した土壌からも前期閑山式期の土器の出土（2片のみであるが）を見る。この石器は縄文時代早期後半より前期にかけて盛んに使用されたものであろうと予想できる。

## 7 出土土製品

(図-78, 図版-44)

1は、遺跡周辺より探集されたものである。器の把手であったものかもしれないが、土器本体は検出されなかったこと、何等かの動物を形どったものであるので土製品として紹介する次第である。側面より見ると蛇が鎌首をもたげたような形態であり、先端には目と口が彫られている。表面はかなり磨滅しているが背面には縄文が施文されている。

2はII区2号土壙より検出されたものである。土器の底部と考えられるが、底面周縁に円形の刺突が施されているなど特異なものである。土器表面には沈線による文様がある。胎土に砂粒を多く含み、色調は表面褐色、内面黒褐色である。

3はIII区2号埋甕のそばより検出されたものである。細い粘土紐で丸く輪をつくり、上の突出部分に小孔を貫通させている。この小孔に紐を通して垂飾りとして使用したものであろう。

4～7は土製円盤であり、四個とも土器片を再利用している。出土遺構は、4はI区5号土壙内、5はV区2号住居跡覆土中、7はV区4号住居跡覆土よりそれぞれ出土したものである。6は出土遺構は不明である。

## IV 北の内遺跡出土土器

### 1 縄文時代中期後半について

北の内遺跡より出土した土器群は、主として縄文時代中期加曾利E I式から堀之内I式である。このうち數量的に多くを占めるのは、加曾利E III式から称名寺式の土器であった。

加曾利E I式に比定される土器はV区の4軒の住居跡より検出された。このうち1号住居跡出土土器を除けば、他の3軒の住居跡出土土器の多くは加曾利E I式後半期のものである。この他2号住居跡よりは、曾利式的な内容を持つもの、大木式的な内容を含むものの出土がある。

加曾利E II式から加曾利E III式前半にかけての土器は、今回の調査では極めて少量であった。該期に属する遺構の検出も少ない。

加曾利E III式後半から称名寺式にかけてのものは、加曾利E III式の一部を除いて住居跡より出土したものではない。ほとんどが土壌出土或いは屋外埋甕に利用されたものである。

これらの他に今回の調査では、I区炉穴・同区2号住居跡内土壌より、それぞれ早期末期の条痕文系土器片、関山式土器片が少量出土している。これらについては、各遺構出土土器の事実記載の個所について説明してあるのでここでは省いた。

#### V区2号・4号・5号住居跡出土土器について

この3軒の住居跡よりは、加曾利E I式の後半段階に比定される土器群が出土している。とくに、2号・4号住居跡より出土した土器は全て床面直上の位置または炉内に埋設されたものである。従ってセットとして把えることのできるものと思う。3軒の住居跡のうち、4号・5号の2軒は相互に切合っており、住居跡構築に多少の時間差をみることができる。このことは後述するように出土土器にも反映している。しかし、その時間差は加曾利E I後半の範囲内で説明できるものである。

3軒の住居跡出土土器は、2号出土の浅鉢形土器(図-60の5)を除けばすべて深鉢形土器とその破片である。これらを分類すると大きく次の三種に分けることができる。1類、南関東のいわゆる加曾利E I式的なもの。2類、曾利式的なもの。3類、大木8b式的なもの。これらを出土資料に合わせると次のようになる。

1類；

2号住居跡 図-60の1, 3~4

図-61の1~3, 5

4号住居跡 図-65の1, 3

5号住居跡 図-66の1, 3~6

2類；

2号住居跡 図-60の2, 図-61の4

3類； 2号住居跡 図-61の6

1類の特徴は、整美されたスマートなキャリバー状の器形を持ち、渦巻文を中心とした区画文が口縁部上方に集約されることにある。頸部に無文帯のあるもの（図-61の1・3～4、図-61の1・5、図-65の1）、胴部に垂下する平行沈線、波状沈線などが施されるもの（図-65の1・3、図-66の3・6）があることも特徴的である。

2類とした2個体の土器に共通する特徴は、口縁部が外反する器形を持ち、そこが幅広い無文帯であることにある。胴部以下は両者とも地文繩文の上に沈線による文様を施している。

3類とされるものは図-61の6のみであり、少ない。

曾利式土器は中部地方南部（長野県諏訪湖周辺から八ヶ岳南麓、山梨県を中心とする地域）に広く分布する縄文時代中期後半の土器群である。現在I～V式の5段階に細別されている。このうち南関東の加曾利E I式後半の段階（大木8b式期）に併行するのは曾利式土器第II段階とされる。<sup>(1)</sup> 曾利式土器の基本的な特徴は次のようなである。かすかに内溝しながら大きく開く口縁部と、やや膨らみをみせてぼまる胴部。口縁部に幅広い無文部を残し、胴部以下は懸垂文で文様区画されるものや陰線による多種多様な渦巻文が施されるものがある。地文には条線や沈線などを使用する。このような特徴を持つ曾利式土器と、2号住居跡出土の2個深鉢は形態的には類似するが、胴部以下の文様はかなりの差異があることがわかる。図-60の2の土器の頸部には隆線による貼付けがあるが、これも曾利式土器とは直接つながらない。しかし、少なくともこのような形態の土器は、加曾利E I式或いは大木8b式の中からは決して生まれるものではないだろう。このような差異は何に由来するのであろうか。

曾利式土器の分布の中心は中部地方南部にある。この曾利式土器が関東の加曾利E I式の勢力圏を通るうち、E I式の影響を受けて当地に到達したものがこの土器と理解できる。加曾利E I式の後半期はE I式土器の影響力が強く、広域的な齊一化の進む時期であるといわれる。このような時期に遠方中部地方南部の土器が、E I式に媒介されて当地に辿りついても、それはあり得ることである。このことは曾利式土器内部においても同様であるらしい。曾利式土器第II段階では地文に繩文を利用するものが出現する。これは加曾利E式或いは大木式の影響とされる。更に第II段階は加曾利E式と大木式に祖型を有するタイプが曾利式土器の系統に組み入れられる段階であるとされる。このことは、北の内遺跡に

曾利式系の土器が持ち込まれたケースと同様、これもまた加曾利E I式の強い浸透力のなせる業であろう。加曾利E I式が媒体となって相互の地域が結びつけられたものである。

このような状況では、北の内遺跡以外にも曾利式的な土器の存在するはずである。存在してはじめて、加曾利E I式の強い浸透力が何によるのか説明できるであろう。これについては今後の問題としたい。

### 3軒の住居跡の先後関係について

前述のように4号・5号の2軒は互いに切り合っていた。それによって5号は4号よりも新しいことがわかる。このことは相互の出土土器にも反映しており、5号の深鉢形土器(図-66の1, 3・6)などにより新出の要素を読み取ることができる。図-66の1の土器は、口縁部の文様に円形・精円形を持つようになる加曾利E II式により近い要素を持つ。図-66の3・6の土器は地文網文の上に縦引された沈線間に網文が施されないなどE II式に通有の磨消網文により近い感を持たせるのである。これに対し4号出土土器(図-65)は渦巻文が口縁部に飾られていること、腹部の網文はまばらであるが沈線間に見られるなどより古いものと思う。

これら4号・5号住居跡と2号住居跡の時間差はどうであろうか。3軒の住居跡は互いに近接して構築されている(図-3)。同時に使用されたとするには近すぎるものと思う。当然3軒とも時間差を持つものと考える。これはやはり土器にも反映している。これによれば2号の方が4・5号よりも古いとすることができる。次の通りである。

栃木県における加曾利E I式土器は、海老原氏によれば、4つの段階に細分される。このうち第4の段階(定期)とされたものの特徴は次のように記される。「加曾利E I式の後半期は太木8b式に対比される土器で、器形と文様構成において一般化・齊一化の傾向が強く現われ関東タイプとしての展開がみられる。流れのようなキャリバー状深鉢形の器形曲線が完成し、渦巻文を中心としたスマートな横帶区画文が口縁部上半に飾られ、以下の器面は地文だけか時には地文すらも省略される。」これは北の内遺跡の3軒の出土土器の特徴とはほぼ合致する。従ってこの3軒の出土土器はこの第4段階のものとみてよい。3軒のうち2軒は切合っており、5号の方が4号より新しいこと、それが土器にも反映していることは先に記した。これら2軒と2号住居跡出土土器群と比較すると2号の方にやゝ古い要素があるとしたのは、図-60の3~4の土器にある。この土器に付された立体的な把手、口縁部の渦巻文と渦巻文を結ぶ隆線の形などがそうである。前者は加曾利E I式第3段階の特徴とされる箱状の把手に、後者はクランク文につながるものではないかと考える。図-60の1の口縁部にもクランク文につながるものがある。このような土器を持つ2号住居跡は、他の2軒よりもやゝ古いものと考えられよう。

2号、4号、5号の3軒の住居跡はこの順に新しくなり、それぞれの出土土器にもこの順に新しくなる要素をうかがうことができる。

## 2 称名寺式土器について

### (1) 北の内遺跡の称名寺式土器の出土状況

北の内遺跡の称名寺式出土遺構は次の通りである。

I区 1号～5号、7号土壙

III区 1号～3号屋外埋甕

IV区 1号～6号屋外埋甕

V区 3号住居跡（流れ込み）

この他出土遺構不明なものとしてI区に1個ある。

I区は今回調査した区域内で最も西寄りにあった（図-3）。I区内で称名寺式土器を出土した遺構は全て土壙であった。III区・IV区は屋外の埋甕である。I区とIII・IV区の間II区には称名寺式土器を出土する遺構はない。この間隔は何によるのか不明である。

I区の6基の土壙より出土した称名寺式土器は全て埋積土中位から上位に含まれていたものである。つまり、土壙が人為的に埋められたものでない限り、土壙の埋没がある程度進んだ段階で、人為的に廃棄されたものか自然に投入したものかいずれかである。前者の場合出土土器は同一時期のもの可能性が高い。後者の場合、埋積土中の遺物の出土層が重要になってこよう。遺物全てが同一層より出土し、他の上下の層からは出土していないとすれば、出土土器はおそらく同一時期である。1号～5号・7号土壙よりの出土土器は、それぞれ埋積土中の一つの層出土のものであった。更に4号土壙を除き、上下の層よりは出土していない。また1号及び2号土壙より出土した称名寺式土器は自然の營力によっては流入し得ない程大きな土器がある。4号土壙は、最も上位の層より土器片が出土したのであるが、調査前の工事による削平を考えれば、より下位の層に含まれていたと考えられる。かくして、I区の6基の土壙より出土した称名寺土器は、それぞれ同一時期のものと見て良いと考える。これを急頭に置いて以下記述する。

### (2) 北の内遺跡出土の称名寺式土器と伴出土器の分類

北の内遺跡の称名寺式土器とそれに伴出した土器群は大略次のようにまとめられる。但し、称名寺式土器の分類にあたっては出土量が少ないので把手は使用しなかった。

I類；全面的に縞文の施されているもの

II類；脚部に沈線によって文様を構成したもの。沈線内には縞文・列点文の施されるものの二種ある。（所謂称名寺式土器）

III類：I・II類は深鉢形と考えられるが、その他の器形のもの。

以上のうちII類が数量的に多い。

I類は、口唇部直下に無文帯を持ち、無文帯の区画には断面三角形の微隆起を廻らせるものである。図-38の1, 2, 8, 9・図-40の7がこれにあたる。このうち図-38の1及び2の土器の文様は加曾利E VI式といわれる土器の文様である。III類は、図-40の9のような浅鉢形土器、図-37の7の小形壺形土器である。このような文様を持つ浅鉢形土器は寡少にしてまだ知らない。小形・壺形土器は無文である。II類とした称名寺式土器に更に次のように分類できる。

#### II A類

沈線内に繩文の施される一群で、復原土器一個体を含む。I区の土壙からのみの出土である。文様の構成の仕方から更に3つに分けられる。

##### II A-1類（図-38の3～5・11, 図-43の3）

いずれも平縁で口唇部直下を無文帯としている。沈線による区画は直線的に縦方向に構成されるもの。II A-2類に比べて文様は単純なものである。

##### II A-2類（図-37の1～3・5, 図-40の1・3・5～6・8, 図-42の5～6, 図-43の2・4～6・8）

波状口縁を持つもの（図-40の6, 図-43の2）と口唇に小突起のあるもの（図-40の5）と平縁のもの（図-37の1～2, 図-40の8, 図-42の5～6）の三種がある。文様は曲線的なもので、渦巻など作られるもの。II A-1類に比べて文様は複雑になっている。図-45の5には刻みのある隆線が貼付けられている。

##### II B類（図-38の6～7, 図-39の2～3, 図-43の1, 図-52の1～2）

地文を無文とし、沈線による区画内に列点文を施したもの。I区の2基の土壙（2号、7号）より破片が出土しているが、III区の埋甕として使用された2個の深鉢形土器が目立つ。いずれも「V」字状或いは「Y」字状の沈線による区画を持つものである。口縁部の形態は図-38の6を除きみな平縁である。

##### II C類（図-52の3, 図-54の1）

沈線のみによって文様区画され、繩文、列点文は施されないものである。IV区より検出された埋甕使用土器（図-54の2～6）もII C類に含められるだろう。

以上、北の内遺跡より出土した称名寺式土器とそれに伴出した土器についてI～III類に分類した。更にII類称名寺式土器についてはA～Cの3種に細分したわけである。この他I区の出土遺構不明の土器（図-45の3）はII B類に、V区3号住居跡出土称名寺式土器

はⅡ C類にそれぞれ含まれる。またⅠ区3号土壙出土土器（図-39の1）については後述するのでここでは省く。

分類作業中提起された二つの問題について箇条書的に記すと次の通りである。

### 1 Ⅰ区2号土壙出土土器について

図-38の1・2のような加曾利のE IV式といわれるものに近い文様をもつ土器と称名寺式土器の伴出をどのように考えるか。

#### 2. Ⅰ区の土壙出土土器とⅢ・Ⅳ区埋甕に使用された土器の差異は何によるのか。

このうち1について、類似した資料を出土した例として埼玉県志久遺跡<sup>(5)</sup>を挙げることができる。志久遺跡8号住居跡からは、称名寺式の成形「法」によって成形され、加曾利E IV式の文様のみが施文されたとする深鉢形土器と称名寺式土器がともに出土している。8号住居跡の土器群は、加曾利E IV式の直後=称名寺Ⅰ式期の土器群の構成を示すとされている。志久遺跡の8号住居跡出土の称名寺式土器の文様は、沈線による区画内に繩文が充填され区画は「J」字文またはカギ状のモチーフを持つものである。この点北の内遺跡Ⅰ区2号土壙出土の称名寺式土器の文様は異なる。千葉県鉈切洞穴遺跡出土土器中、第Ⅲ群繩文後期土器第I類磨消繩文a系とされた文様が縦に構成される磨消繩文を持つ土器群の中に図-38の2のような文様の土器を見ることができる。しかし、図-38の4~6のような文様を持つ土器の類例は見つけることができなかった。いずれにしても、志久遺跡8号住居跡と同様、北の内遺跡Ⅰ区2号土壙出土称名寺式土器は、加曾利E IV式の文様を持つ深鉢形土器がともに出土していることにより、古いタイプのものであると考えられる。

2の問題については、沈線内に列点文、刺突文の施されるものや沈線内は無文のままのものは、沈線内に繩文が充填されるものよりは遅れて派生するものらしい。従ってⅢ・Ⅳ区の埋甕とⅠ区の土壙より出土した土器は、多少の時間差があるものと思う。これは、本地方における称名寺式土器の資料の増加を待って、細分のうえ判断しなければならない問題であり、今後の課題となるものである。

### （3）北の内遺跡の加曾利E IV式設定の可能性

加曾利E IV式は、加曾利E III式から称名寺式への間にある文様上の断差故設定されたものである。しかしE IV式は、E III式の中に包括されるものだという主張が提出されるなど、まだ確定したものではない。栃木県においては加曾利式の末葉の土器について、海老原原氏<sup>(6)</sup>は次のように考えられている。

「大木96と大木10の一部とがE IIIにあたると考える。私はこれまで大木10=称名寺と考えてきたが、福島方面の大木10を見るとE IIIに含められるべきものと称名寺に近似したものとがあるように感じられるので、便宜上、E IIIに含められる方を大木10古・称名寺に対比

される方を大木10新として考えてみた訳である。」そして、「大木10式の古い段階に該当する上器は当地方において文様や器形などその構成要素がまだ明らかになっていないといえる」とされ、那須町臨沢遺跡・矢板市上長井遺跡の資料にその片鱗を見る程度とされている。一方大木10式の新しい段階については、「さらに把握が困難である」とし、「この段階では称名寺式に移行するのが私の予想である。目下のところ稀薄な大木10式に対して称名寺式は堀の内式の先行形式として当地方にあっては明白に実在し、いくつかの様式をもつ土器群としてとらえられる」とされる。そして最後に「大木10式の新しい段階の土器を抽出するために称名寺式の細分とセット関係の把握が必要になるであろう」と述べられている。つまり、大木10式古をE III式に、同新を称名寺式に対比とされるのである。換言すれば、E III式と称名寺式間のE IV式の介在は考えてはいられないのである。最後に大木10式新の内容を明確にするため、称名寺式の細分の必要性を述べられている。

これに対し北の内遺跡の中で大木10式的な資料と考えられるのは、I区出土遺構不明の土器(図-45の2)の1点のみである。調査として不手際ではあったが、この土器の出土遺構が不明であること、共伴資料がつかめなかつたことは甚だ残念である。<sup>(9)</sup> この土器は渦巻状の縄文区画帯を持つ点、福島県塙尻上原B遺跡の4号住居跡の「29-7」の土器に類似する。本土器について調査者は大木10式の初頭とされている。海老原氏はこの土器を取り上げて、<sup>(10)</sup> 文様、器形を併せて、「称名寺」的な印象を強く感じるとされている。私にも大きく聞く口縁の形(口唇は破損しているが)、渦巻を主体とする文様に称名寺式に近い様相が感じられた。いずれにしても上記した通り北の内遺跡では大木10式的なものはこれ1点のみで、しかもこれと文様の類似する称名寺式土器はついに検出されなかった。

それよりもまず北の内遺跡では加曾利E IV式とされる土器に類似するものの出土例を挙げることが可能である。更に前記したように加曾利E IV式の文様を持った土器と称名寺式土器の伴出例があるのである。I区2号土壙が伴出例であり、V区2号土壙出土土器(図-71、72)、同区3号土壙出土土器などにその出土例を見ることができる。しかしV区2号土壙出土土器にはの中には、より古い要素を持つ土器も含まれている(図-72の2・3)。これらの土器について説明できなければならないとは思う。これは今後の問題として残しておきたいと思う。いずれにしても北の内遺跡において、加曾利E IV式とされる資料が指摘し得ることは、本地方におけるE IV式の設定の可能性を示唆するものであろう。そして、I区2号土壙、同6号土壙出土土器群は称名寺式直前にE IV式のあったことを意味している。次に称名寺式の古い段階の文様とのつながりを考えはじめてE IV式存在の確実性が高まるのであるが、北の内遺跡ではそれについて説明し得る資料はない。またE III式からE IV式を分けるに明確な根拠を持ってなければならない。これも今後の課題としていきたい。ここでは本県における加曾利E IV式存在の可能性を呈示するにとどめる。

#### (4) 称名寺式土器細分の可能性

北の内遺跡の称名寺式土器は、先述のように大きくA, B, Cの3類に分けることができる。更にA類は沈線による区画が直線的に縦方向に構成されるもの(II A-1類)、区画は曲線的なもので渦巻など作られるもの(II A-2類)に分けられる。文様は一見すると、前者は単純なもの、後者は複雑なものと感じられる。II A-1類には、加古利E IV式の文様をもつ土器が伴出することから、称名寺式の中でも古いタイプのものと考えた。II A-2類にはそのような土器の伴出はない。よって後出的なものとはできないだろうか。

より複雑な文様を持つ称名寺式土器は、今村氏の称名寺式の細分では称名寺I式C類とされ、称名寺I式B類から変化したものとされる。称名寺I式b類はE IV式の伝統を強く有しているとし、渦巻文などが多用されるものであるとする。北の内遺跡2号土壙出土称名寺式土器はいずれも破片であり文様の全部は知れないが、称名寺I式B類とはかなり異なる文様をもつものと思う。これは地域的な特性に由来するものだろうか。いずれにしても、北の内遺跡II A類のうち1類は2類に先行し得るものであるだろう。

II A類とII B類及びII C類の関係については、前述のように確実性に乏しいが、沈線による区画内に列点文を有するものは、網文が充填されるものより遅れて出現するらしいことから、II A類はII B類及びII C類より先行する可能性が指摘できる。I区3号土壙出土土器は「三十稻場式土器について」の項で述べるが、この可能性を高めるものとして有効である。

かくして、北の内遺跡の称名寺式土器はA, B, Cの三種に細分される可能性を指摘し得る。

次に本県既報告の称名寺式資料について簡単に見てみる。

II A-1類に似るもの

矢板市上長井遺跡<sup>19</sup>の6、芳賀町弁天池遺跡の11などに見られる。

II A-2類に似るもの

氏家町ハットヤ遺跡出土土器、今市市八日市遺跡出土土器、弁天池遺跡の10, 12, 13などに見られる。

II B類に似るもの

ハットヤ遺跡出土土器、藤岡町後藤遺跡<sup>20</sup>の41, 42、弁天池遺跡の7~9などに見られる。

II C類に似るもの

後藤遺跡の43、同遺跡小豊穴より出土した完形土器などに見られる。このうち後者には、器形的、文様的に壺之内式に近い様子を見て取ることができる。

以上、北の内遺跡の称名寺式土器を検討してきたわけであるが、未だ充分なものではない。今後とも資料の増加を待つとともに、より詳細な観点を用意した上、再検討したいと

思う。

註

- (1)米田明訓、「曾利式土器編年の基礎的把握」1978, 1 長野県考古学会誌30 15頁
- (2)註(1) 13~14頁
- (3)海老原郁雄;「湯坂遺跡」1979, 3 大田原市教育委員会 53~63頁
- (4)註(3)
- (5)城近憲一 笹森健一他;「志久遺跡」 1976 埼玉県遺跡調査会 84~93頁
- (6)金子浩昌 和田哲 玉口時雄他;「鉈切洞穴遺跡」1958 千葉県教育委員会52~53頁
- (7)堀越正行;「加曾利E III式土器研究史」 1971, 信濃24-2, 3, 4
- (8)海老原郁雄;「栃木県の加曾利E III式の大別と細分」1975, きぎし第4号 11頁
- (9)福島県教委・日本道路公団;「6. 上原B遺跡」1972, 東北縦貫自動車道文化財調査報告書第47集
- (10)註(8) 5頁
- (11)今村啓爾;「称名寺式土器の研究(土)」1977・7 考古学雑誌 第63巻第1号
- (12)歷代方子「上長井遺跡」1971矢板市教育委員会
- (13)宇都宮大学考古学研究会;「芳賀町弁天池遺跡」1970
- (14)栃木県史編さん委員会「栃木県史資料編考古二」1979 268~269頁
- (15)註(14)の資料編考古 323~328頁
- (16)竹沢謙;「後藤遺跡」「東北縦貫自動車道理歴文化財調査報告書」1972, 栃木県教育委員会

### 3. 三十稻場式土器について

#### (1) 出土遺構と出土状態

I 区 3 号土壙は単純な形態の土壙であった。(図-7) 確認した面での平面形は径約1mの円形である。深さは約40cmをかる。土壙内埋積土は上下二層に分けられる。二層はそれ程明瞭に分別されたものではない。両層ともロームの粒子やブロックを多く含み、色調の相違はそれ程大きなものではない。ただ I 層にはローム粒などの他、炭化物を含んでおり、II 層に比してやゝ黒ずんで見えた程度の区別ができた。また埋積土と近辺のローム層との色別も明瞭にはできなかった。このような埋積土の状況から土壙の埋没の仕方を判断すれば次の二点になる。ひとつに I, II 層の区別が困難であることから、両層の埋没にはそれ程の時間差が無いといえよう。ひとつに近辺のローム層との色別が困難なことから、土壙が埋られ埋まるまでの時間が短いものであったことを示しているだろう。この二点から、土壙内埋積土が人為的に埋められたものとすることができるのではなかろうか。

土壙内より検出された遺物は土器片のみである。それらは全て I 層上位に含まれていた。I 層上位とは、土壙の開口部位に近い埋積土である。開口部位とはいへ、土壙の開口部は我々の確認し得た面でのものであった。確認した面はローム層中まで削平された段階のものであった。土壙本来の開口部は更に上にある。よって土器は、土壙本来の開口部位以下の埋積土中に包含されていたであろう。

出土土器は二種類ある。ひとつは三十稻場式類似のもの、ひとつは称名寺式土器である。いずれのものも破片で出土した。三十稻場式類似の土器は破片で23片、称名寺式土器は2片である。このうち前者は土壙内にバラバラになって出土したが、全て接合できるものである。接合した結果に岡の通り(図-39の1)である。底部は欠損しているが、全体の器形が推測できる程大きなものであった。いかにバラバラに出土したとしても、破片全てが接合出来たことは、単に流れ込んだことを示してはいないだろう。つまりこの土器は、どのような状況でかは不明だが、人為的に一括廃棄されたものと考える。称名寺式土器片も、出土した埋積土中の位置はほど同じである。これも三十稻場式類似の土器と同時に廃棄されたものと思う。

以上三点より引出せることは次の通りである。土壙は埋られた後、短時間のうちに人為的埋め戻された。土器は、土壙埋戻しの最後的な段階、或いは土壙がある程度埋められた段階に土壙内に含められた。よって土壙が用をなした時期は土器の示す時期とほど同じと考えられる。更に出土する二種類の土器は出土位置を同じくすることから互いに共伴し得ると考える。しかし、土器がなぜわざわざ破片とちれて廃棄されたのか、破片で廃棄され

たとすれば何のためにか、これら二点は今後の課題である。

## (2) 三十稻場式土器について。

三十稻場式土器は知つての通り、新潟県において縄文時代初頭に位置づけられている土器群である。その大きな特徴は圓形土器腹部に施された各種の刺突文とそれに見合う圓形土器にある。多少の異論はあるが、新旧二段階の変遷が考えられている。古い段階には称名寺式的な文様を持つものを含み、新段階には壺之内I式的な要素を持つとされる。新段階は南三十稻場式と呼称されている。<sup>(2)</sup> 北の内遺跡出土のものはこのうち古い段階のものにより類似性が高い。

三十稻場式と南三十稻場式は圓形土器の形態に関する限り大きな差異はないらしい。両者の違いは、刺突文の変化、口縁部文様の変化にある。後者の段階に入る刺突文はきわめて微少になり、前者に特徴的であった花弁状の大きな盛り上がりや突瘤のあるものは全くなくなるとされる。<sup>(3)</sup> 口縁部の文様は、前者に特徴的な単純な橋状の把手から、壺之内I式によく使用される「8の字状」<sup>(4)</sup> 或いは円形の貼付けなどが目につくようになるらしい。

新潟県見附市耳取遺跡では、出土土器に旋された刺突文を刺突貝・刺突方法などから4種のものに分類された。これらのうちB文様「花弁状刺突文」としたものが、北の内遺跡出土土器の刺突文にあたる。B文様について上記文献より引用すれば次の通りである。「半載またはそれ以上に分割された竹管を工具とし、約20~30度の角度で工具を刺突し、盛り上がった粘土を指で押圧している。」指で押圧した場合、器面上に指紋が残るのはあり得ることである。北の内遺跡出土資料の器面の粘土盛り上がり部分に指紋を確認することができた。B文様以外に確認された刺突文についてはここでは省略する。

以上、刺突を有する圓形土器について記してきたわけであるが、これのみで三十稻場式土器全体が説明できるのではない。この他に同巧の圓形土器でありながらも刺突文の変わりに縄文或いは撚糸文を持つもの、耳取遺跡B群第6類土器とされるものがある。これらの土器と圓形土器をもって三十稻場式を表わす基本的なセットと考えることができるのでないだろうか。

## (3) 北の内遺跡出土資料について、

<sup>(5)</sup> 三十稻場式圓形土器は形態的に二種把握されている。しかし、多くは口径に比べて器高の低い扁平な器形である。北の内遺跡出土資料(図-39)の器形は円筒形に近いものである。また三十稻場式圓形土器腹部には一条の隆帯がめぐらされ、ほとんどの場合隆帯上には連点文が施される。北の内遺跡のものは単純な隆帯のままである。腹部に旋された刺突文は前述の通り「花弁状刺突文」と考えられる。また口縁部と無文につくり、橋状の把手

をつけるなどは三十稻場式に共通する。つまり、北の内遺跡出土のものは、文様的には三十稻場式と同様であるが、器形的にはかなり変形しているものである。これは何に由来するものか不明である。そこで注目されるものは、先述の三十稻場式の粗製土器である。本遺跡のものは円筒形に近く、器形はその粗製土器に似る。この器形に構造の把手とつけ、胴部に刺突文を旋したものが本土器であったと考える。文様的には前述の通り古い段階に含まれる。

三十稻場式土器は地域性の強い土器群である。北陸地方一帯の後期初頭は独立巻を形成したといえる程である。このような地域性の強い三十稻場式土器がなぜ本県にまで波及してきたのか、またそれはどのような系路を辿ってきたのか説明することはまだできない。ただ三十稻場式土器が現われ、当地に来るまでは多少の時間を考えることが必要である。本土器は三十稻場式の古い要素を持つ。これが当地に至るまでの時間を考え、伴出した称名寺式土器（図-39の2、3）は該式のなかでもより新しい段階とすることができよう。今のところは、三十稻場式土器については、以上のことしか記述できることである。以後資料の増加をまって、波及由来、系路などについて考えたい。

## 註

- (1) 確認した面とは、本調査が以前の工事によりローム上面まで削平された段階のものであることにより、ローム上面のことである。
- (2) 「根立遺跡」（長岡市科学博物館昭和50年）34～35頁
- (3) 变形土器の器形は、口径に比して器高の低い丸んぐりしたもの、器高の高いものがある。
- (4) 註2)前掲書、34頁記載のJ群土器  
また刺突文の変化の他、文様の変化を次のように把えている。  
「J群そしたものは、（略）特徴ある隆起線や縦回転の燃糸文、無節繩文の大木的要素、称名寺式的な要素、より中期的な要素に変わって、めがね文や縁帶的な口縁に集約した文様構成をなし、磨消繩文や沈線条線文、曲・直線的文様構成をなす土器すなわち、堀之内工式影響の強いものが伴ってくる。」
- (5) 註2)前掲書、図版第9図に良好な資料が載せられている。
- (6) 「耳取遺跡」（見附市教育委員会、昭和46年3月）、10～12頁
- (7) 註6)前掲書ではB群第6類について次のとおり記載される。  
「口縁が直立し円筒形を呈する土器で、口頸部に一条の隆起線を持ち、それを境に斜繩文、燃糸文を施した土器。」
- (8) 註3)
- (9) 粗製と精製の区別は問題があるが、ここでは註7)の土器を粗製土器としておく。

## 4. 歴史時代土器について

IV区歴史時代住居跡及び同土壌より出土した実測の可能な土器は38個体分であった。

(図-56~58) このうち住居跡出土のものは23個体分、土壌出土のものは15個体分である。器形は、羽釜・甕・高台付皿・壺(高台付のものも含む。<sup>(1)</sup>)の四種ある。これらのうち最も多いものは壺形土器であり、28個体分を数える。壺形土器28個体分のうち、住居跡より出土したものは17個体分と住居跡の大きさからして多すぎる数である。対して甕形土器、羽釜など煮炊きに関係するものは少ない。このことは住居跡が、一種の作業小屋的な性格をもっていたことを意味しまいか。更に近接の土壌が一種の窯跡とみられることから、時期的に住居跡と同時期と考えられるとすれば、住居跡は土壌と大いに関係のあるものとみることができよう。

壺形土器は高台付のものとそうでないものの二種類ある。更にそれらは大きさ、器面の調整などからいくつかの種類に分けられる。以下はこれら壺形土器をはじめ各器形の特徴を記しを時期的位置について考察するものである。なお住居跡出土土器はH、土壌出土土器はDとする。

### 壺形土器 (図-56~58)

高台付のものとそうでないものの二種類る。どちらも、胎土中に多量の砂粒を含み、焼成の程度は非常に良いものである。

1類、(H 8~17, D 4)

いずれも浅いもので、口辺部のやや外反する。ゆがみがひどく、雑な作りである。体部外面中位に一稜作るのが特徴的である。内外面は「ナデ」られており、光沢を持つ。底部には糸切り痕がそのまま残されていることが多い。色調は灰褐色または赤褐色。胎土中に長石などの白色の砂粒を多量に含んでいる。焼成はかなり良い。

2類、(H 7, D 5, 8, 9)

1類に比べてやや大形のものであり、底部よりの立ち上がりは直線的な外反をみせる。内外面には明瞭なロクロの痕を残し、凹凸が目立つ。器体のゆがみはない。「ナデ」「削り」などの器面の調整は全く施されない。底部には糸切り痕をそのまま残す。色調は赤褐色。胎土に長石などの白色の砂粒を多く含む。焼成はかなり良い。

3類、(H 18, 19, D 1~3)

1, 2類に比べて小形のものを3類とした。底部よりの立ち上がりは内湾気味である。いずれも内外面にロクロ痕を明瞭に残している。内外面ともに特別な調整は施されない。底部には糸切り痕をそのまま残す。色調は灰褐色又は淡褐色である。口径はいずれも10cm

前後、高さは2.5cm前後と器形は定形化している。底径は5cmから6cmとひらきはあるが、H 1.9, D 3のように底部の突出しているものは標して下さい。これら底部に突出のあるものは、中世の「カワラケ」につながっていく土器とみることができるのでないだろうか。

## 高台付壺形土器

### 1類、(H 2.0, 2.3)

壺形土器2類に高台を付されたもの。高台は比較的大きく、外へ強くふんばるものである。体部はやゝ内湾気味に立ち上がり、口唇部にいたってかすかに外反する。内外面にはロクロ痕が明瞭に残るのみで、調整は全く施されない。胎土には長石などの白色の砂粒を多量に含み、色調は赤褐色である。焼成はかなり良好である。

### 2類、(H 2.1, 2.2・D 6, 7, 13, 14)

体部が内湾気味に立ち上がり、小さな高台の付けられもの、ヘラ磨きなどの施されるものを2類とした。2類には内黒のものとそうではないものの二種ある。H 2.1, 2.2, D 1.4は前者にあたり、外面にロクロ痕が残る。D 1.3は後者にあたり、内外面(高台部にも)には微細なヘラ磨きがまんべんなく施されている。D 6, 7はやゝ大形のものであるが後者に含まれるものと思う。D 1.4は高台のすぐ上、外面にヘラ先による文様が施されている。胎土に砂粒を多量に含み、色調は淡赤褐色から赤褐色を呈する。

## 高台付皿形土器 (D 1.0~1.2)

いずれも小形のもので、皿部は直線的に短く開き、高台は非常に小さいものである。三個とも胎土に砂粒を多量に含み、色調は赤褐色に近い。焼成は非常に良好であり、1.2にはひび割れがある。調整の仕方は三個三種である。1.0は調整は特別施されず、外面(皿部)のヘラ先による刺突文を特徴とする。ヘラ先による文様はD 1.4と同様である。1.1は皿部内外面に微細なヘラ磨きが施される。1.2は皿部内外面及び高台部内外面にヘラ磨きが施される。皿部の底部には糸切り痕が残され、高台は貼付高台である。

## 壺形土器 (H 2~6)

いずれも口縁部の破片である。2~5の大形のものと6の小形のものの二種ある。このうち6には、内面にロクロ痕のような凹凸を見ることができる。大形のものは、2, 3のような口縁部が短く外反し、口唇部の角ぼるもの、4, 5のように口縁部はゆるく外反し口唇部は丸味を帯びるもの二つある。このうち2, 3の口唇部の形態には、本県において8世紀後葉から9世紀前半に盛行する「下野型」の壺形土器と呼称される土器のそれに近い要素をみることができる。五個体とも胎土に多量の砂粒を含み、焼成はかなり良い。

色調はいずれも赤褐色に近い。

## 羽 篓 (H 1)

住居跡より 1 個体分のみ検出。口縁部の破片。内窓気味の口縁部をもつものである。口唇部から約 2 cm に一巡りツバが貼付されている。赤褐色に近い色調で、胎土に多量の砂粒を含む。

以上、北の内遺跡出土の歴史時代土器について器形毎にそれぞれの特徴を列記したわけである。これらの諸特徴のうち、全体の時期を考える上で有効であると考えられるものを箇条書的に述べると次の通りである。

1. 坂形土器・高台付坂形土器のはとんどのものが赤褐色に近い色調で焼きしまりが良いため、土師器・須恵器の区別がつき難い。
2. 坂形土器 1 類は雑なつくりで、ゆがんだ形である。
3. 坂形土器 2 類・高台付坂形土器 1 類は、外面にロクロ痕が明瞭で、何等調整は加えられない。
4. 坂形土器 3 類の存在。
5. 羽釜の存在。
6. 鰐形土器の一部に、いわゆる下野型の鰐形土器の名残りを見ることができる。

以下は、これら 6 点をもとに時期的位置づけをする。

第 1・3 点についてみる場合、まず脳裏をかかめるのは、「須恵系土器」或いは「上師質須恵」と呼称されるものの存在である。別にこれらを直接観察したわけではないので不明確であるが、その諸特徴についてみると、類似性が高いのが北の内遺跡出土の土器<sup>(2)</sup>である。「須恵系土器」とは多賀城崩辺の調査結果から指摘されたものである。須恵器の系統を引き、糸切りによりロクロから切り離され、再調整の全くないもの。酸化炎で焼成され、土師器よりも硬度の高いものとされる。先の 1・3 点の特徴を持つ本遺跡出土坂形土器と、この「須恵系土器」とはかなりの類似性があると考えられる。「須恵系土器」の年代は 11 世紀から 12 世紀末頃までとされる。<sup>(3)</sup>

羽釜は、本遺跡では 1 個体分検出された。栃木県内では他に 1 個、矢板市後岡遺跡で検出されている以外全く知見がない。後岡遺跡では住居跡が 6 軒発掘され、出土遺物からいざれも国分期という時期を与えられている。後岡遺跡の羽釜と北の内遺跡出土の羽釜とは「ツバ」の形態に相違がある。<sup>(4)</sup>

埼玉県田中前遺跡では、出土土器について、第 I ~ VII 段階の変遷過程を想定され、そのうち第 III 段階を羽釜伴出の下限期と考えられている。第 III 段階は 10 世紀前半に位置けられた。

第 4 点のような小形の坂形土器については、下野国府跡 SX-006~008, SX-  
—68—

011の出土土器群に類似がある。そして、北の内遺跡出土土器群は次の諸点により SX-006-008 の土器群とより共通性が高い。ひとつに小形壺形土器の存在。ふたつに、SX-006, 008 出土の高台付壺形土器 11~13 ように高い高台、外湾気味に聞く高台をもつものの存在。(北の内遺跡では H20, 23) みつたに、SX-006 出土の壺形土器 7 のように底部から内湾気味に立ち上がり口縁部で外反するもの存在。(北の内遺跡では壺形土器 1 類)

(5)  
下野國府跡では検出構造を A~C の三期に大別されている。SX-006-008 は B 期又はそれ以降とされた SX-011 と土器群について一部共通性がみられるとしている。時期的には、大略的に A 期の土器群を 10 世紀段階に位置づけられた。従って SX-006~008 の土器群は、B 期又はそれ以降とされるのであるからそれより後出すると考えられるのである。これらについては今後の検討に待すべき内容が多いとされた。

第 6 点の壺形在器は H2, 3 をいう。勿論これは、厳密にいえば、いわゆる下野型と呼称される壺形土器とは、口縁部の形態も調整の方法もかなり異っている。ただ短く外反する口縁部をもつこと、H2 の口唇部に短い立ち上がりを認めることができることなど、「下野型」の壺形土器の名残りを見ることはできないかと考えたのである。H4, 6 の壺形土器について比較し得る事例は寡聞にしてまだ知らない。H6 のロクロ痕を列す小形の壺形土器は埼玉県田中前遺跡の第Ⅳ段階から見ることができる。第Ⅳ段階は 10 世紀中頃に位置づけられる。

以上から引き出される結論は、北の内遺跡の歴史時代土器群は 10 世紀代に位置づけられるということである。更に本県における 9 世紀代の上器群と比べて見た場合、次の諸点で上器の構成に懸隔を感じる。北の内遺跡の土器一とくに壺形土器は、胎土・焼きしまり具合など須恵器と土師器の区別がつき難いこと。小形壺形土器の存在。壺形土器の底部の糸切り痕などからである。但し、前述のように壺形土器の一端に「下野型」の名残りが認められるとすれば、土器群に懸隔があるとはいえ案外短い時間のうちに変遷したものかもしれない。これに対し、「須恵系土器」を比較資料として考えれば、11 世紀代の可能性も出てくるのである。これらについては、今後検討すべき課題である。本項では一応 10 世紀代に位置づけたい。

これら北の内遺跡歴史時代土器と比較し得る栃木県内出土事例は未だ少ない。前述の下野國府跡の資料を除けば、壬生町銭渕遺跡検出の 5 軒の住居跡出土土器が挙げられるくらいである。壬生銭渕遺跡出土土器群は、小形壺形土器、高い高台を持つ壺形土器、壺形土器は回転糸切り離しのままであることなどに北の内遺跡出土土器との類似性を見る事ができる。壬生銭渕遺跡の 5 軒の住居跡はおそらく 10 世紀段階に位置づけられるであろう。

(1) 本項において壺形土器としたものの中には、壺形土器とした方が適当なものもある。しかし、壺と壺の区別は困難であると思う。ここでは羽釜以下三種類以外を全て壺形土器とし

て扱うこととする。

- (2) 桑原滋郎「須恵系土器について」,『東北考古学の諸問題』, 東北考古学会編昭和51年
- (3) 山ノ井清人他「後岡遺跡」, 『東北新幹線埋蔵文化財調査報告書—その2—』, 栃木県教育委員会 昭和50年 74頁
- (4) 市川 修他「田中前遺跡」,埼玉県遺跡調査会,昭和52年 60~62頁
- (5) 大金宣亮,田熊清彦他「下野国府跡Ⅰ」栃木県教育委員会,昭和54年 51~53頁
- (6) 註5 59~63頁
- (7) 註4前掲書
- (8) 橋本澄朗,川原田典,梁木 誠,「薬師寺南遺跡(本文)」栃木県教育委員会 昭和54年 180~209頁
- (9) 橋本澄朗,中山 晋,「壬生銭渕遺跡」栃木県教育委員会 昭和53年  
57頁V結語(2)において、5軒の住居跡は9世紀後半の所産とされているが  
北の内遺跡出土土器について御教示を願った際、銭渕遺跡出土土器は10世紀代ま  
で下る可能性のあることを示された。

## V ま と め

北の内遺跡の調査結果は以上の通りである。最後に調査の成果をまとめるとともに、今後の課題を記しておきたい。

- (1)加曾利E 1式後半期の住居跡はV区より4軒検出された。出土土器の内容から1号、2号、4号、5号の順に新しくなる。2号住居跡より曾利式系統の土器が2個検出されたが、純粹な曾利式土器ではない。加曾利E 1式後半期は、南関東の加曾利E Iの文化が全関東までも席捲するような勢いを持つ時期という。曾利式系統の土器はこの勢いに乗り、関東的な変容を受けて当地に至ったものであろう。
- (2)称名寺式土器は、大略3種類に分類できた。更に各類の伴出遺物から北の内遺跡出土称名寺式土器の組分の可能性が示すことができる。今後は本県における該式土器の資料を蒐集し、文様の分類などから再検討してみたい。
- (3)三十稻場式土器は、新潟県の後期初頭に位置づけられる土器型式である。新旧二段階の変遷が確認されているが、北の内遺跡のものは古い段階に類似する。伴出した称名寺式土器は三十稻場式が当地に至るまでの時間を考えて後出的なものとすることができる。
- (4)古墳時代の住居跡は3軒検出されたが、出土遺物から判断して3軒とも時期差がある。I区1号住居跡は五領式期、同2号住居跡は和泉式期末、II区古墳時代住居跡は鬼高I式期の所産と考えている。
- (5)歴史時代住居跡、同土墳は出土遺物より判断して10世紀以降のものと考えている。本県においては、この段階に位置づけられるものは未だ類例に乏しい。今後更に検討すべきものである。
- (6)北の内遺跡では加曾利E III式期から堀之内式期にかけてのものと考えられる土壙を総数82基検出することができた。これら土壙は整った形を持つものが少なかったこと、出土土器に骨片を内蔵していたものがあったこと、打製石斧が埋葬に副えられたような状態で出土した土壙のあったことなどから墓壙的な性格の強いものであると考える。更に埋葬施設とされる称名寺式期の屋外埋葬が11基検出された。土壙も多くの称名寺式期のものと考えられる。これも土壙が墓壙的な性格が強いとする根拠になろう。

## 図 目 次

図-1 北の内遺跡周辺の遺跡	78
図-2 北の内遺跡周辺図	79
図-3 調査区域図	80
図-4 I区1号土壤	83
図-5 I区2号土壤	83
図-6 I区4号, 5号土壤	83
図-7 I区3号土壤	84
図-8 I区6号土壤	84
図-9 I区7号土壤	84
図-10 I区8号土壤	84
図-11 I区9号土壤	85
図-12 I区 炉穴	85
図-13 I区1号住居跡	86
図-14 I区2号住居跡	86
図-15 I区2号住居跡内土壤	87
図-16 II区1号土壤	87
図-17 II区2号土壤	88
図-18 II区3号土壤	88
図-19 II区2号土壤そば埋甕	88
図-20 II区古墳時代住居跡	89
図-21 III区1号埋甕	90
図-22 IV区1号埋甕	90
図-23 IV区4号埋甕	90
図-24 IV区2号, 3号埋甕	91
図-25 IV区5号埋甕	91
図-26 IV区6号埋甕	91
図-27 IV区歴史時代住居跡	92
図-28 IV区歴史時代土壤, 5号埋甕	93
図-29 V区1号, 2号, 3号住居跡	94
図-30 V区4号住居跡	95
図-31 V区5号住居跡	96

図-32	V区2号住居跡石圓炉	97
図-33	V区4号住居跡石圓炉	97
図-34	V区1号屋外炉	98
図-35	V区1号土壤	98
図-36	V区2号土壤	99
図-37	I区1号土壤出土土器	103
図-38	I区2号土壤出土土器	104
図-39	I区3号土壤出土土器	105
図-40	I区4号土壤出土土器	105
図-41	I区6号土壤出土土器	106
図-42	I区6号, 5号土壤出土土器	106
図-43	I区7号土壤出土土器	107
図-44	I区9号土壤内埋甕使用土器	107
図-45	I区出土遺構不明の土器	108
図-46	I区1号住居跡出土土器	108
図-47	I区2号住居跡出土土器	109
図-48	II区1号土壤出土土器	109
図-49	II区2号土壤出土土器	110
図-50	II区3号土壤出土土器	110
図-51	II区古墳時代住居跡出土土器	111
図-52	III区埋甕使用土器	112
図-53	III区4号埋甕使用土器	113
図-54	IV区埋甕使用土器	114
図-55	IV区遺構に伴わない土器	115
図-56	IV区歴史時代住居跡出土土器(1)	116
図-57	IV区歴史時代住居跡出土土器(2)	117
図-58	IV区歴史時代土壤出土土器	118
図-59	V区1号住居跡出土土器	119
図-60	V区2号住居跡出土土器(1)	120
図-61	V区2号住居跡出土土器(2)	121
図-62	V区3号住居跡出土土器(1)	122
図-63	V区3号住居跡出土土器(2)	122
図-64	V区3号住居跡出土土器(3)	123
図-65	V区4号住居跡出土土器	124

図-66	V区5号住居跡出土土器	124
図-67	V区1号屋外炉使用土器・周辺出土土器1)	125
図-68	V区2号屋外炉使用土器	125
図-69	V区1号屋外炉周辺出土土器2)	126
図-70	V区1号土壤出土土器	127
図-71	V区2号土壤出土土器1)	127
図-72	V区2号土壤出土土器2)	128
図-73	V区3号土壤出土土器	128
図-74	V区遺構に伴わない土器	129
図-75	北の内遺跡出土石器(1)	129
図-76	北の内遺跡出土石器(2)	130
図-77	北の内遺跡出土石器(3)	131
図-78	北の内遺跡出土土製品	132
図-79	I区炉穴、2号住居跡内土壤出土土器	133

## 図版目次

図版 1	(上) 遺跡遠景 .....	137
	(下) I 区 1 号土壤遺物出土状態 .....	137
図版 2	(上) I 区 2 号土壤 .....	138
	(下) I 区 炉穴 .....	138
図版 3	(上) I 区 8 号土壤 .....	139
	(下) I 区 2 号住居跡(南東より) .....	139
図版 4	(上) II 区 1 号土壤 .....	140
	(下) II 区古墳時代住居跡(調査中) .....	140
図版 5	(上) II 区古墳時代住居跡遺物出土状況(鉢, 瓢) .....	141
	(下) 同 (环) .....	141
図版 6	(上) III 区 1 号埋甕 .....	142
	(下) III 区 2 号埋甕 .....	142
図版 7	(上) III 区 3 号埋甕 .....	143
	(下) III 区 4 号埋甕 .....	143
図版 8	(上) IV 区 1 号埋甕 .....	144
	(下) IV 区 2 号・3 号埋甕 .....	144
図版 9	(上) IV 区 1 号埋甕断面 .....	145
	(下) IV 区 5 号埋甕 .....	145
図版 10	(上) V 区 5 号住居跡(遠方は左より 3 号・2 号・1 号住居跡) .....	146
	(下) V 区 1 号住居跡・2 号屋外炉 .....	146
図版 11	(上) V 区 2 号住居跡(南より) .....	147
	(下) V 区 2 号住居跡石圍炉 .....	147
図版 12	(上) V 区 4 号住居跡 .....	148
	(下) V 区 4 号住居跡石围炉 .....	148
図版 13	(上) V 区 5 号住居跡 .....	149
	(下) V 区 2 号土壤遺物出土状況 .....	149
図版 14	(上) V 区 1 号屋外炉とその周辺 .....	150
	(下) V 区 1 号屋外炉 .....	150
図版 15	(上) II 区 2 号土壤そば埋甕 .....	151
	(下) III 区土製品(垂飾)出土状況 .....	151
図版 16	I 区 1 号土壤出土土器 .....	152

図版17	I 区 2 号 I 墓出土土器 .....	153
図版18	(上) I 区 3 号土壤出土土器 .....	154
	(下) I 区 4 号土壤出土土器 .....	154
図版19	(上) I 区 4 号土壤出土土器 .....	155
	(中) I 区 6 号土壤出土土器 .....	155
	(下) I 区 5 号土壤出土土器 .....	155
図版20	I 区 7 号土壤出土土器 .....	156
図版21	(上) I 区 9 号土壤出土土器 .....	157
	(下) I 区 出土遺構不明の土器 .....	157
図版22	(上) I 区 1 号住居跡出土土器 .....	158
	(下) I 区 2 号住居跡出土土器 .....	158
図版23	(上) II 区 2 号土壤出土土器 .....	159
	(下) II 区 3 号土壤出土土器 .....	159
図版24	II 区古墳時代住居跡出土土器 .....	160
図版25	(上) III 区 1 号・2 号・4 号埋甕使用土器 .....	161
	(下) III 区 3 号埋甕使用土器 .....	161
図版26	V 区埋甕使用土器 .....	162
図版27	V 区歴史時代住居跡出土土器(1) .....	163
図版28	同 (2) .....	164
図版29	V 区歴史時代土壤出土土器 .....	165
図版30	V 区遺構に伴わない土器 .....	166
図版31	V 区 1 号住居跡出土土器 .....	167
図版32	V 区 2 号住居跡出土土器(1) .....	168
図版33	(上) V 区 2 号住居跡出土土器(2) .....	169
	(下) V 区 3 号住居跡出土土器(1) .....	169
図版34	V 区 3 号住居跡出土土器(2) .....	170
図版35	V 区 3 号住居跡出土土器(3) .....	171
図版36	(上) V 区 4 号住居跡出土土器 .....	172
	(下) V 区 5 号住居跡出土土器 .....	172
図版37	(上) V 区 1 号屋外炉使用土器, 岬辺出土土器 .....	173
	(中) V 区 2 号屋外炉使用土器 .....	173
	(下) V 区 1 号土壤出土土器 .....	173
図版38	V 区 2 号土壤出土土器 .....	174
図版39	(上) V 区 3 号土壤出土土器 .....	175

(下) V区遺構に伴わない土器	175
図版40 北の内遺跡出土石器(1)	176
図版41 同 (2)	177
図版42 同 (3)	178
図版43 同 (4)	179
図版44 北の内遺跡出土土製品	180



図-2 北の内道路圖切図

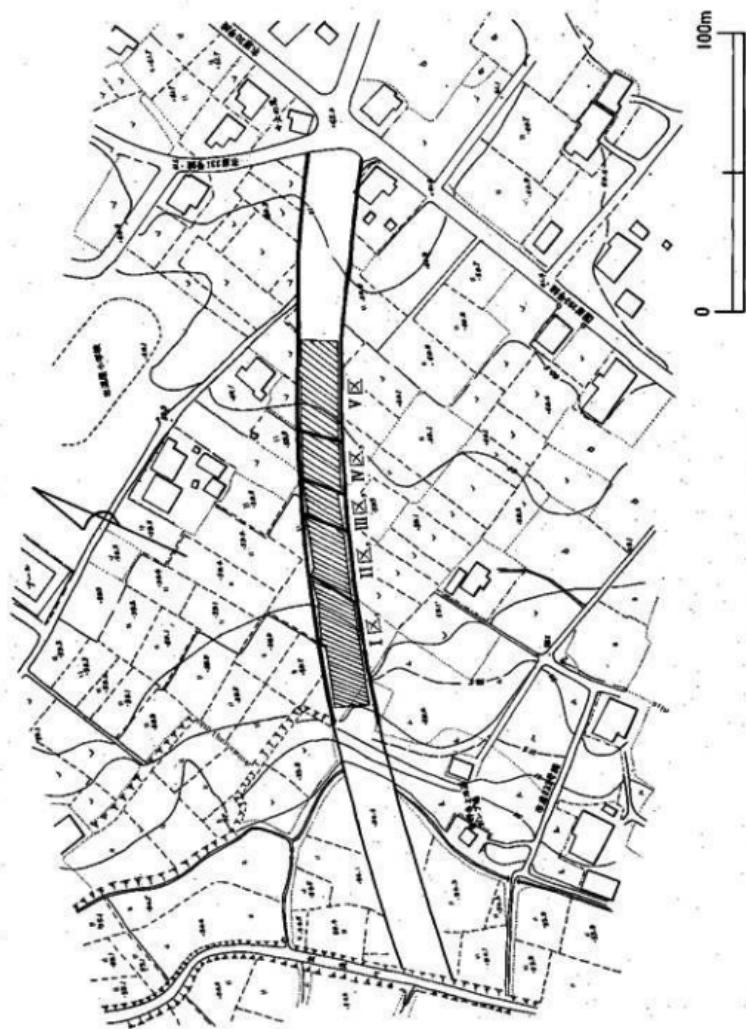
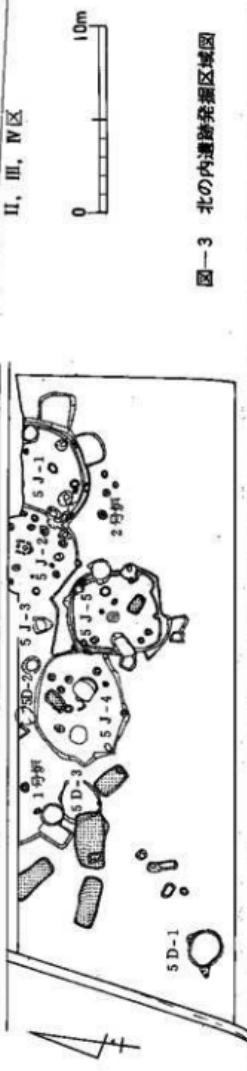
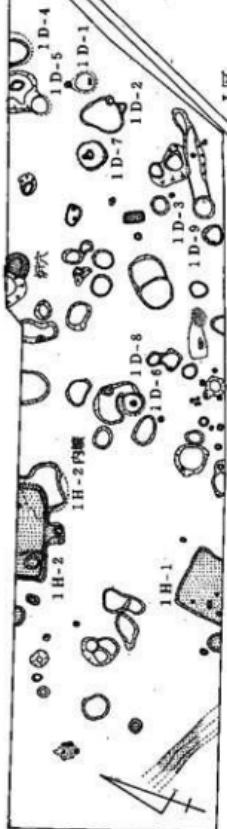


図-3 北の内遺跡発掘区域図



※各遺構番号の数字は区、最後の数字は遺構番号  
○は古墳時代以降の遺構

IV区



-80-

# 遺構実測図

各実測図の縮尺は次の通り

住居跡 60分の1

土 壤 40分の1

埋 魏 20分の1

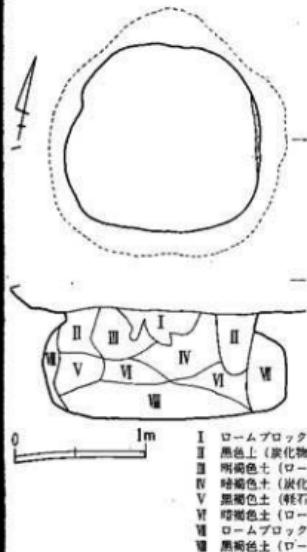


図-4 I区1号土壤

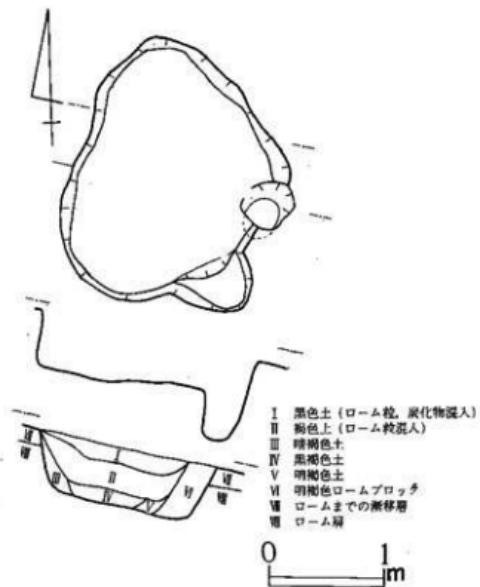


図-5 I区2号土壤

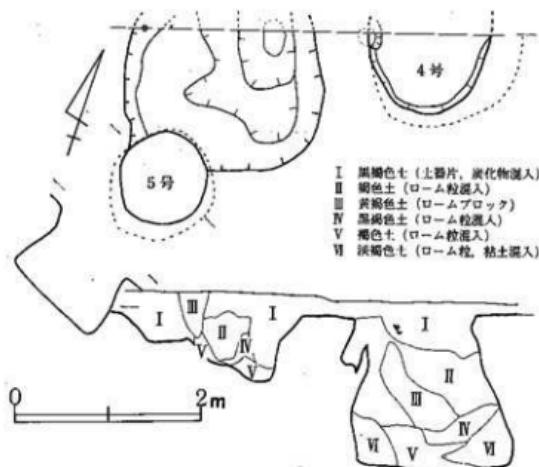


図-6 I区4号、5号土壤

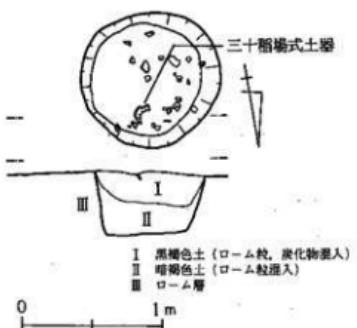


図-7 I区3号土壤

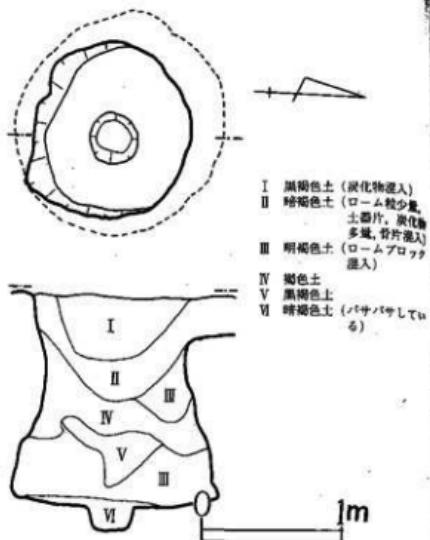


図-8 I区6号土壤

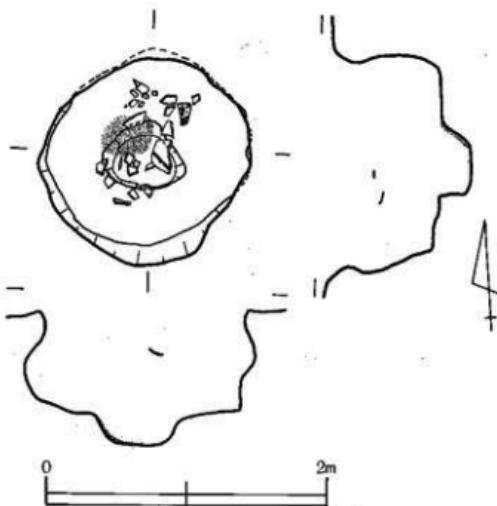


図-9 I区7号土壤

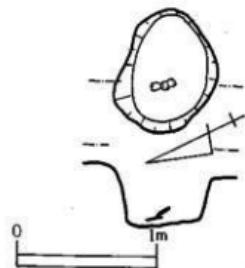


図-10 I区8号土壤

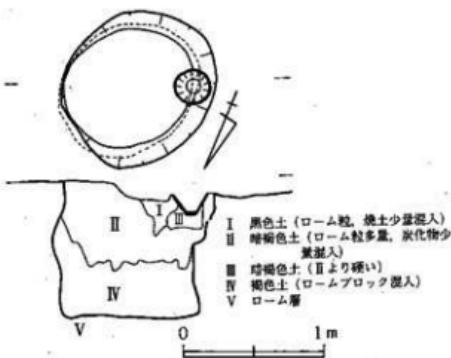


図-11 I区9号土壤

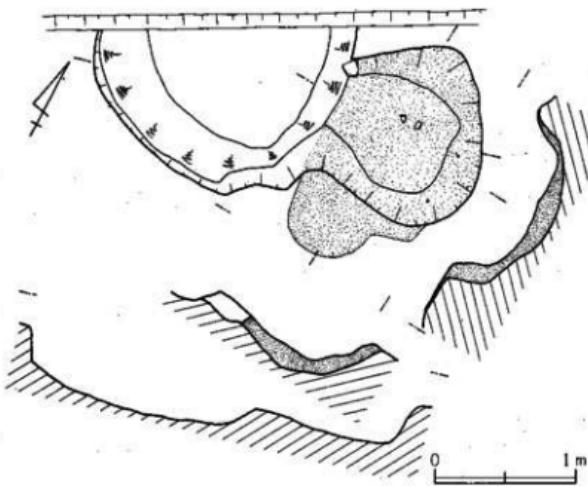


図-12 I区炉穴

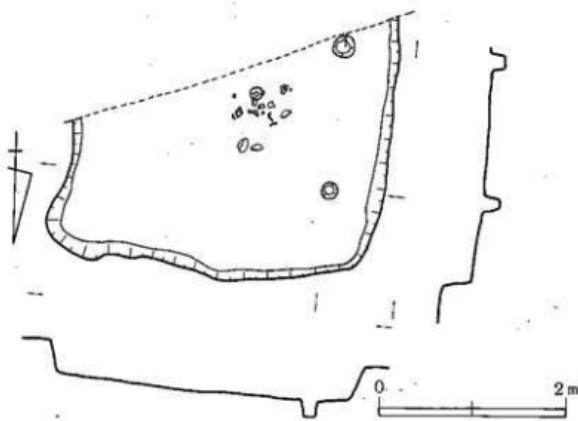


図-13 I区1号住居跡

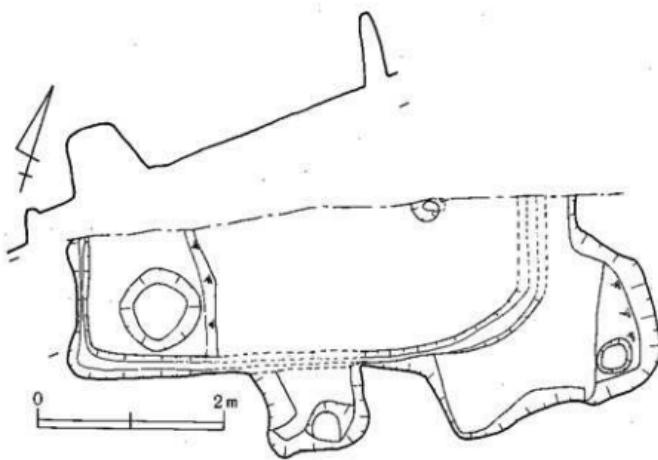


図-14 I区2号住居跡

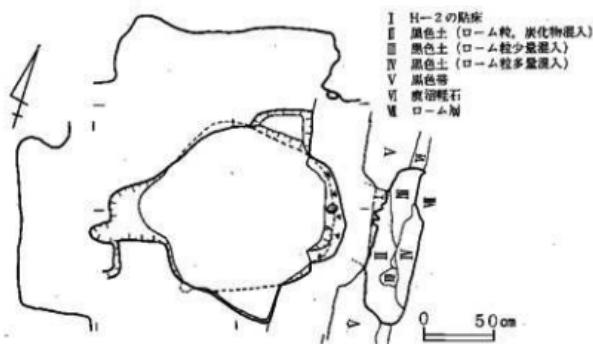


図-15 I区2号住居跡内土壤

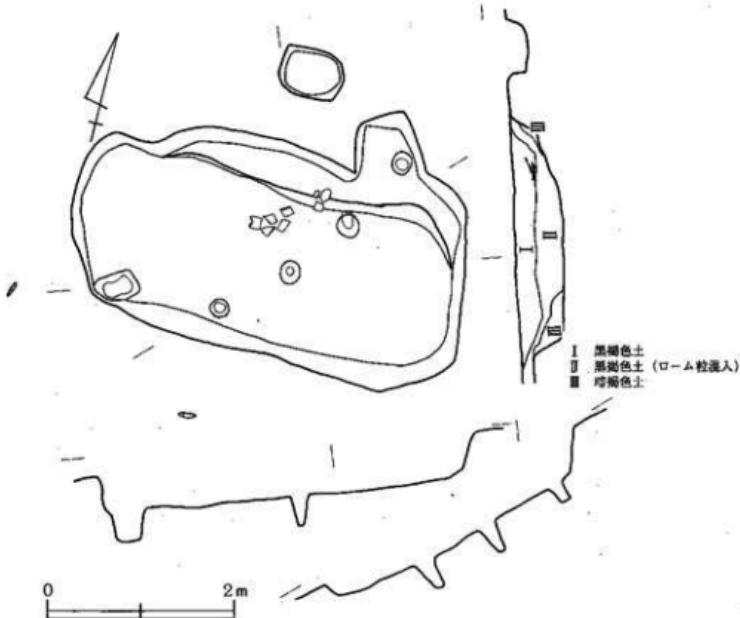


図-16 II区1号土壤

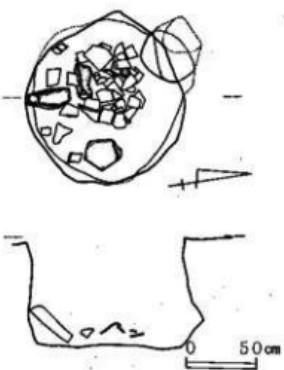


図-17 II区2号土壤

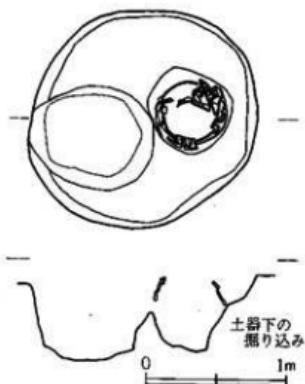


図-18 II区3号土壤

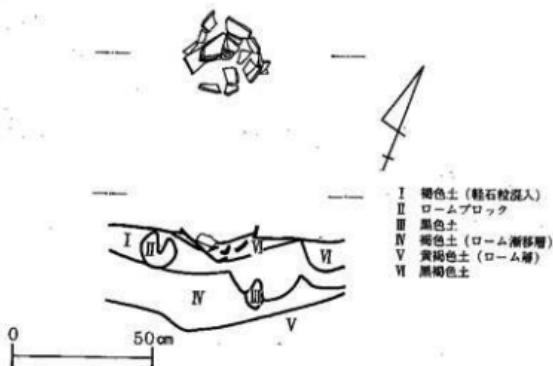


図-19 II区2号土壤そば埋蔵

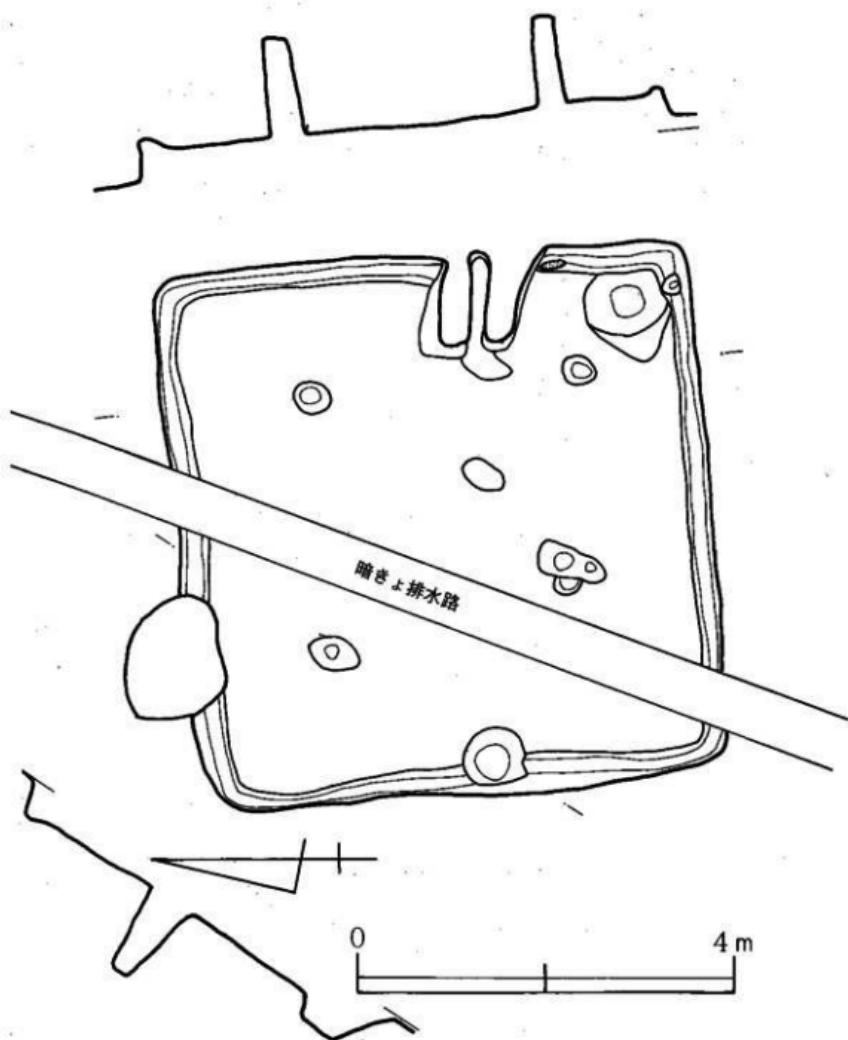


図-20 II区古墳時代住居跡

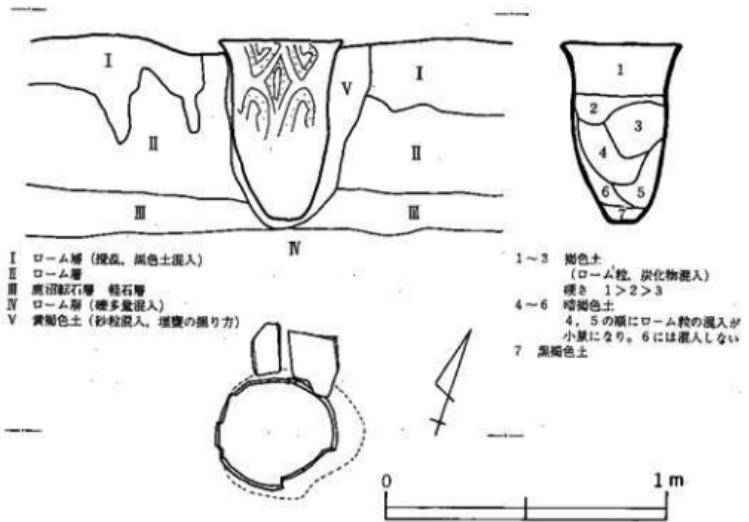


図-21 III区Ⅰ号埋窓

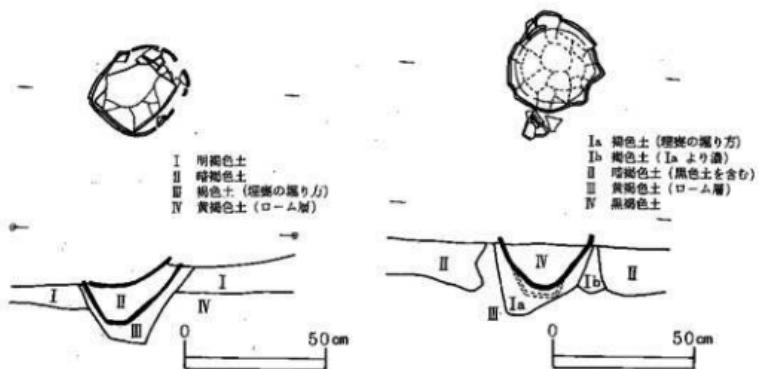


図-23 IV区Ⅳ号埋窓

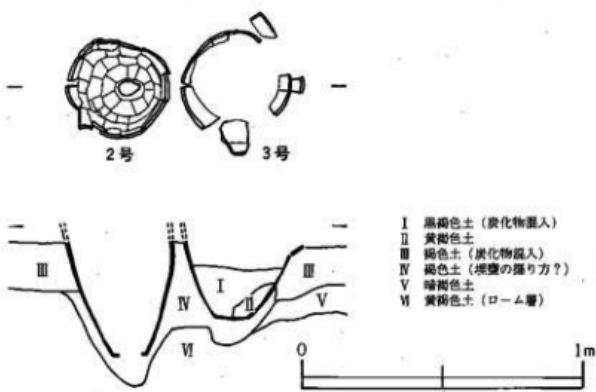


図-24 IV区2号, 3号埋甃



図-26 IV区6号埋甃

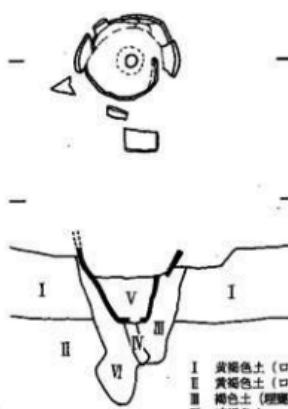


図-25 IV区5号埋甃

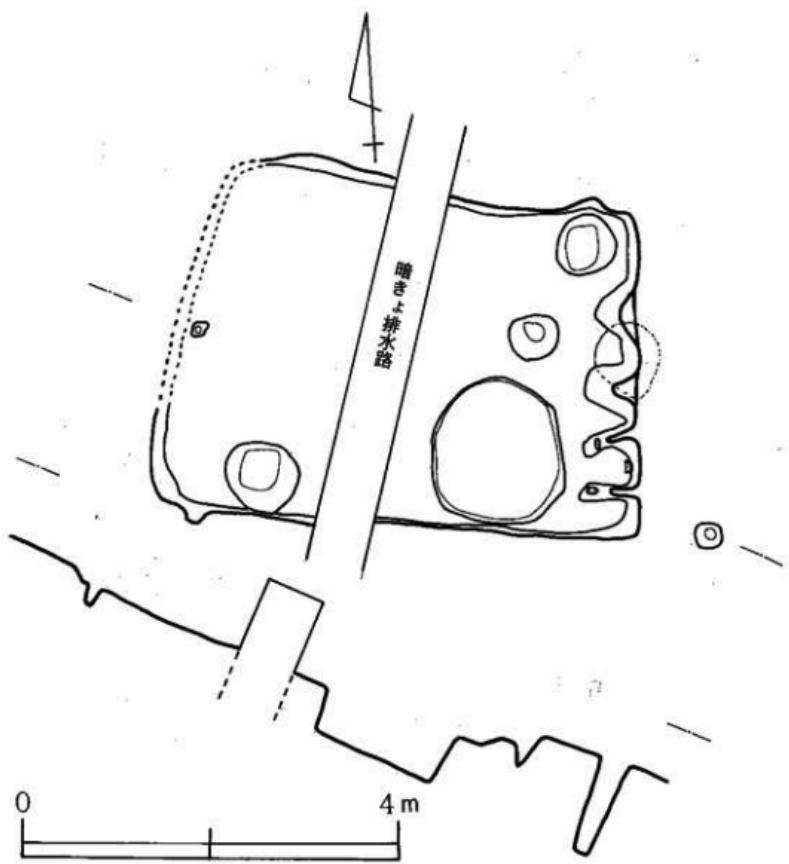
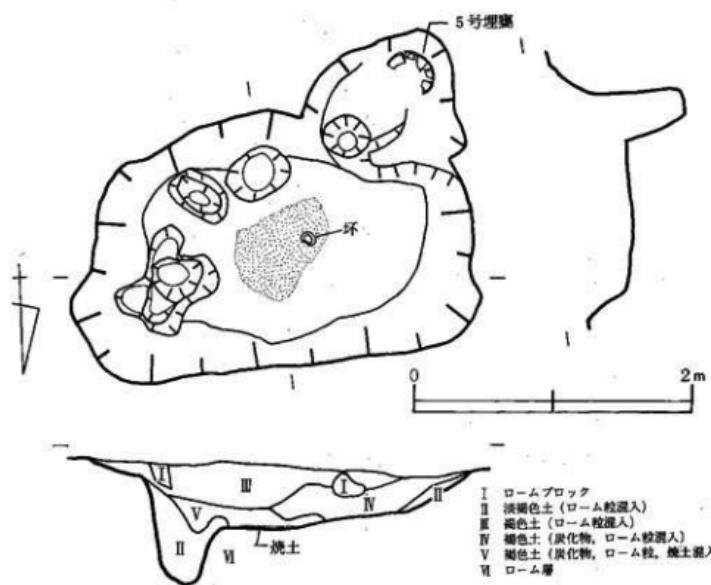
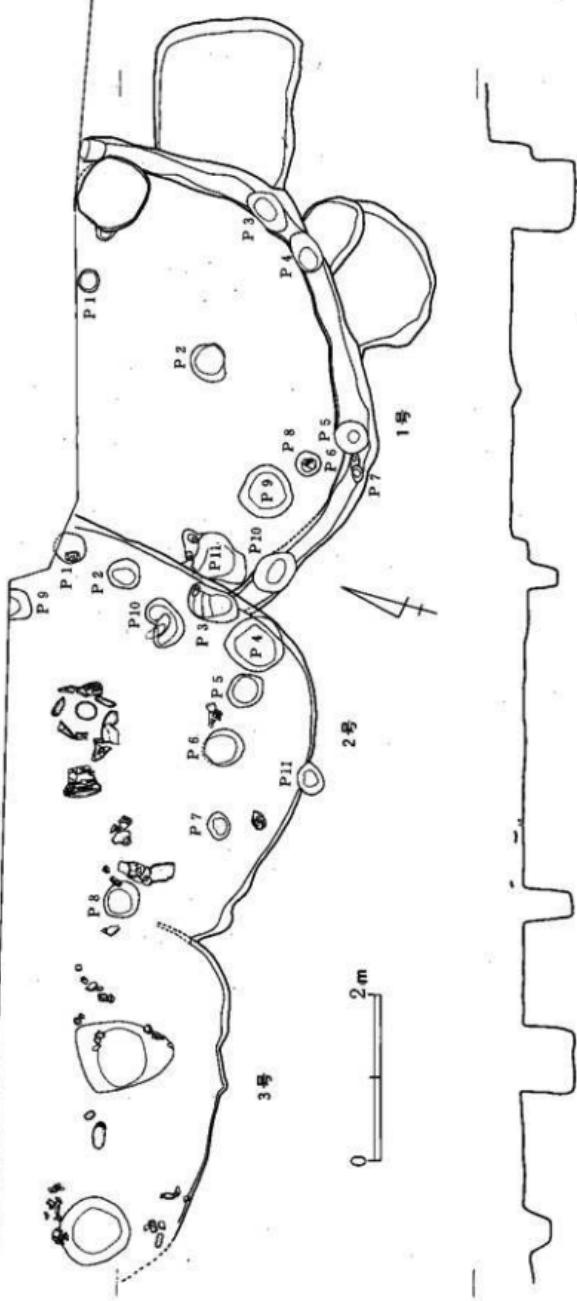


図-27 IV区歴史時代住居跡



図一28 IV区歴史時代土壤、5号埋甕

图-29 V区1号、2号、3号生唇脉



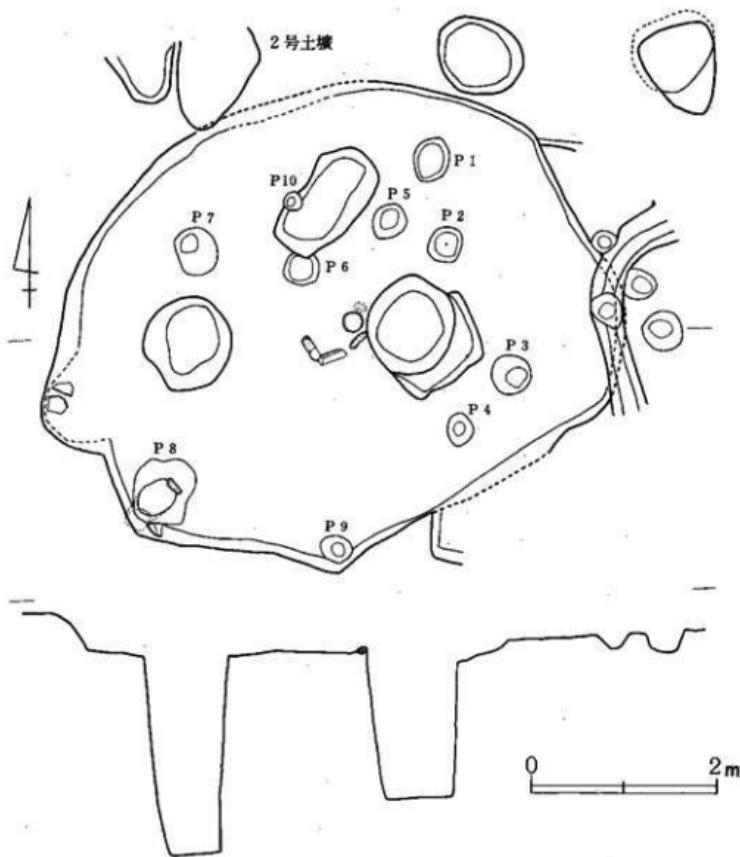


図-30 V区4号住居跡

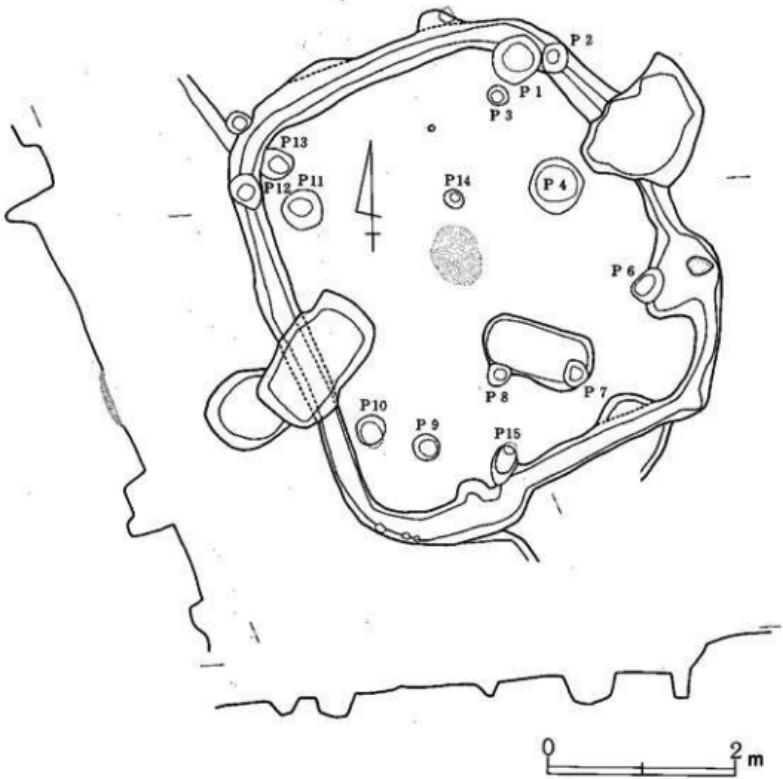
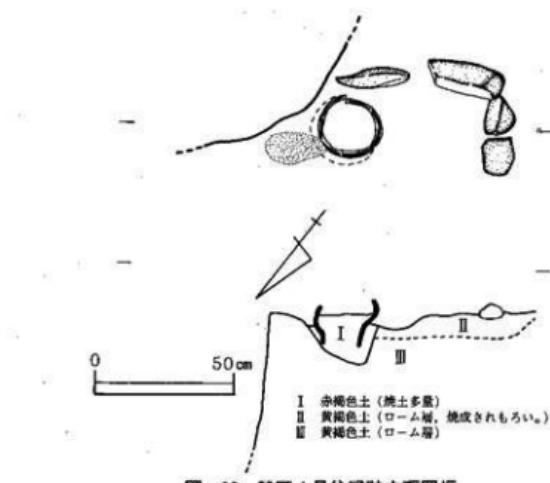
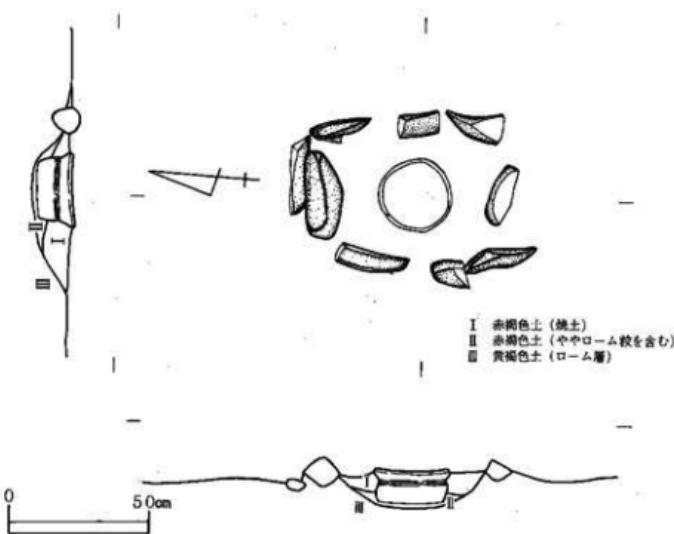


図-31 V区5号住居跡



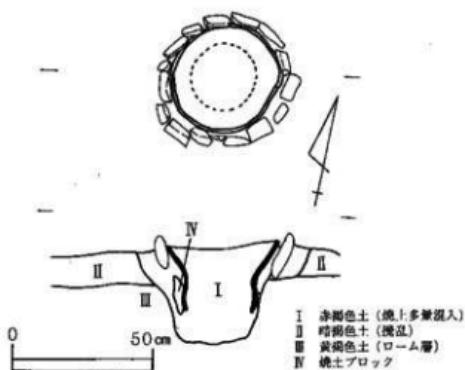


図-34 V区Ⅰ号窯外炉

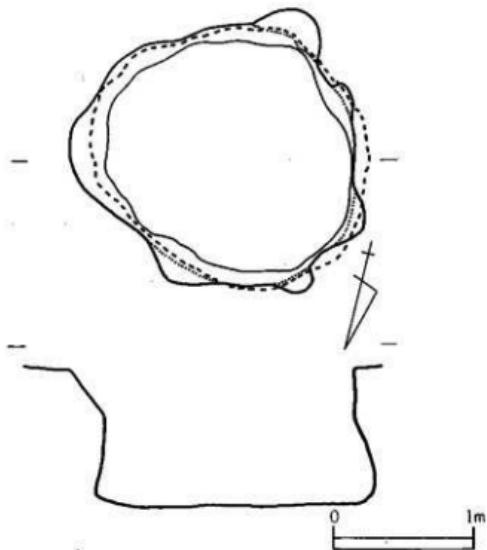


図-35 V区Ⅰ号土壤

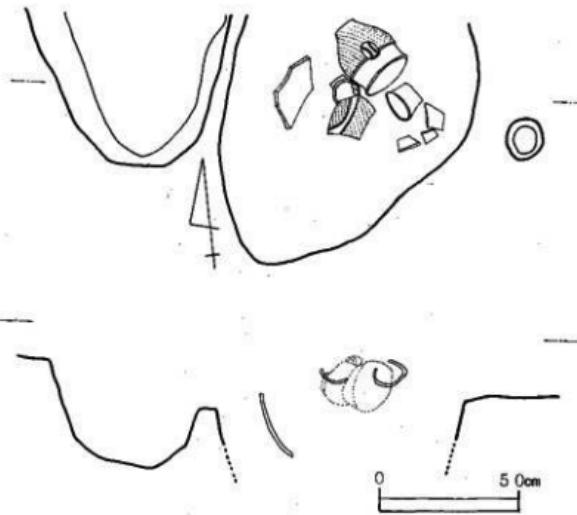


図-36 V区2号土壤

## 遺物実測図・拓影

各図の縮尺は次の通り

実測図	縄文	5分の1
	土師	4分の1
	石器	4分の1
拓影	縄文	4分の1

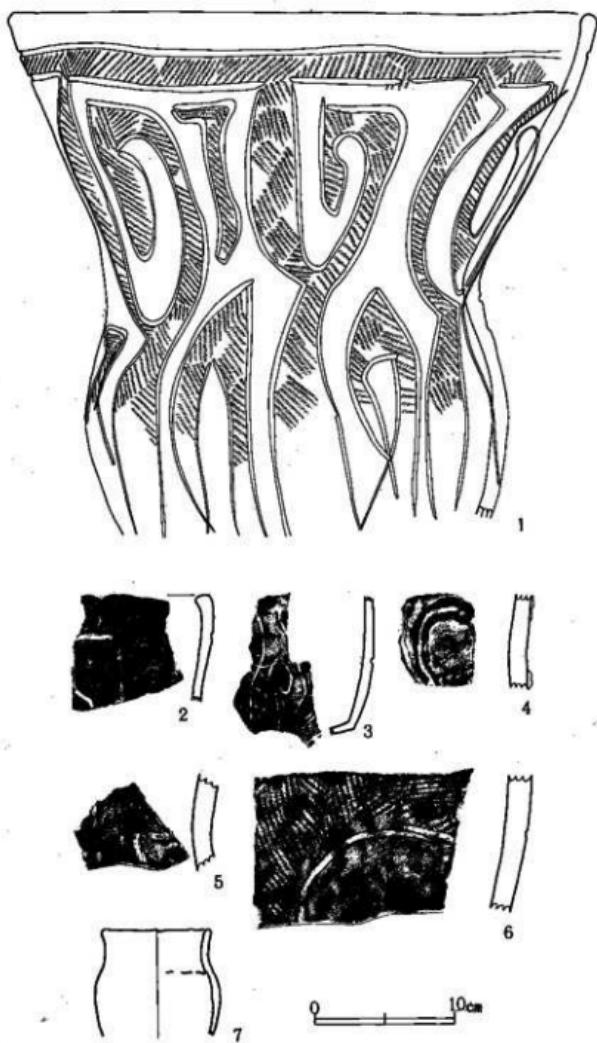
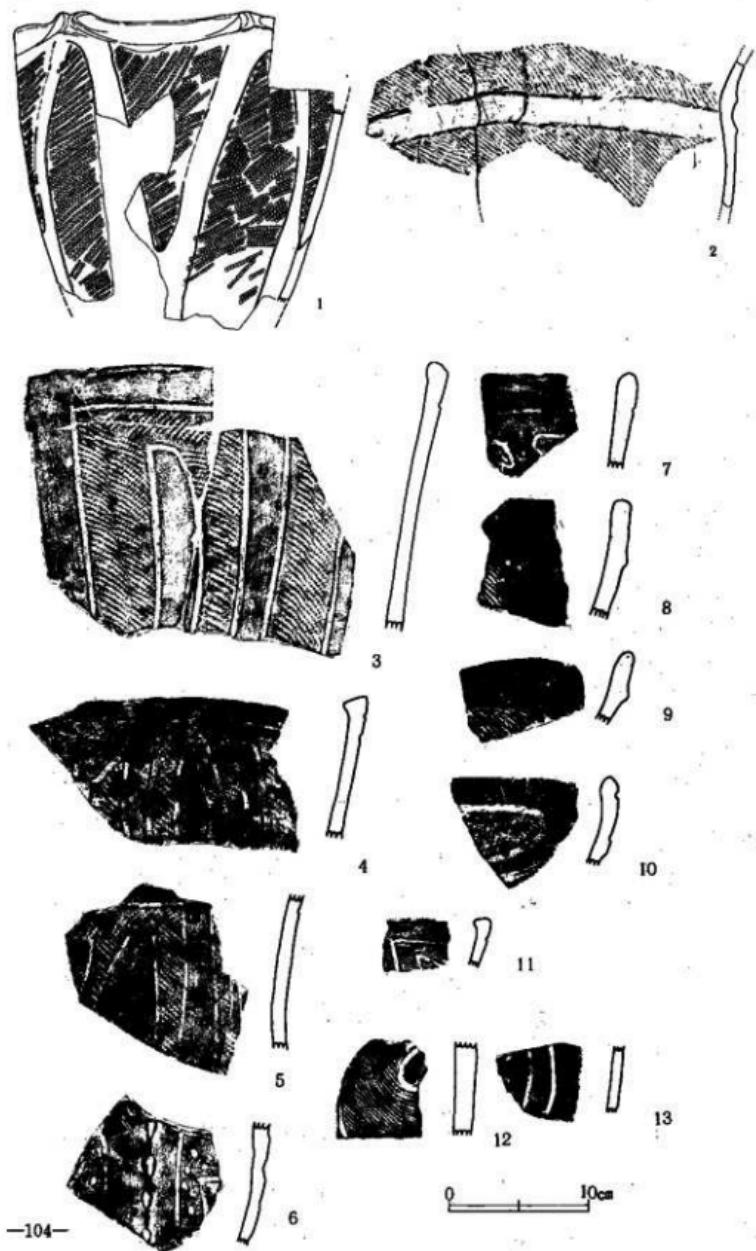


图-37 I区1号土壤出土土器



图—38 I区2号土壤出土土器

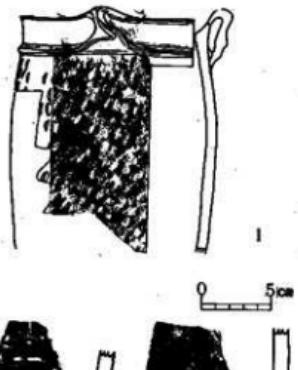


図-39 I区3号土壤出土土器

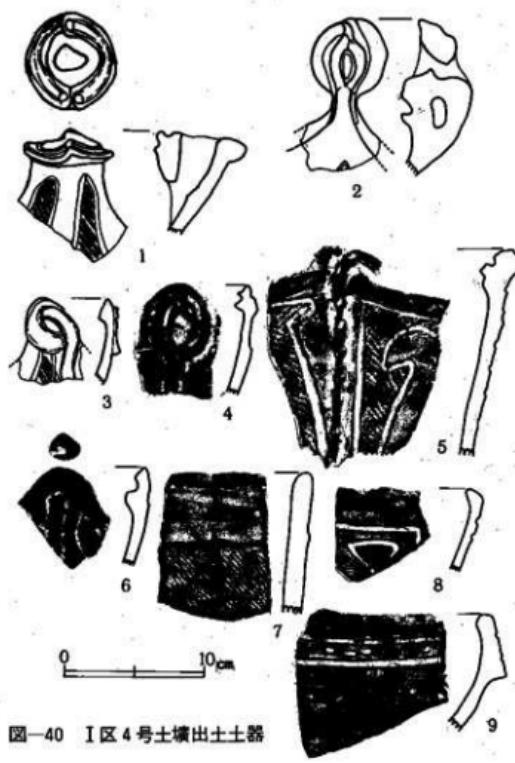
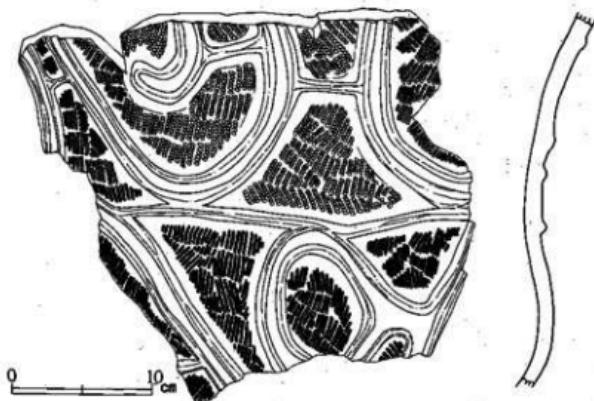
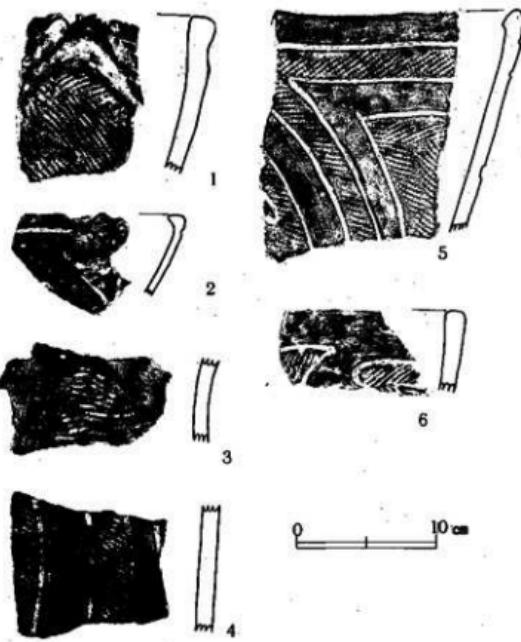


図-40 I区4号土壤出土土器



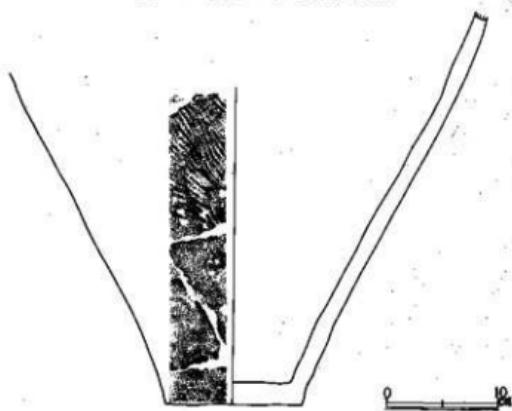
图—41 I区6号土壤出土土器



图—42 I区6号, 5号土壤出土土器



图—43 I区7号土壤出土土器



图—44 I区9号土壤内埋藏使用土器

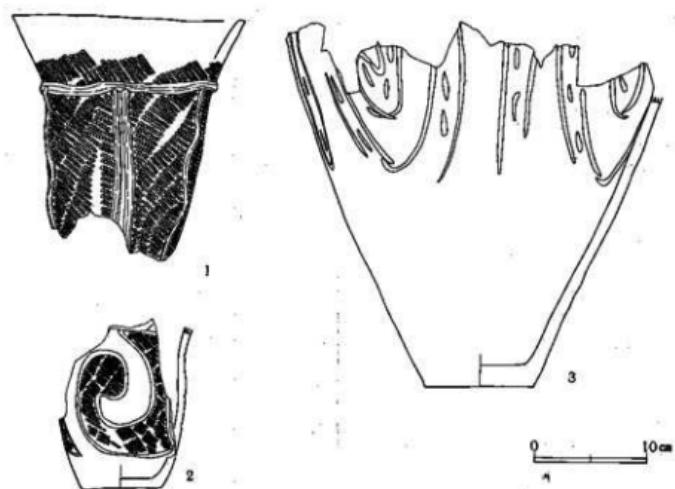


図-45 I 区出土造構不明の土器

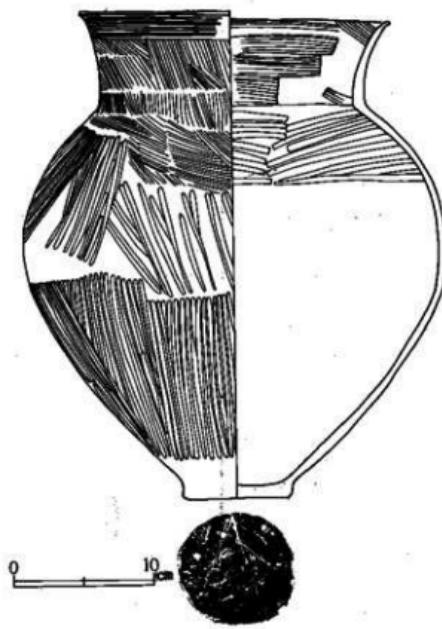
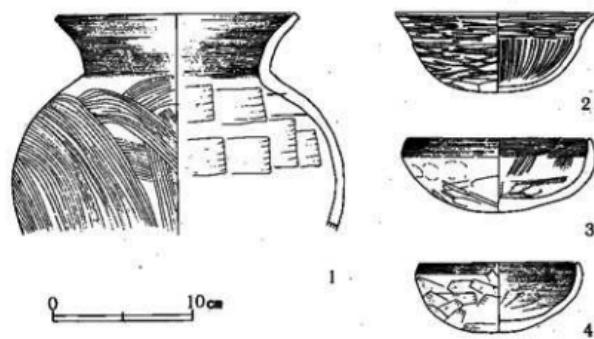
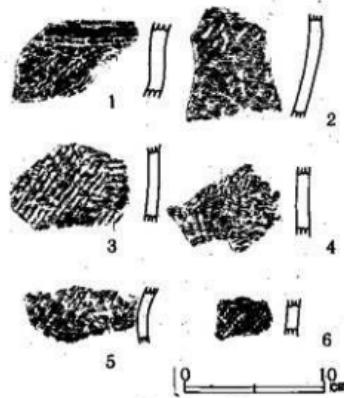


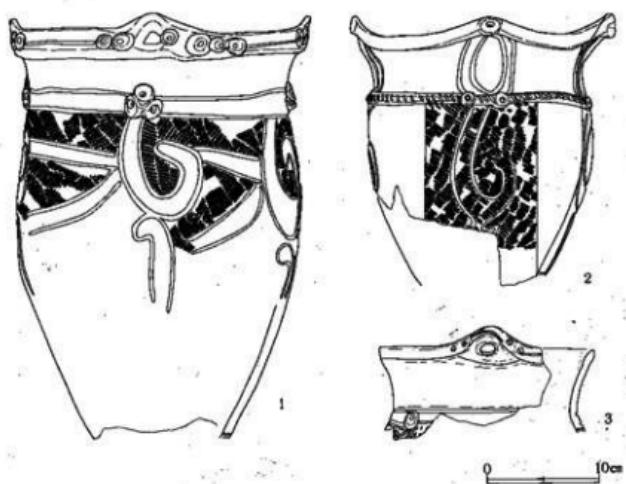
図-46 I 区 I 号住居跡出土土器



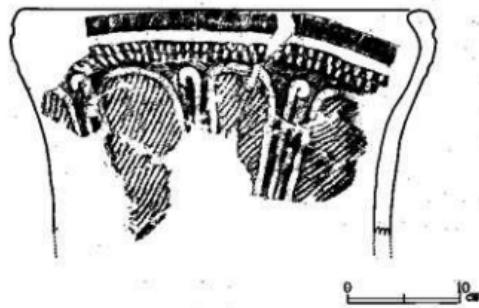
图—47 I区 2号居址出土土器



图—48 II区 1号土壤出土土器



图一49 II区2号土壤出土土器



图一50 II区3号土壤出土土器

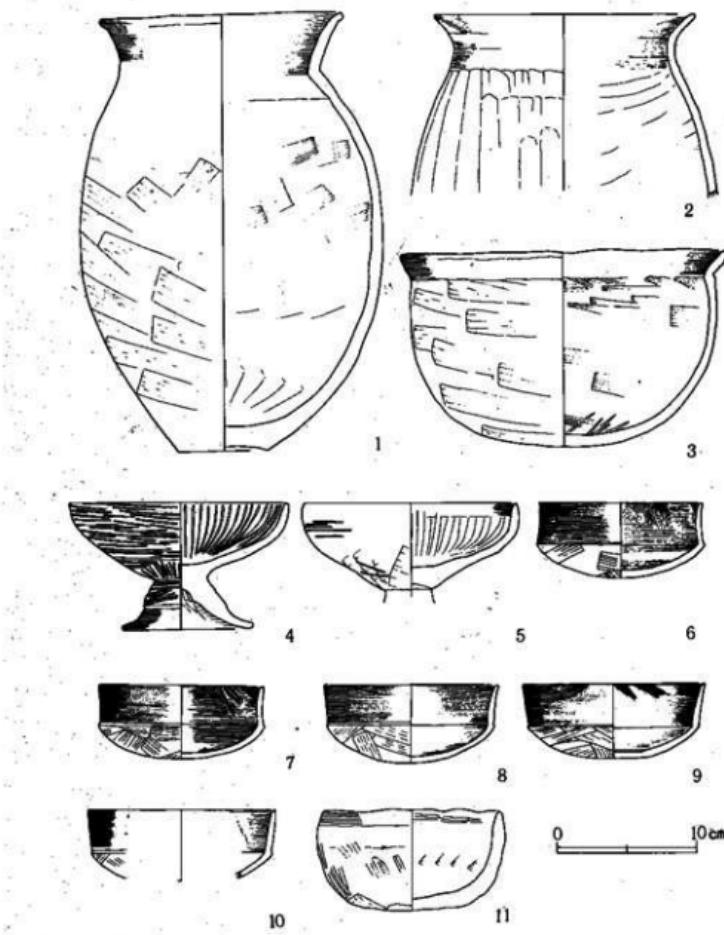
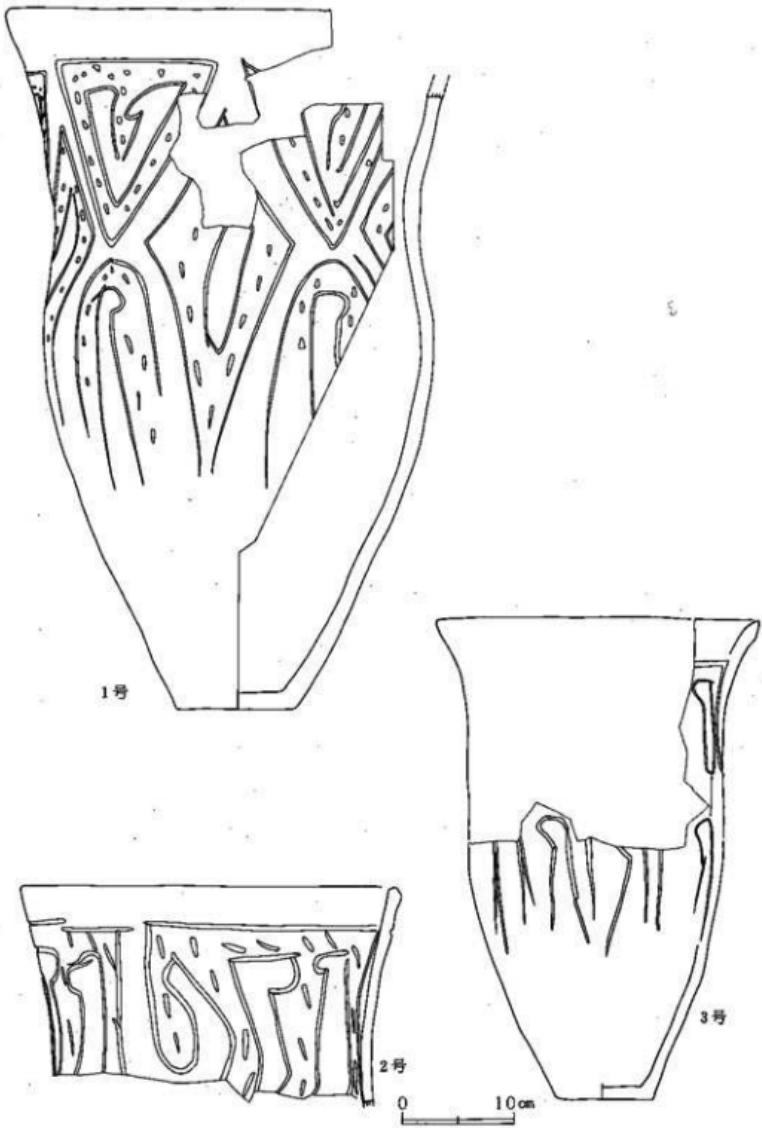
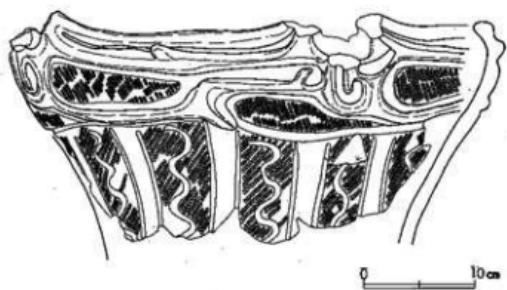


図-51 II区古墳時代住居跡出土土器

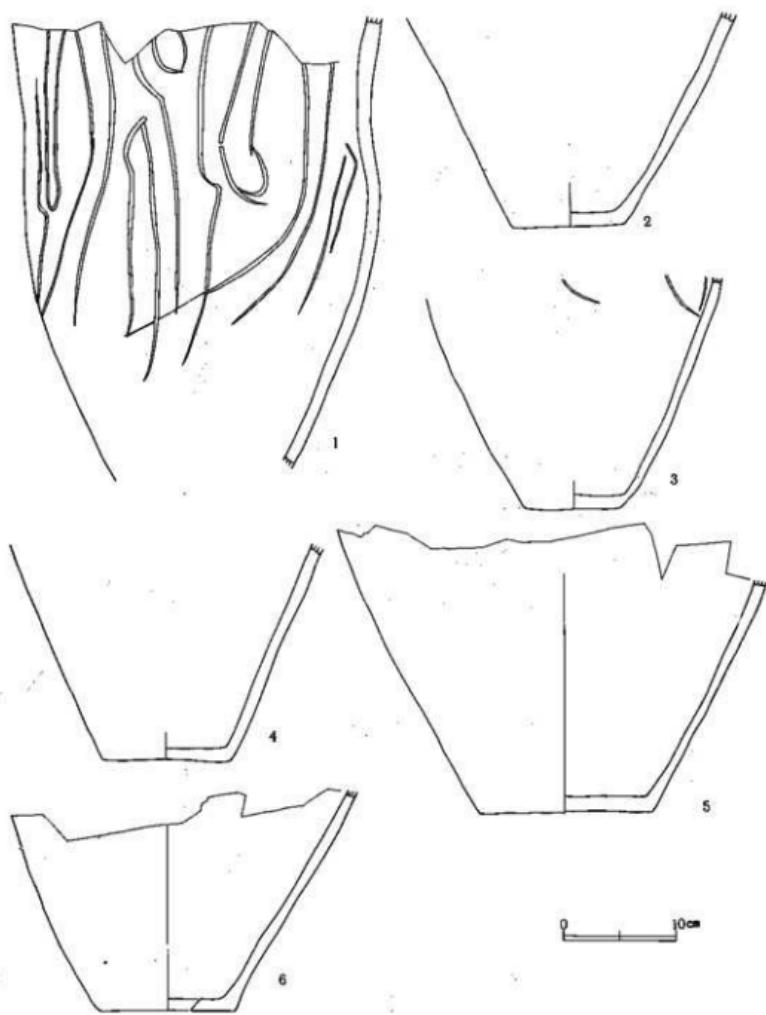


图—52 III区埋藏使用土器

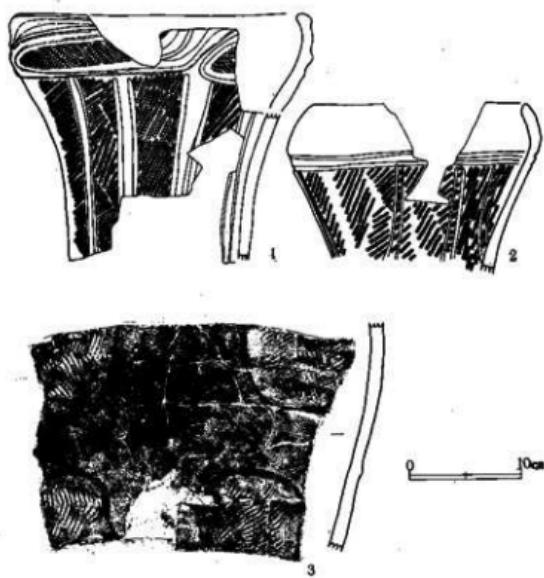


0 10 cm

図—53 III区4号甕使用土器



图—54 IV区埋藏使用土器



図一55 IV区遺構に伴わない土器

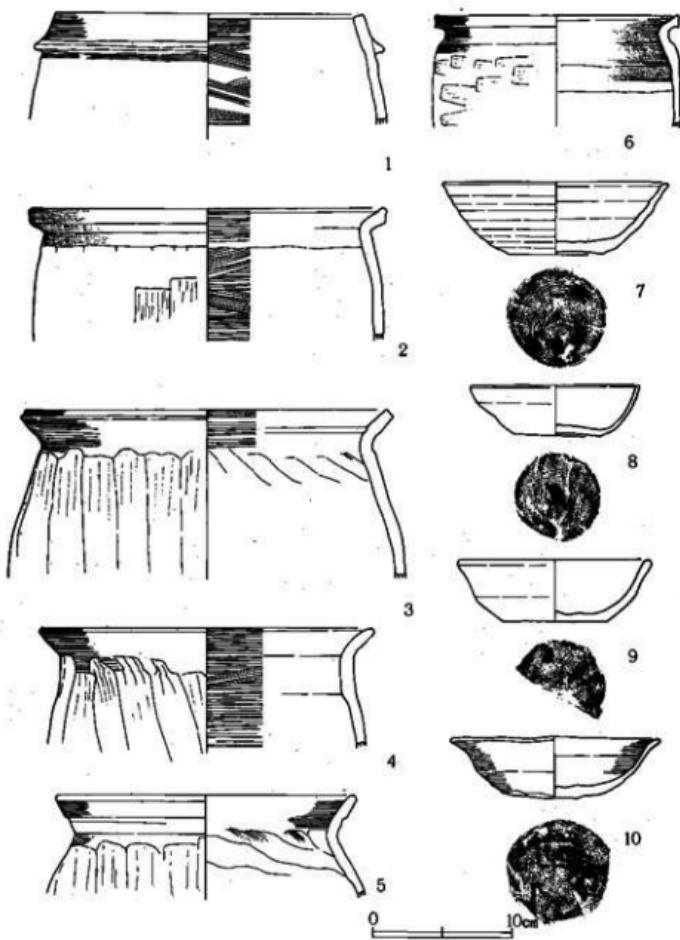


図-56 IV区歴史時代住居跡出土土器 (1)

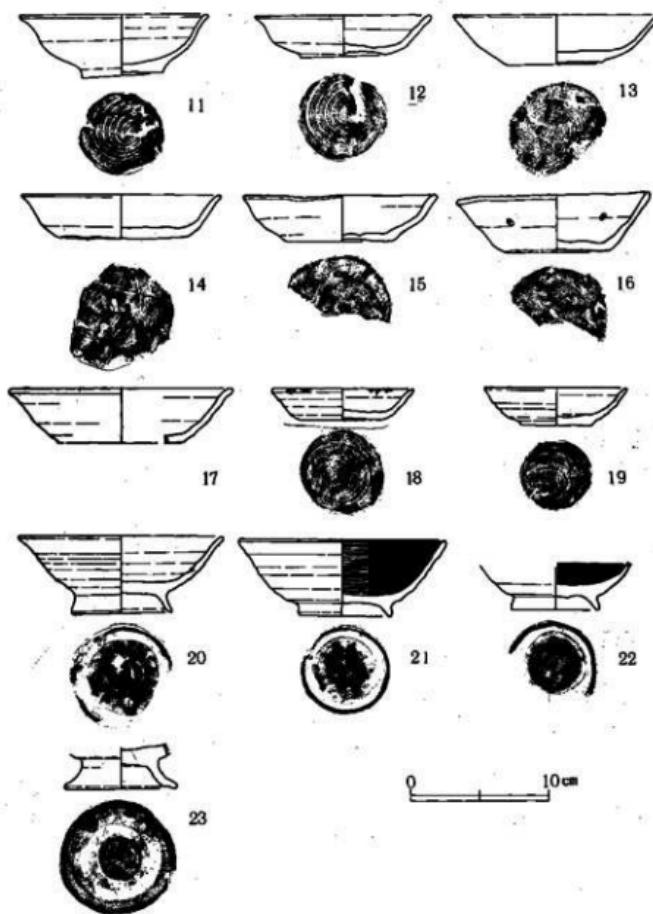


図-57 IV区歴史時代住居跡出土土器（2）

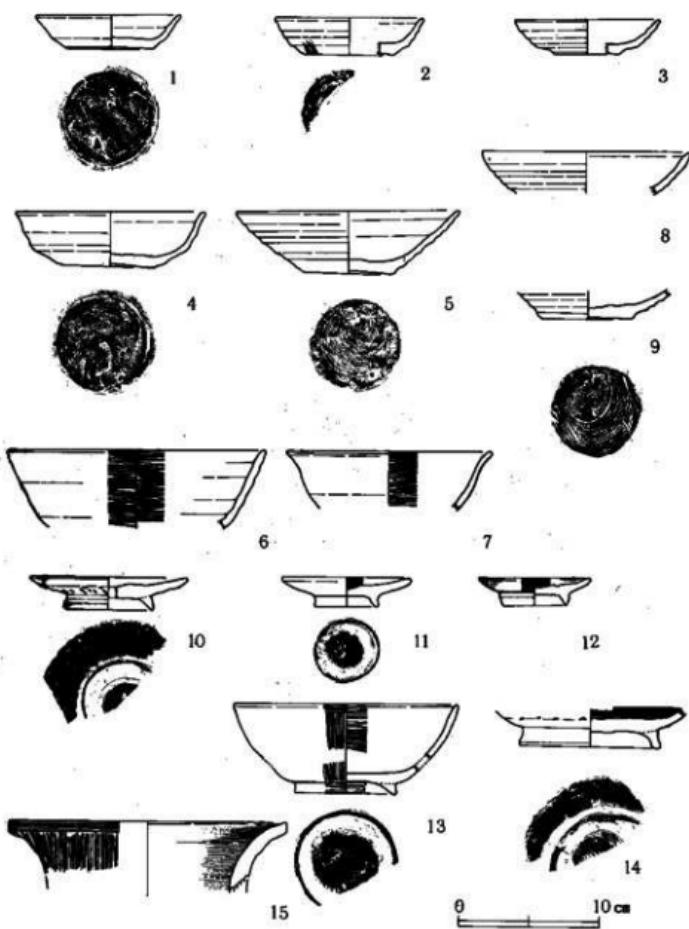


図-58 IV区歴史時代土壤出土土器



图—59 V区1号住居跡出土土器

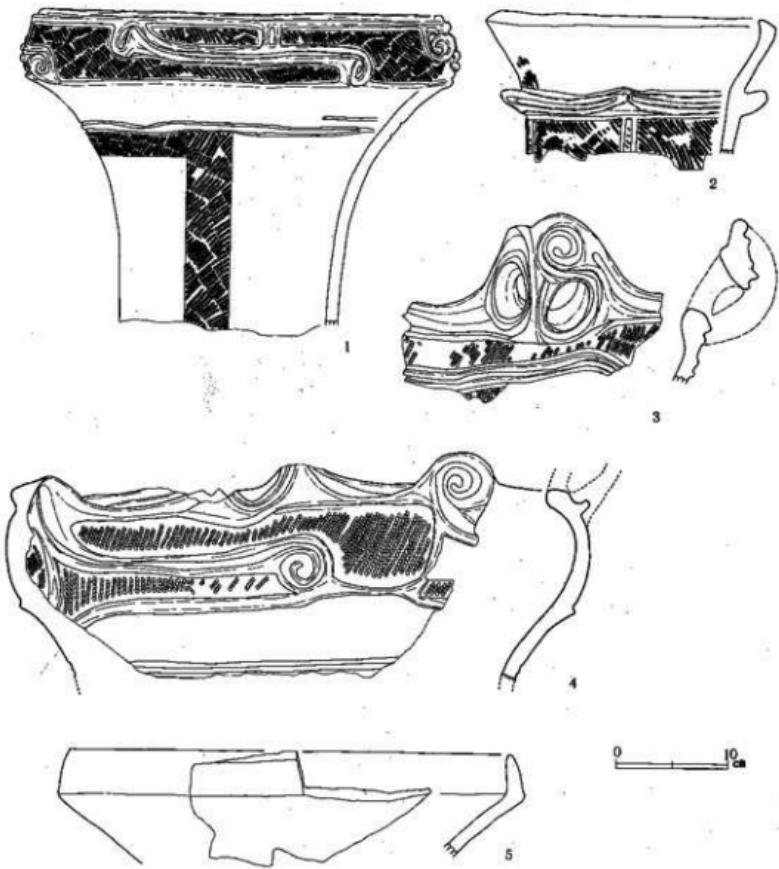
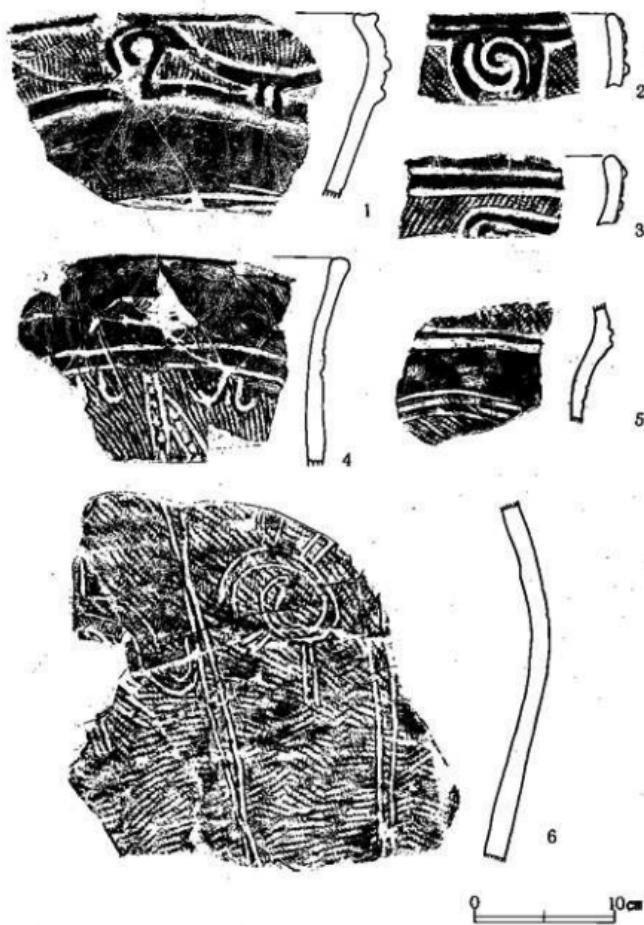
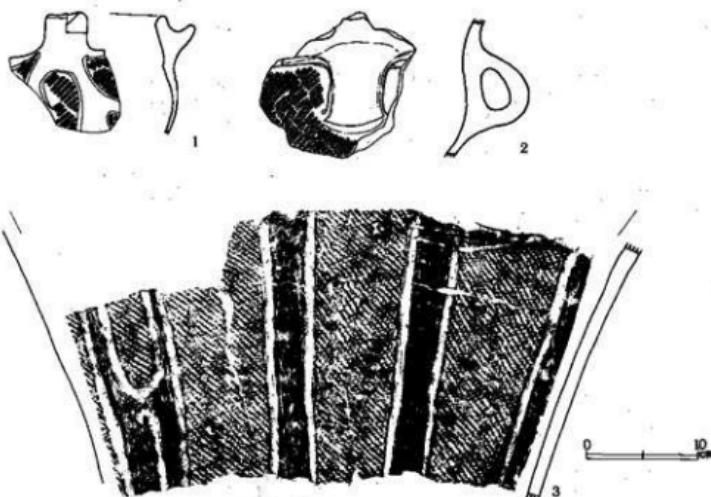


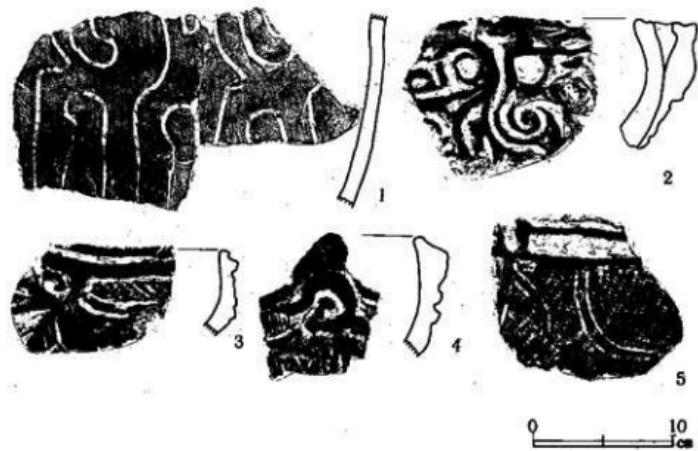
図-60 V区2号住居跡出土土器(1)



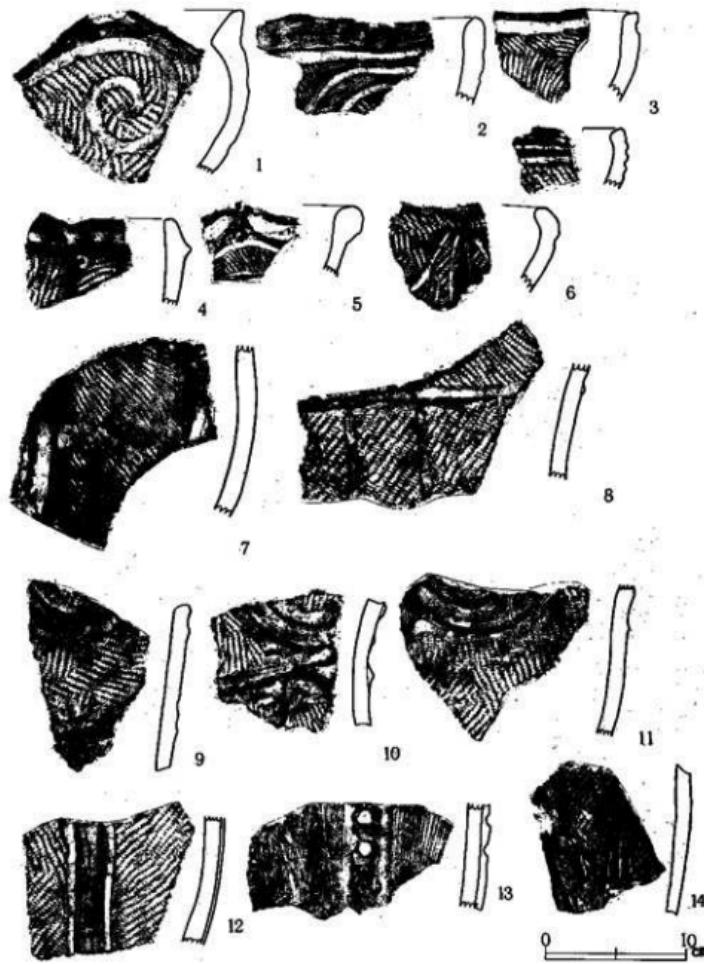
图—61 V区2号住居跡出土土器(2)



图—62 V区3号住居跡出土土器（1）



图—63 V区3号住居跡出土土器（2）



图—64 V区3号住居跡出土土器 (3)

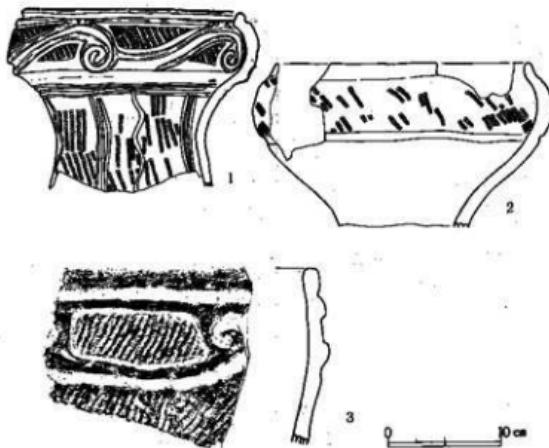


図-65 V区4号住居跡出土土器

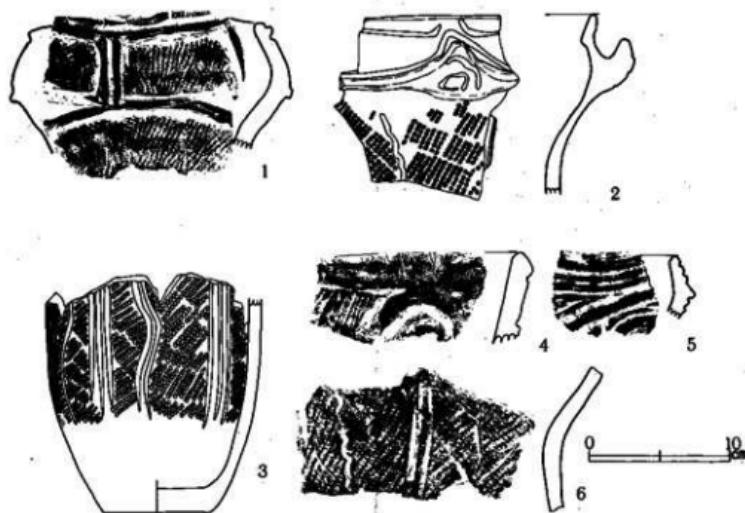


図-66 V区5号住居跡出土土器



図-67 V区1号屋外炉使用土器、周辺出土土器

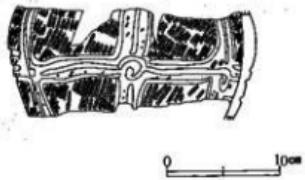
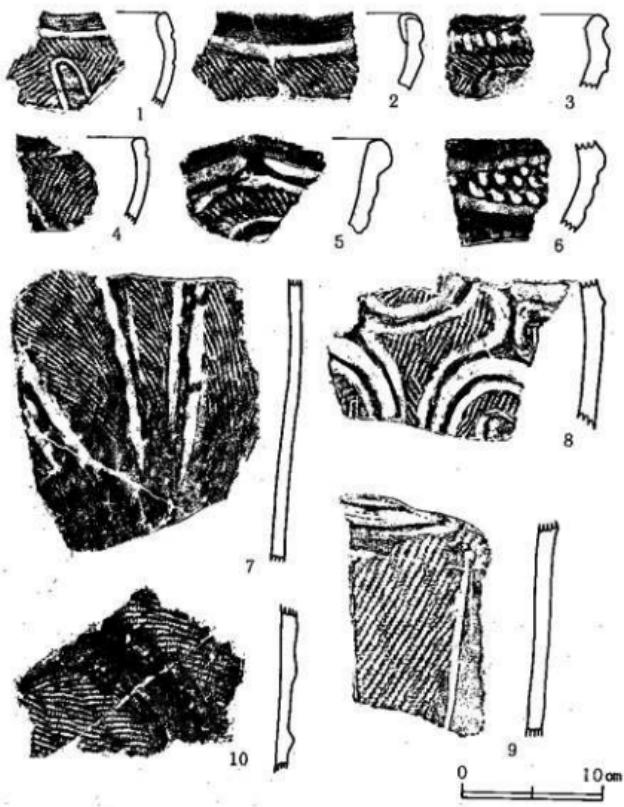


図-68 V区2号屋外炉使用土器



图—69 V区1号屋外炉周辺出土土器(2)

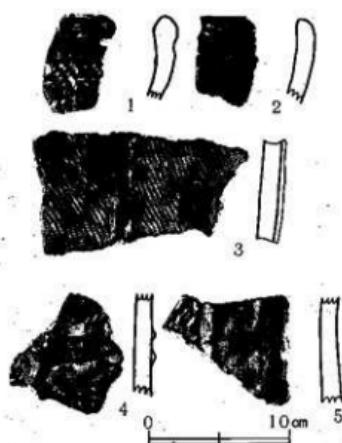


図-70 V区1号土壤出土土器

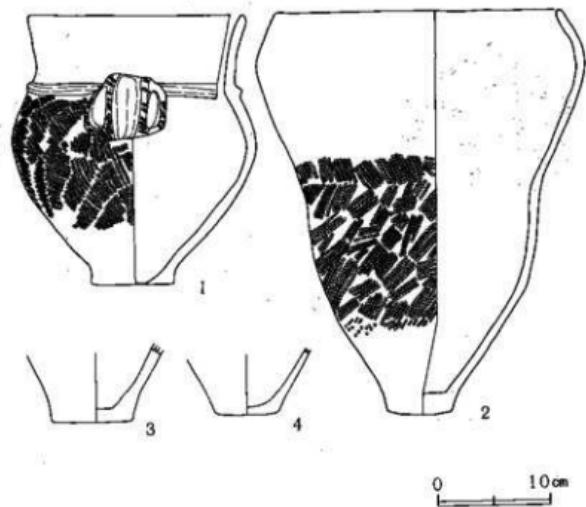


図-71 V区2号土壤出土土器(1)

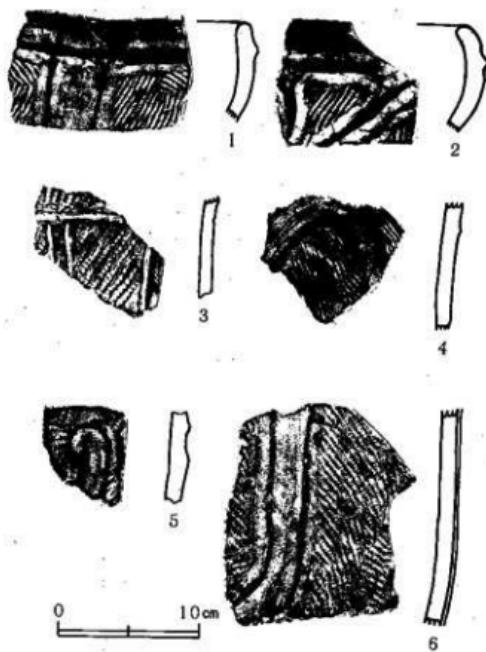


図-72 V区 2号土壤出土土器(2)

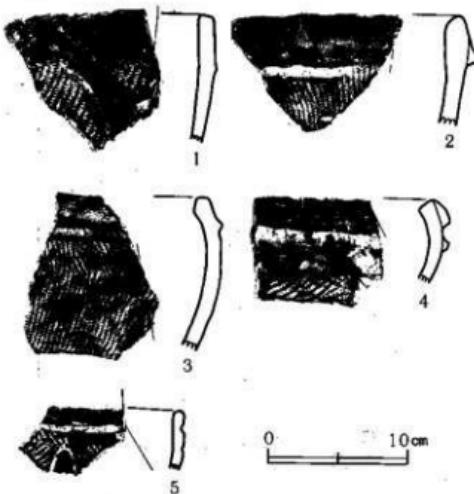


図-73 V区 3号土壤出土土器



図-74 V区遺構に伴わない土器

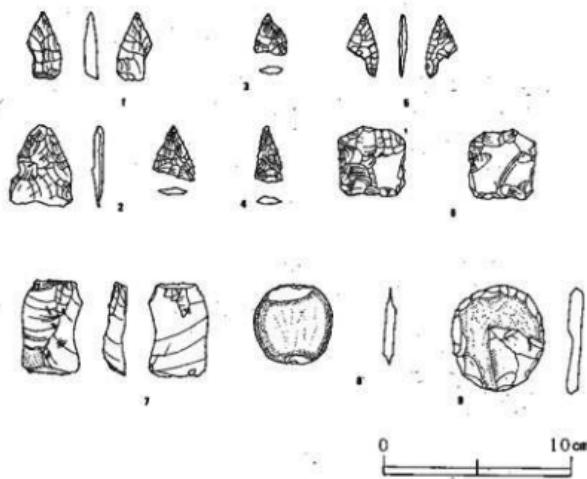


図-75 北の内遺跡出土石器（1）

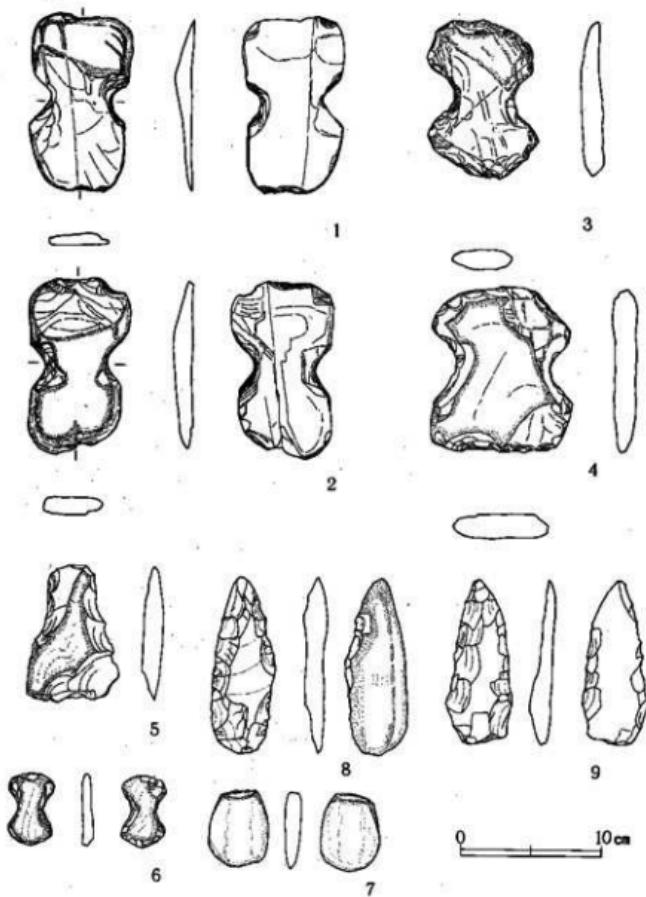


図-76 北の内遺跡出土石器 (2)

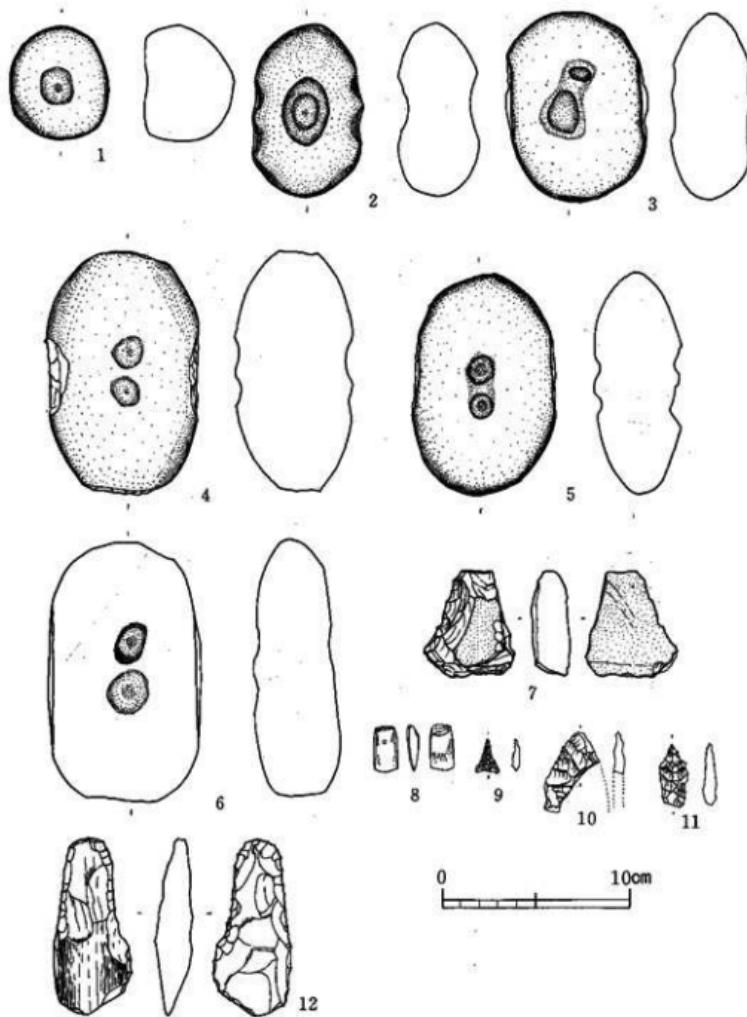


図-77 北の内遺跡出土石器 (3)

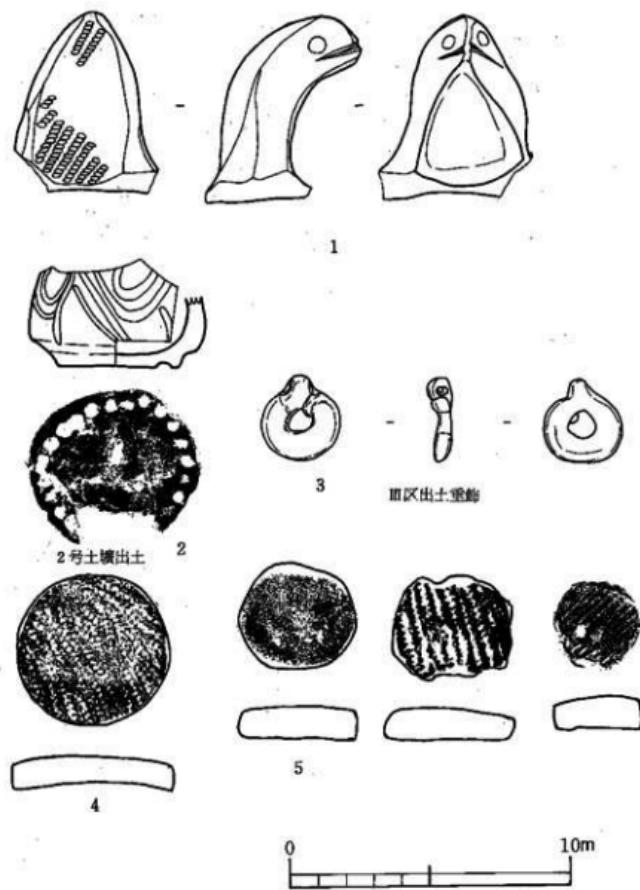
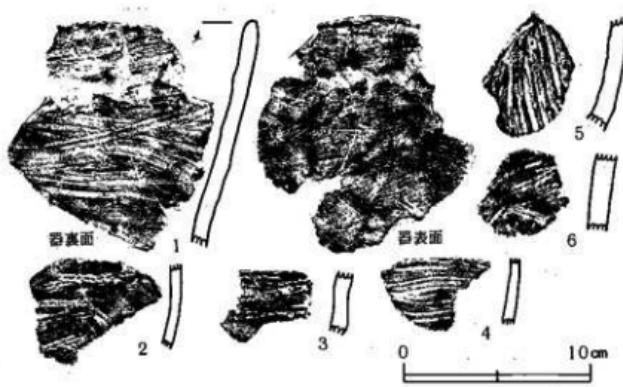


図-78 北の内遺跡出土土製品



图—79 I区炉穴（1～4），2号住居跡内土壤（5～6）出土器

## 写 真 図 版

\* 遺物写真各々の下につけられた番号は、遺物実測図・拓影各  
各の番号に符合する。照合する際不都合なものと考えられる遺  
物写真の下には図番号を付した。

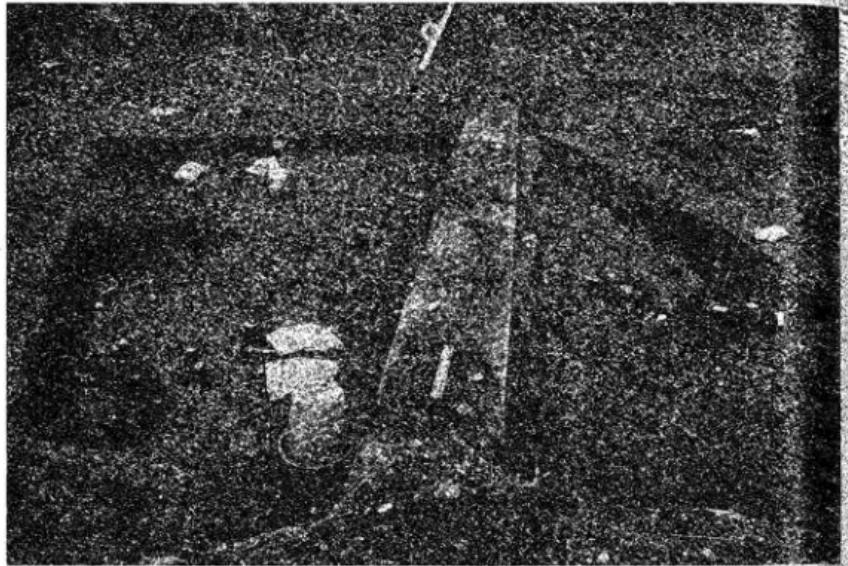
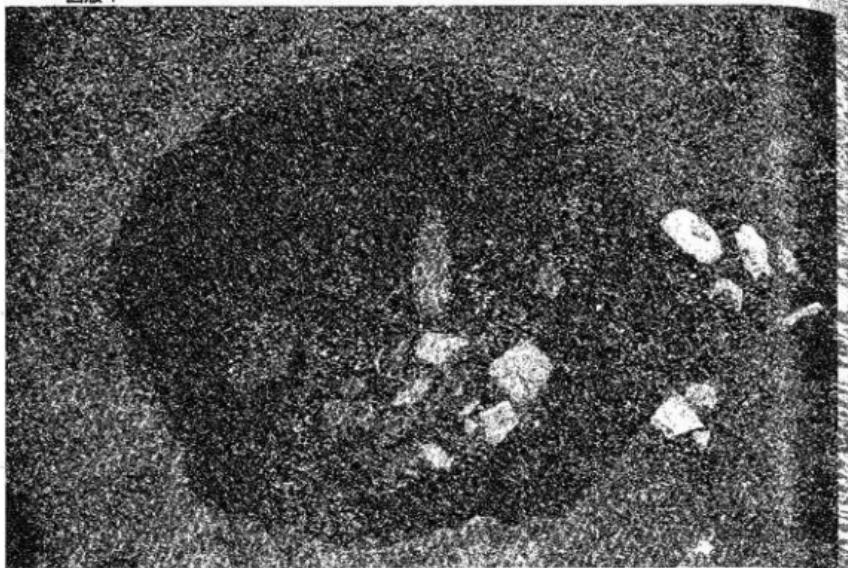


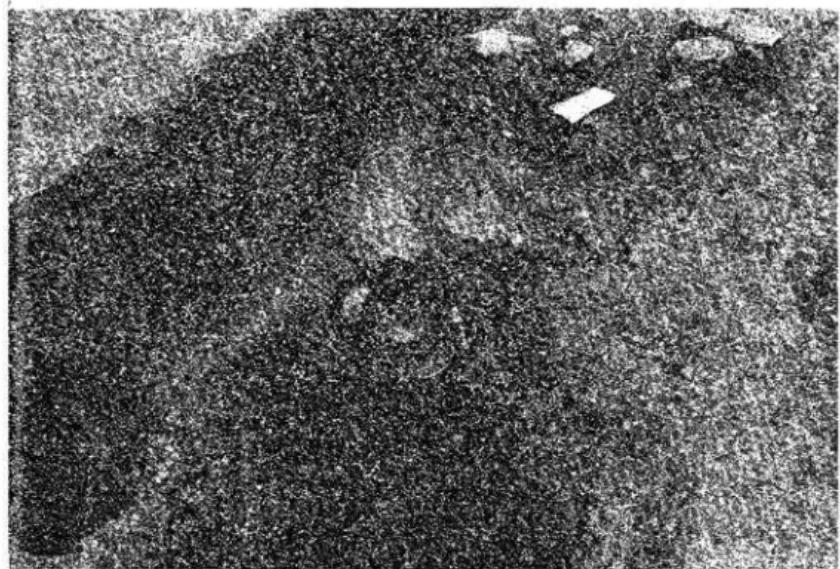
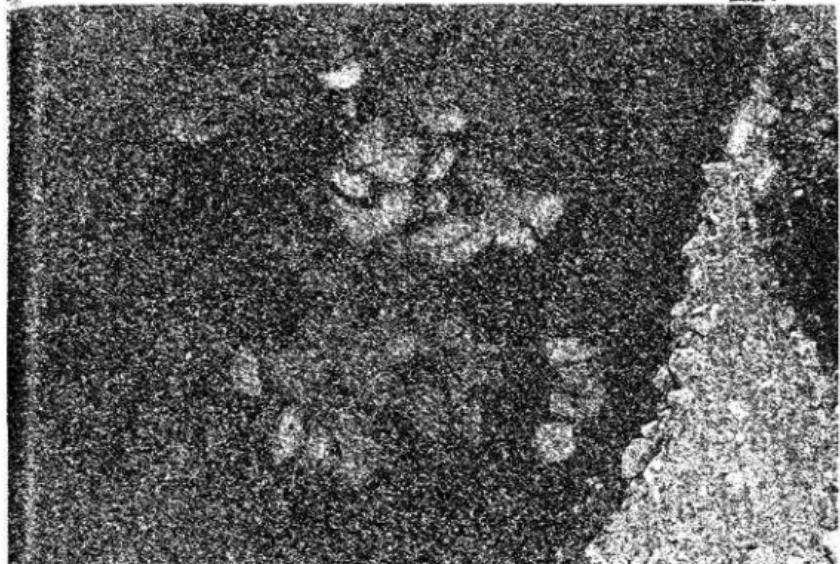
上 遗迹造景  
下 I区1号土壤遗物出土状况



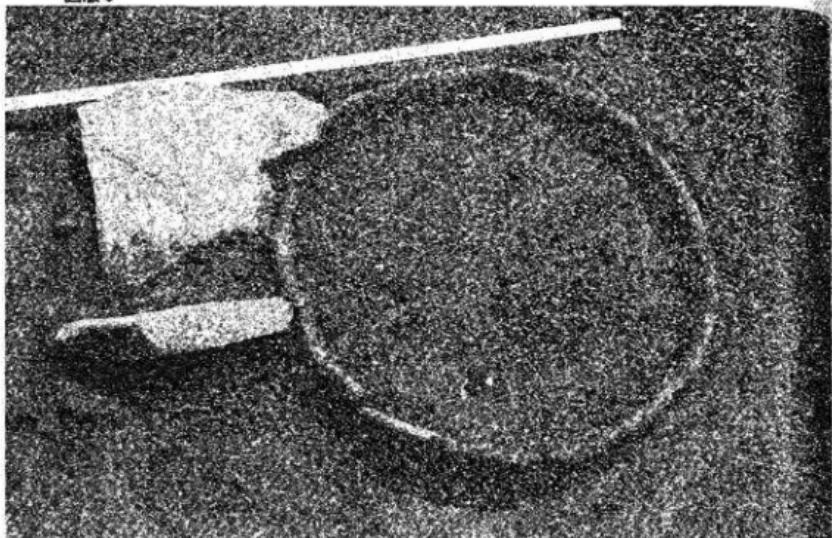


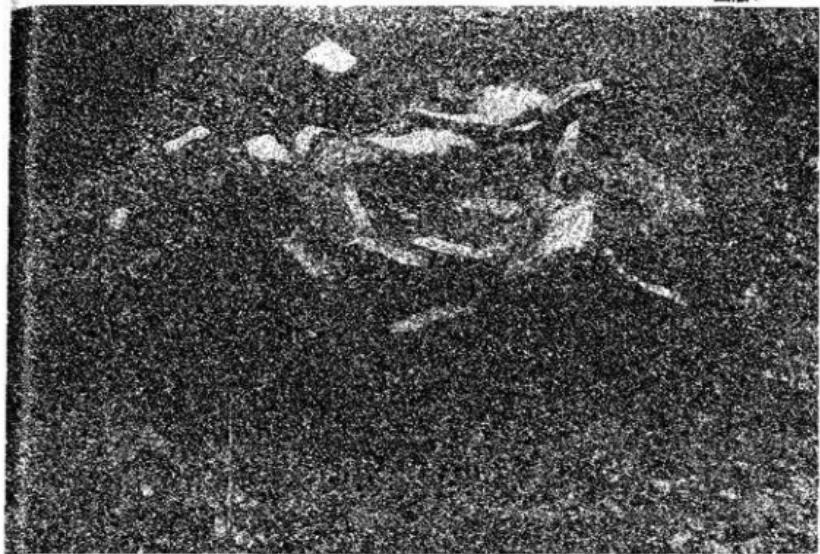
上 I区 8号土壤  
下 I区 2号住居跡（南東より）



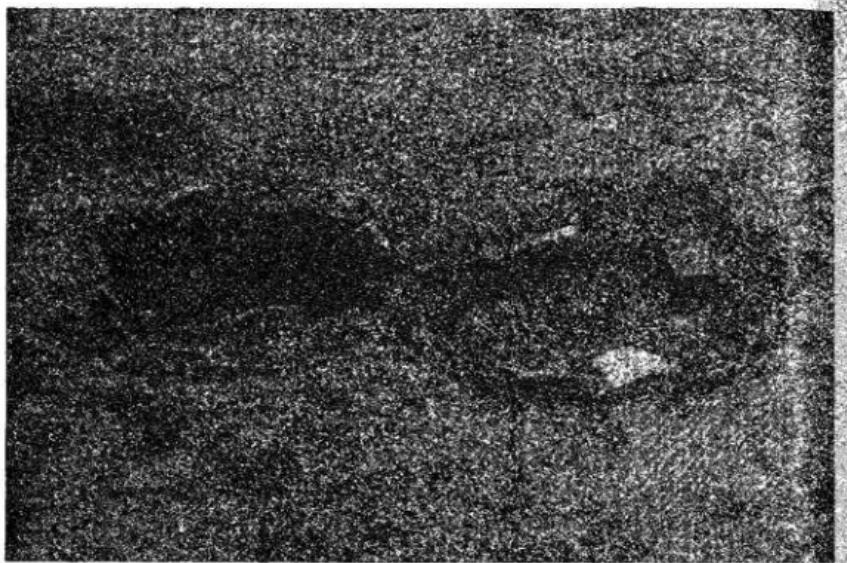


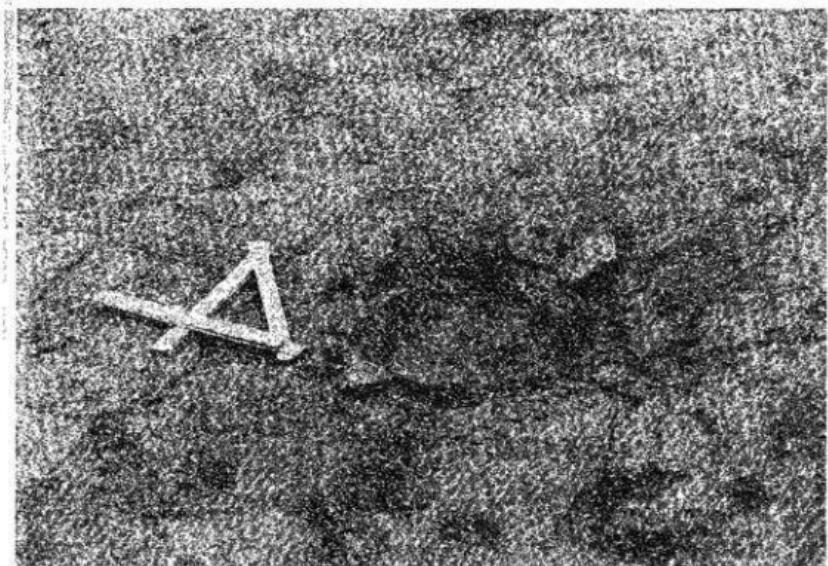
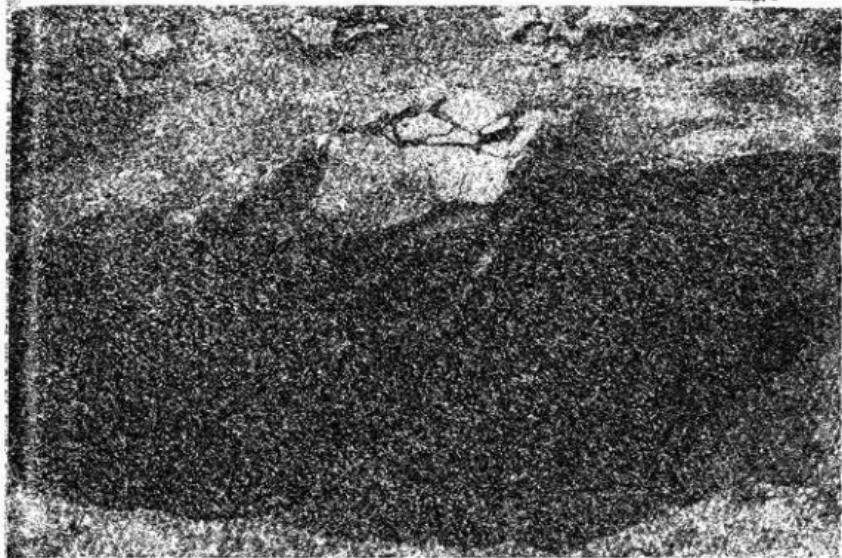
上 II区古墳時代住居跡遺物出土状況（鉢、甕、住居跡南東隅）  
下 II区古墳時代住居跡遺物出土状況（坏、住居跡北西隅）





上 III区 3号埋甕  
下 III区 4号埋甕

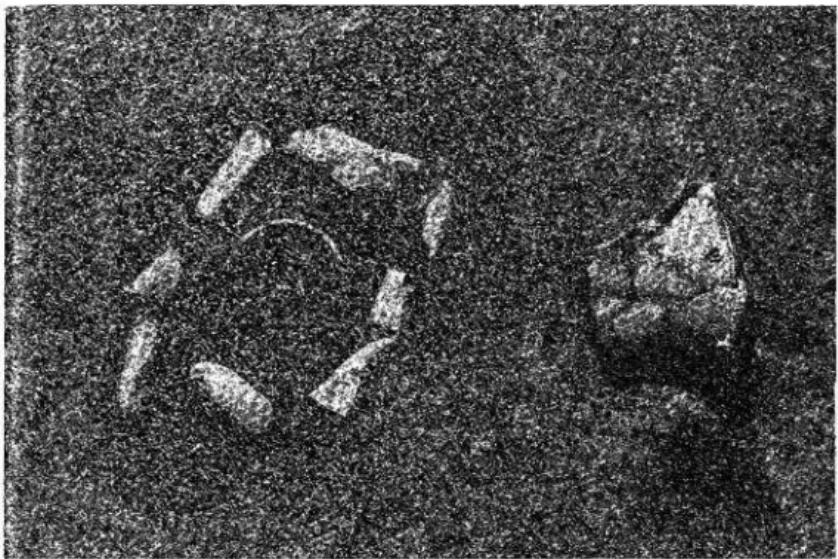




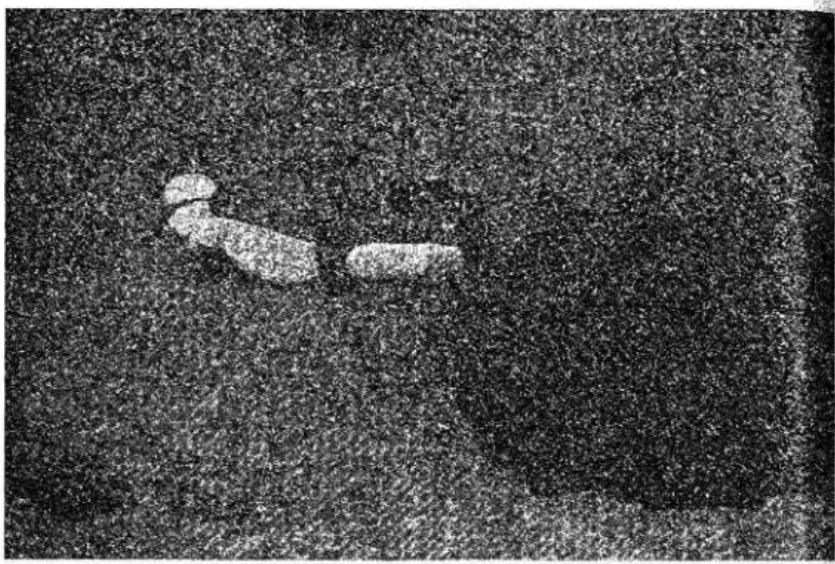
上 IV区 1号埋甕断面  
下 IV区 5号埋甕

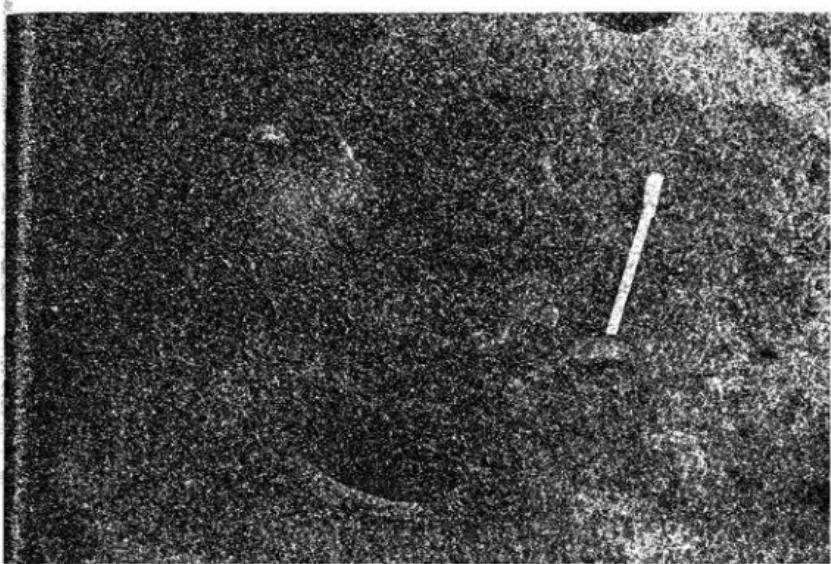
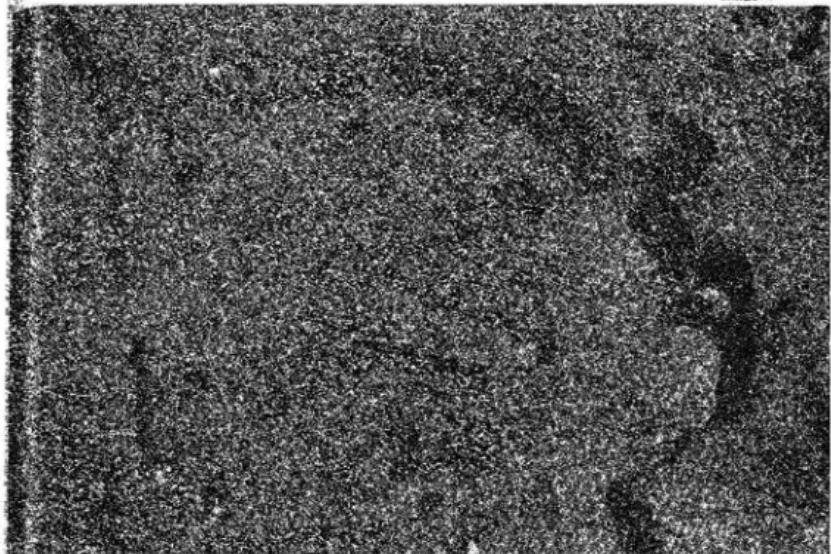


—146— 上 V区 5号住居跡 (造方は左より3号, 2号, 1号住居跡)  
下 V区 1号住居跡, 2号屋外炉

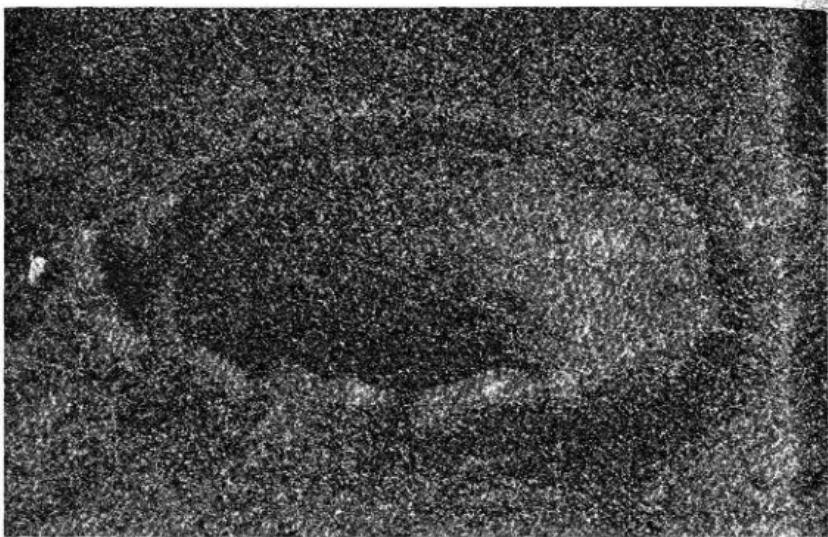
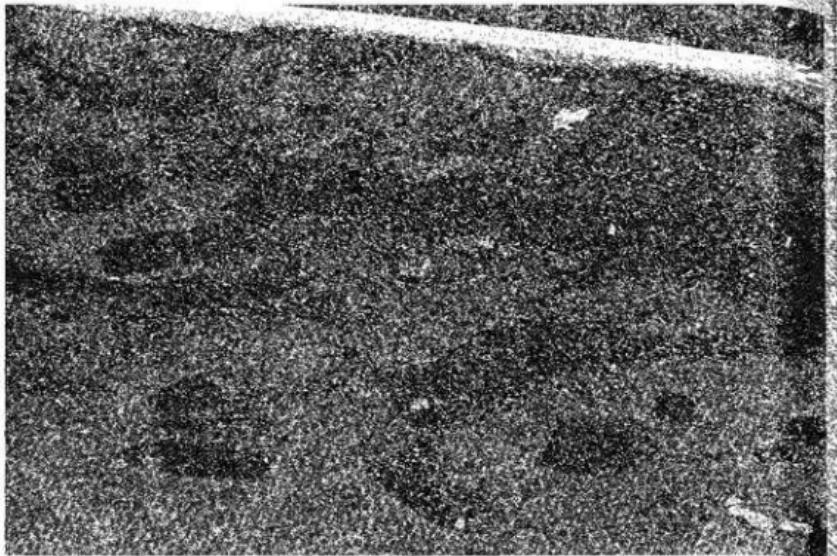


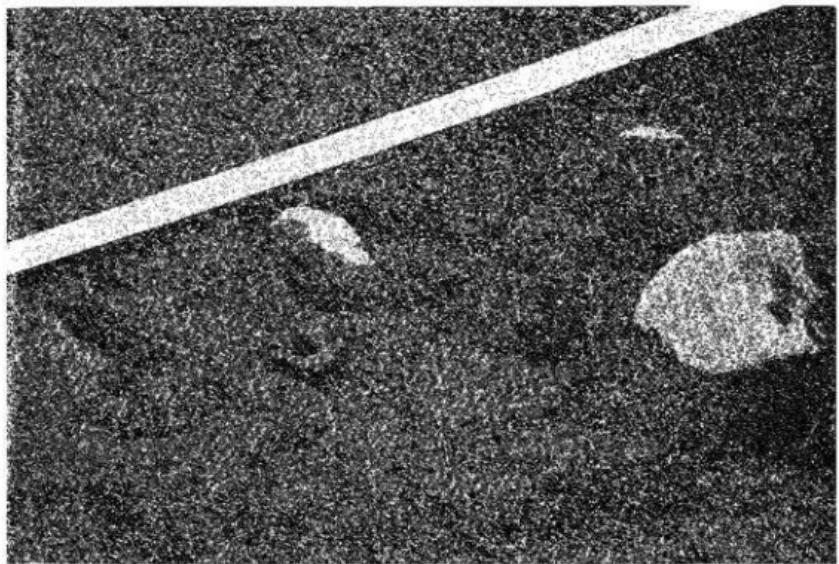
上 V区2号住居跡（南より）  
下 V区2号住居跡、石圓炉



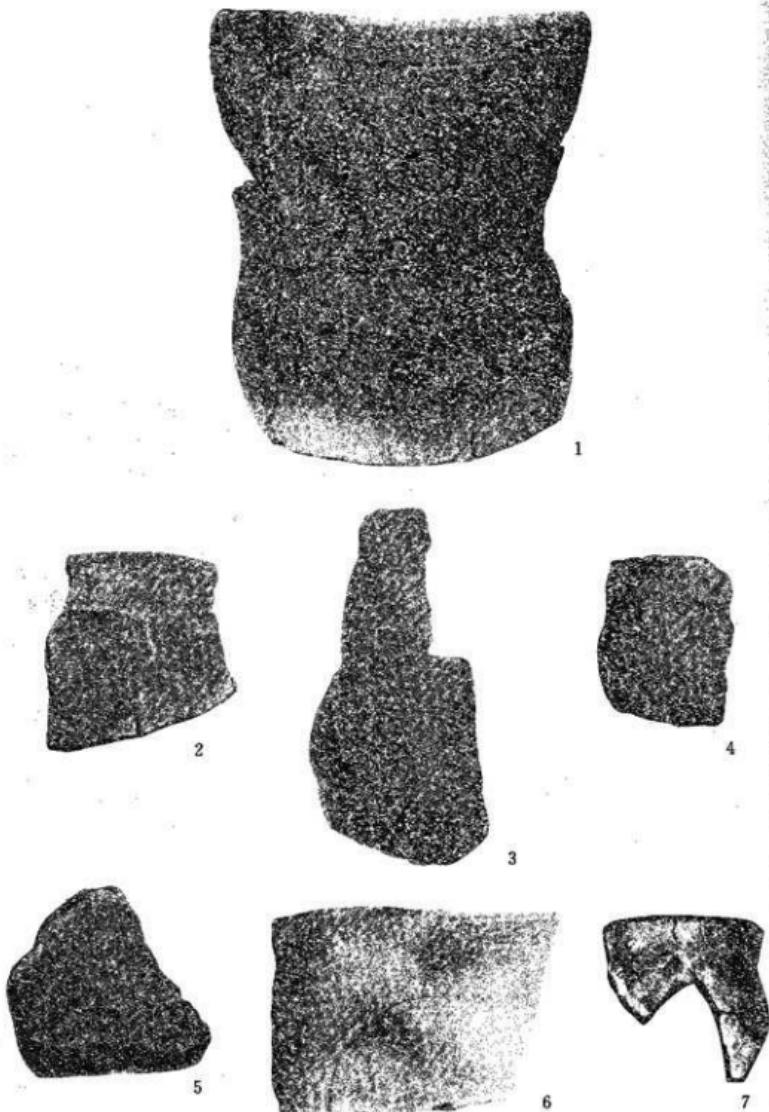


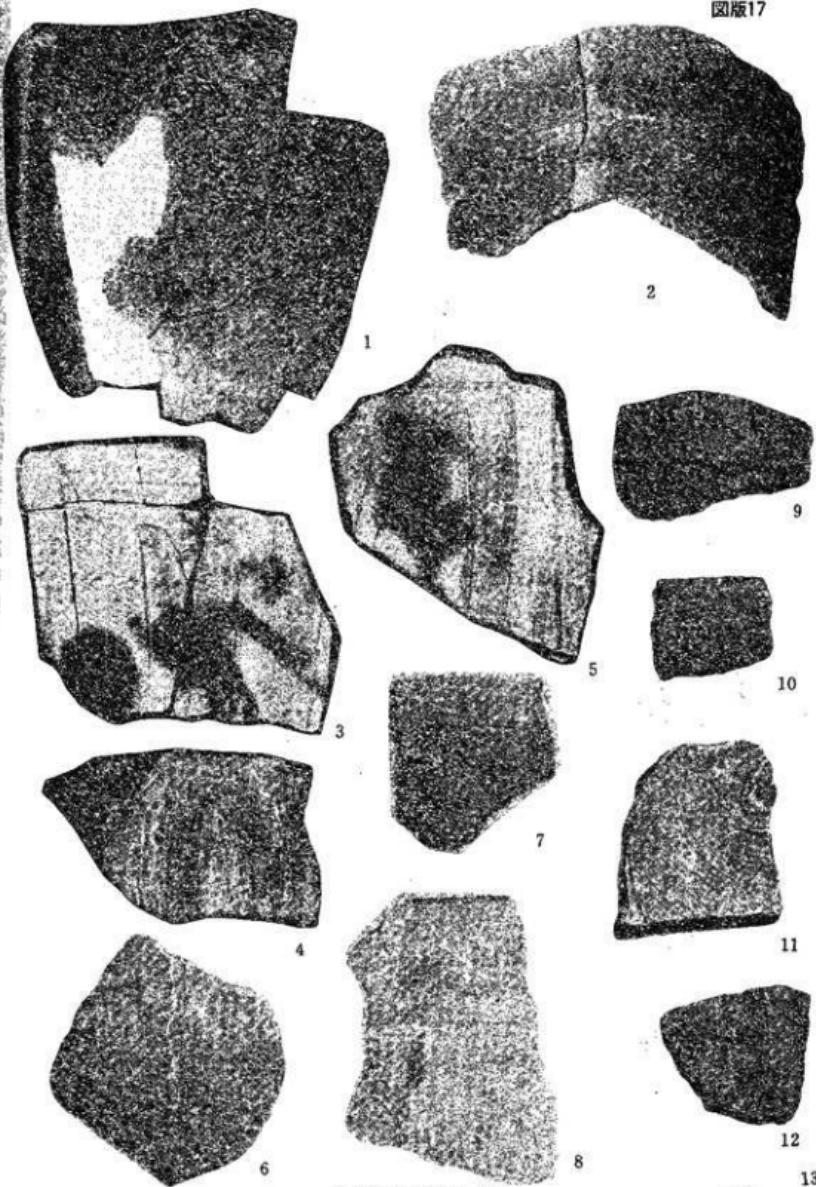
上 V区 5号住居跡  
下 V区 2号土壤遺物出土状况



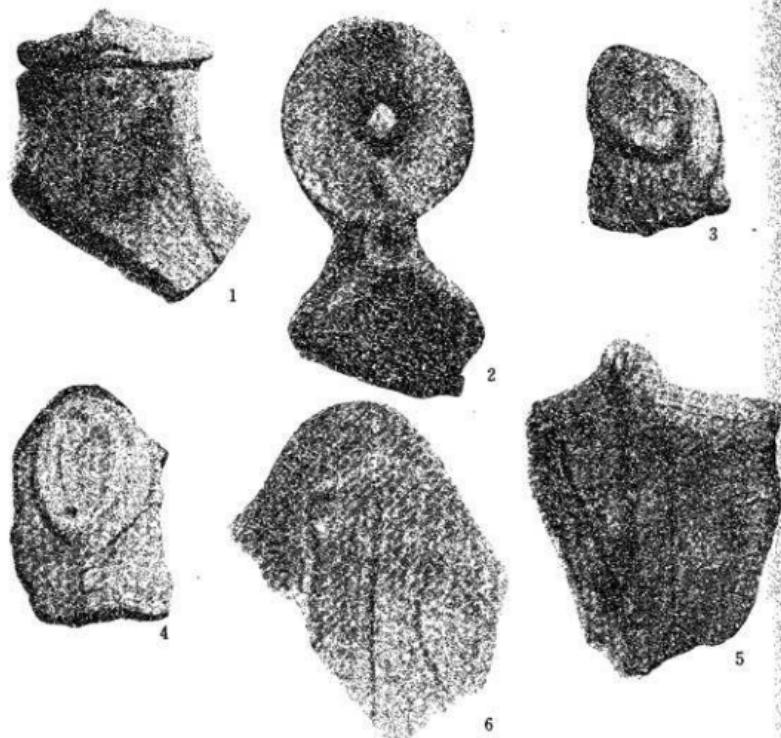
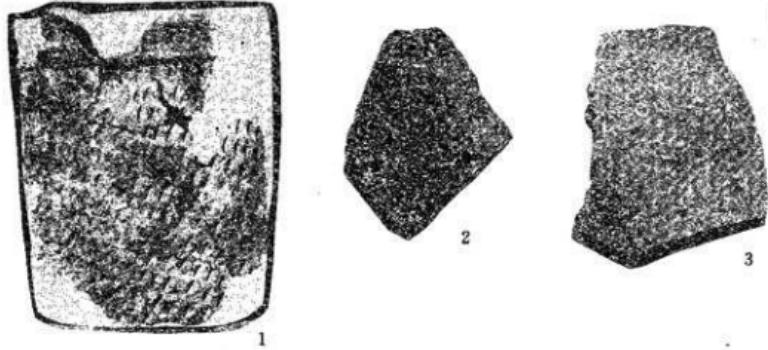


上 II区 2号土塘 そば埋甕  
下 III区 土製品（垂飾）出土状況





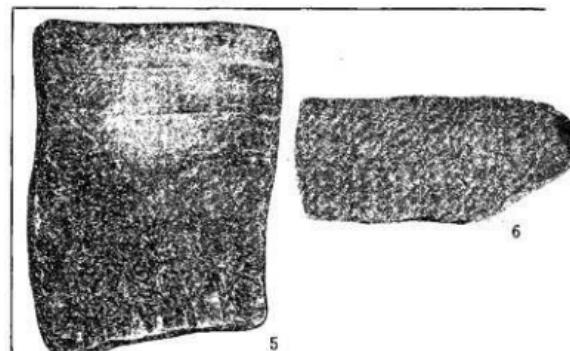
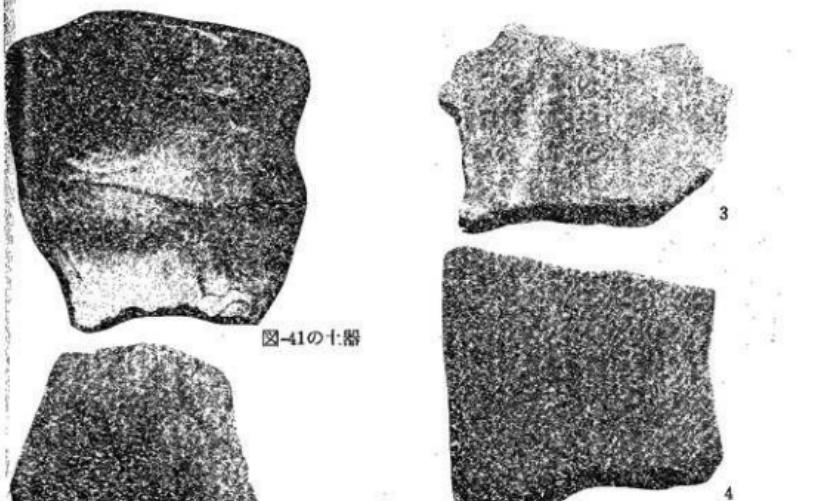
I区2号土壤出土土器



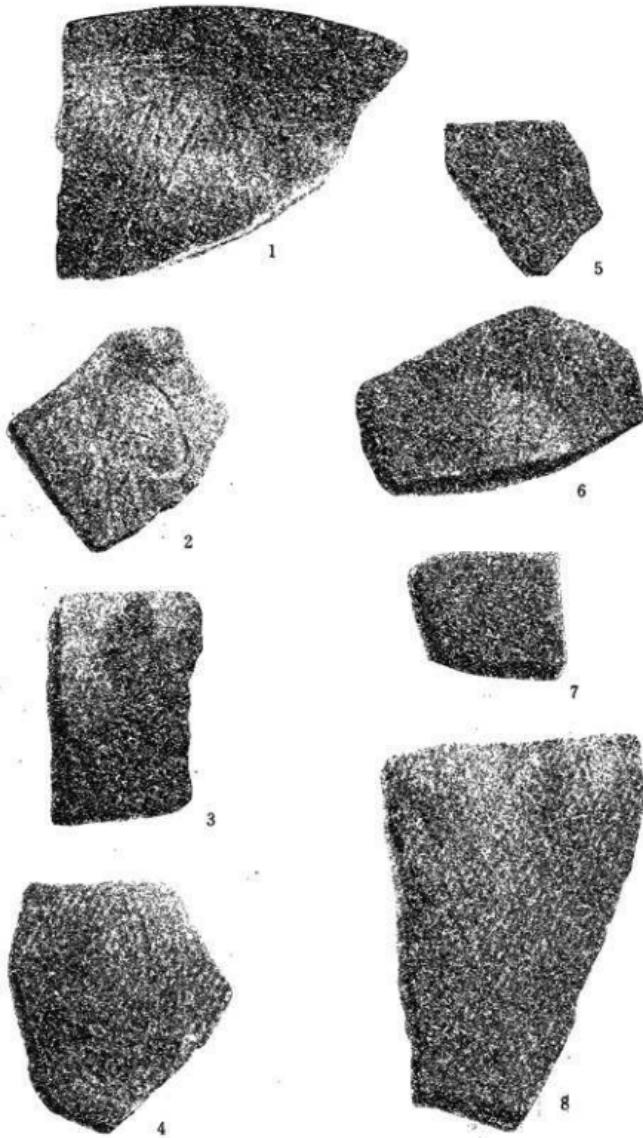
上 I区3号土壤出土土器  
下 I区4号土壤出土土器

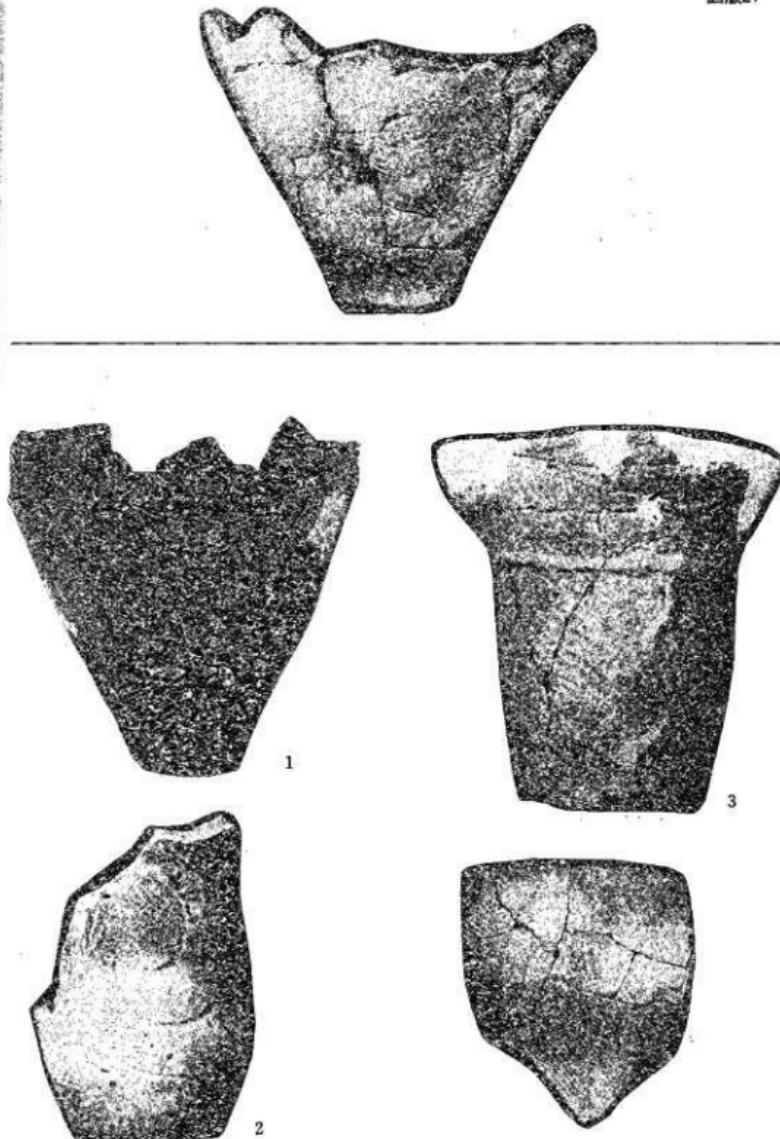


図-41の土器

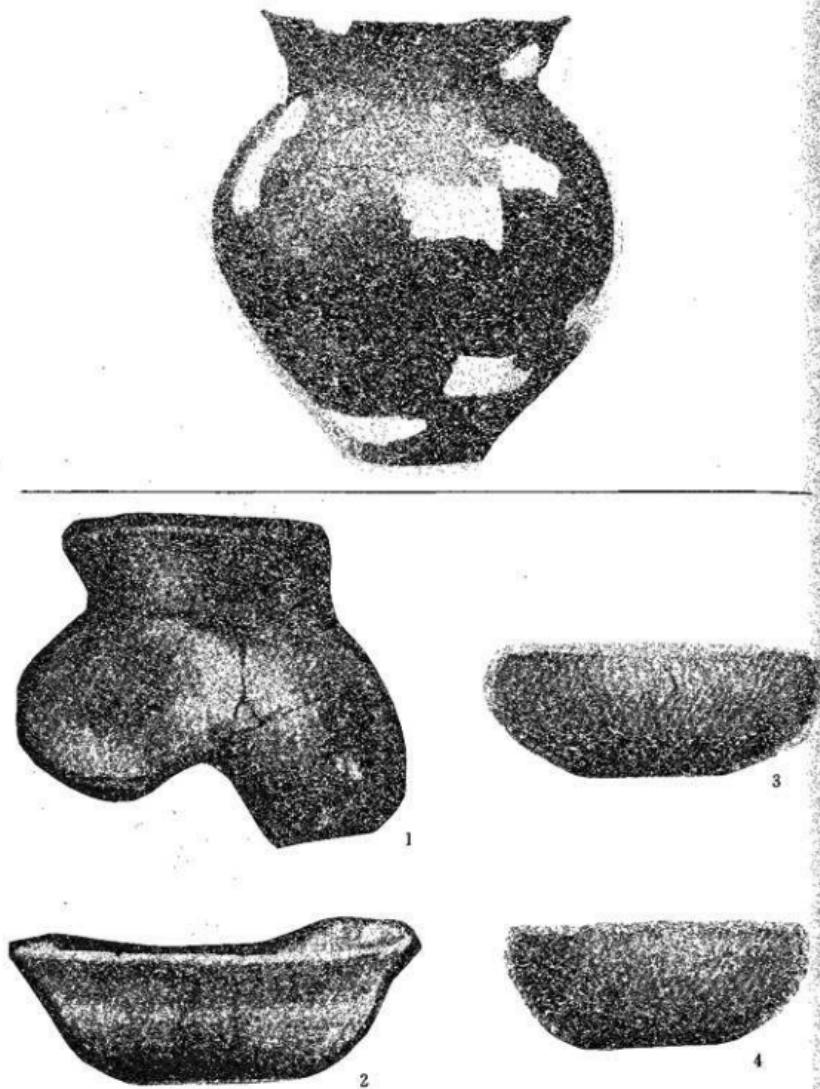


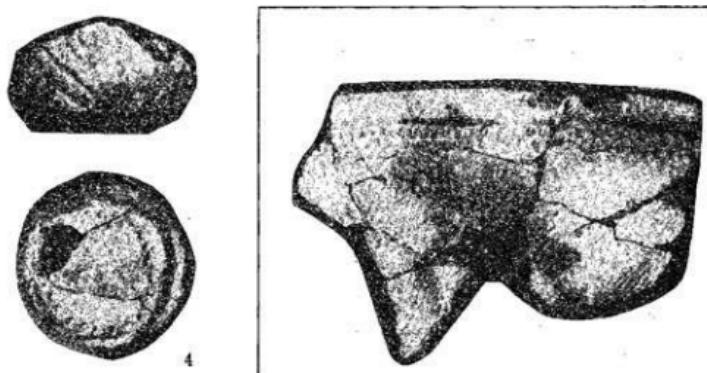
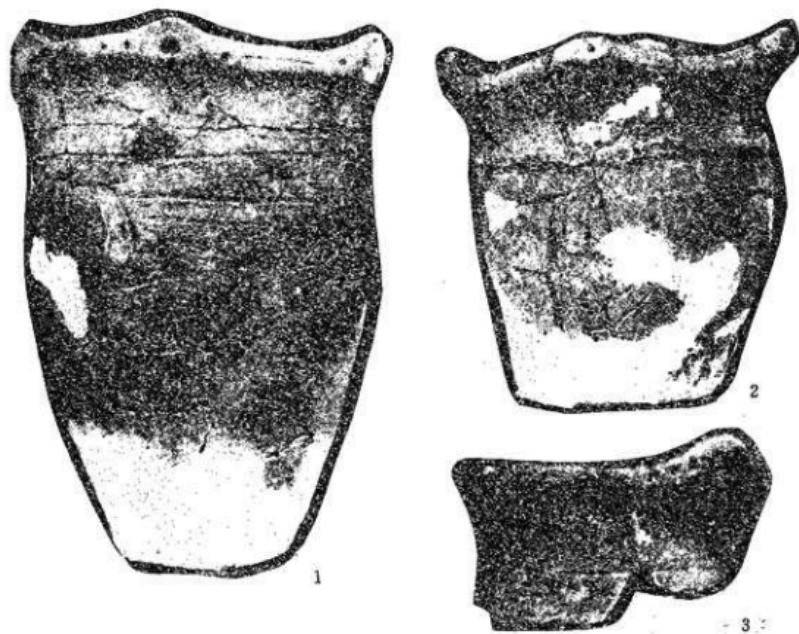
上 I区 4号土壤出土土器  
中 I区 6号土壤出土土器  
下 I区 5号土壤出土土器



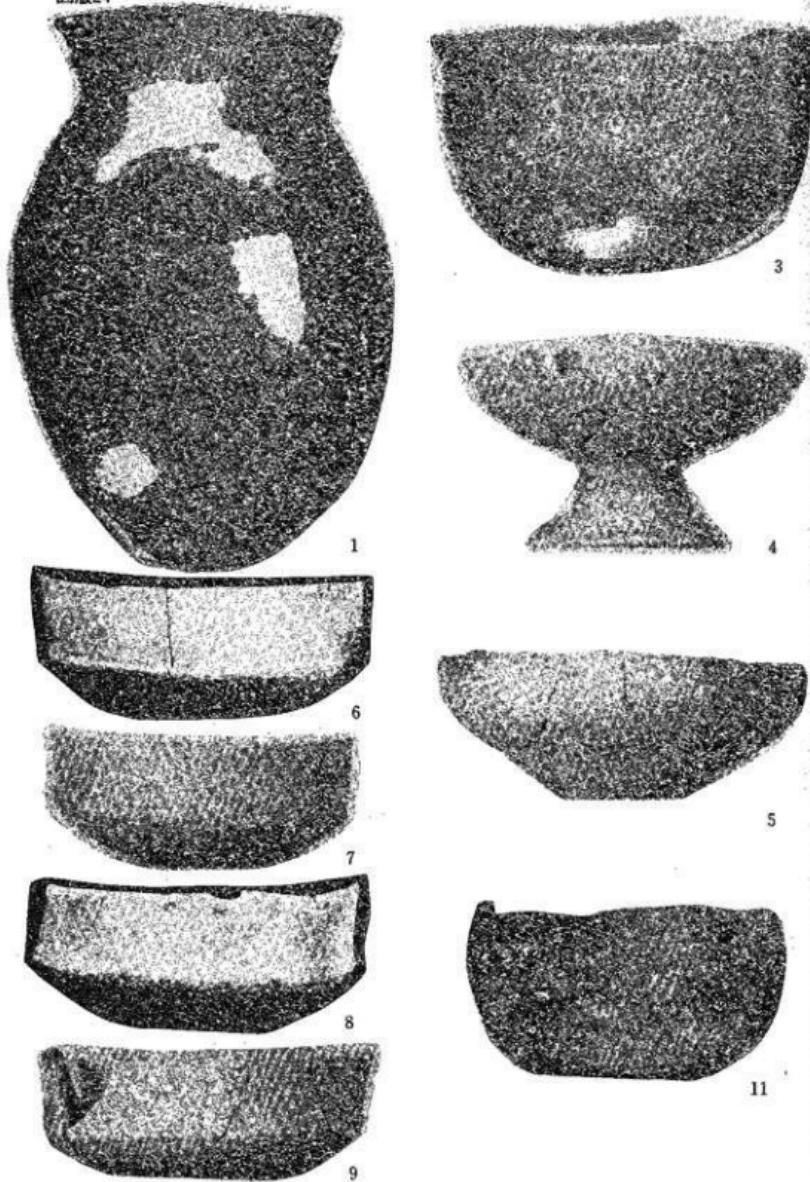


上 I区9号土墳出土土器  
下 I区出土遭構不明の土器



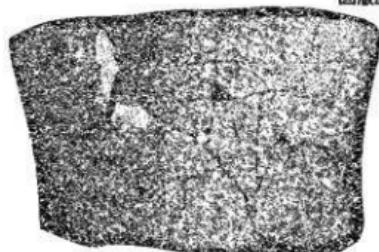


上 II区 2号土壤出土土器  
下 II区 3号土壤出土土器

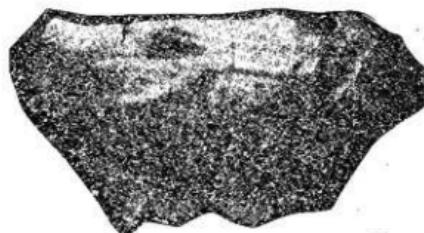




1号



2号

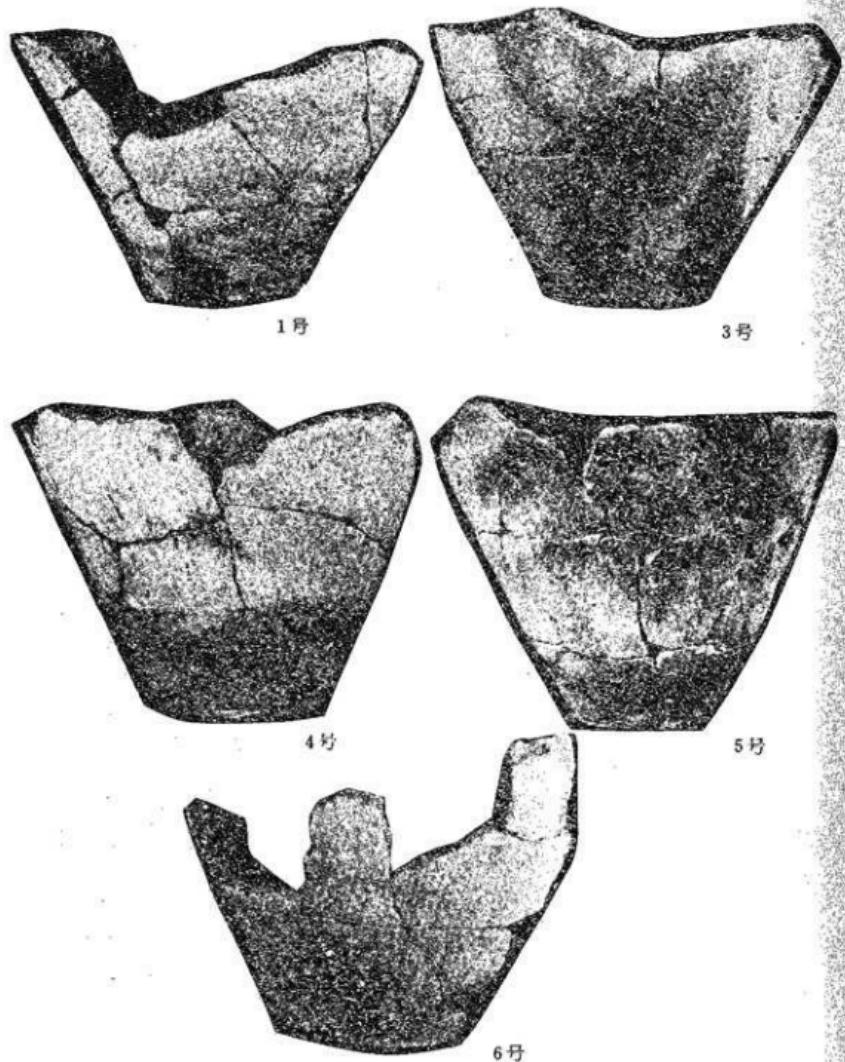


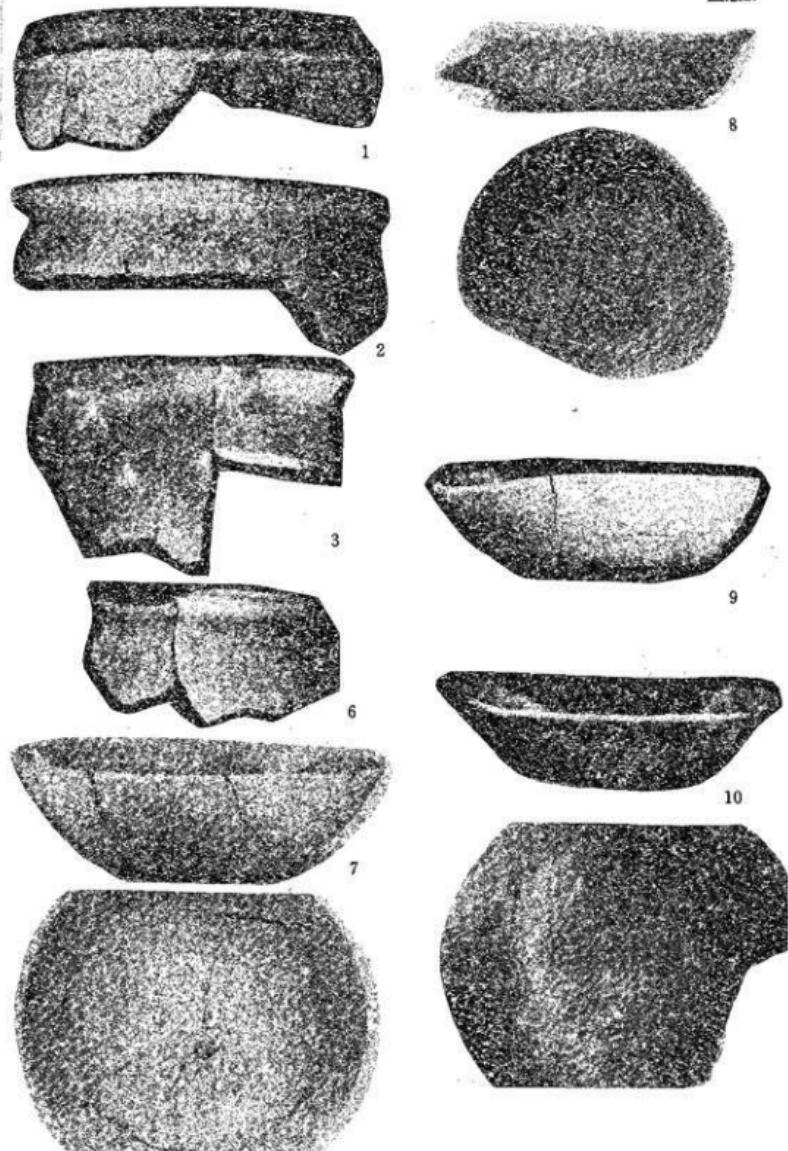
4号



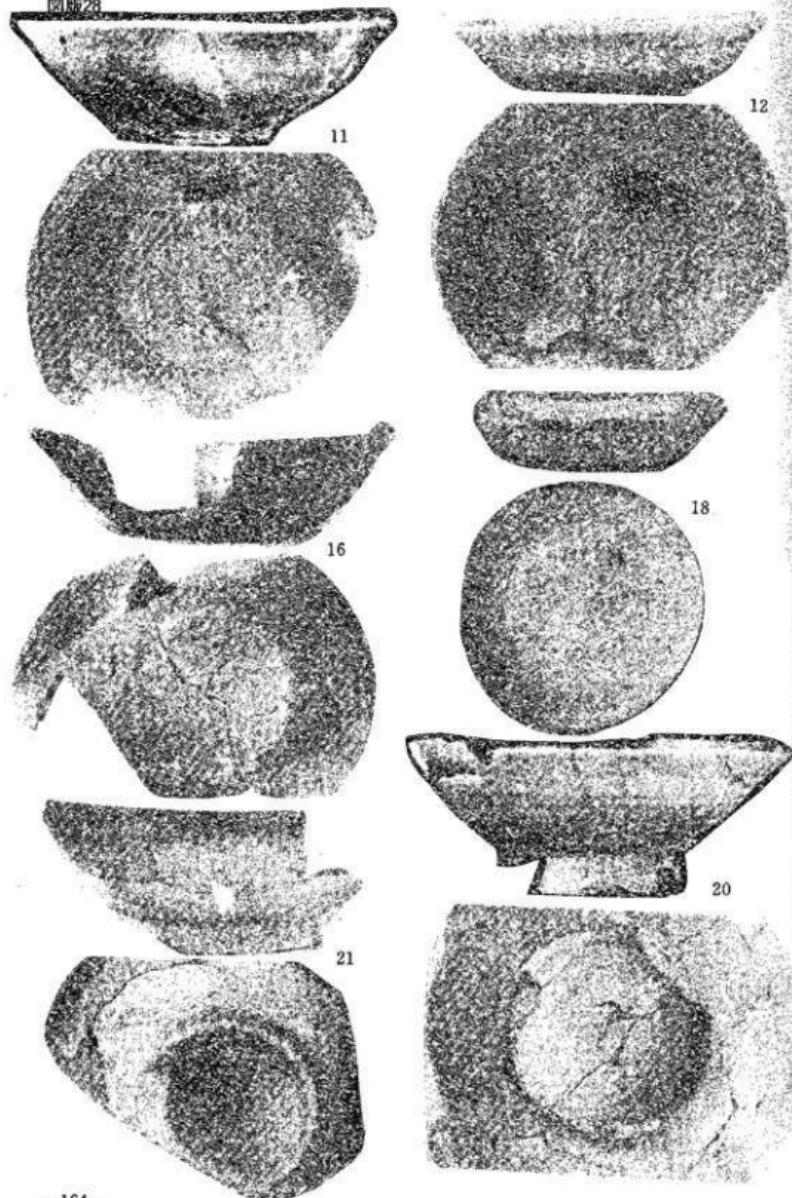
上 III区 1号, 2号, 4号埋藏使用土器  
下 IV区 2号埋藏使用土器

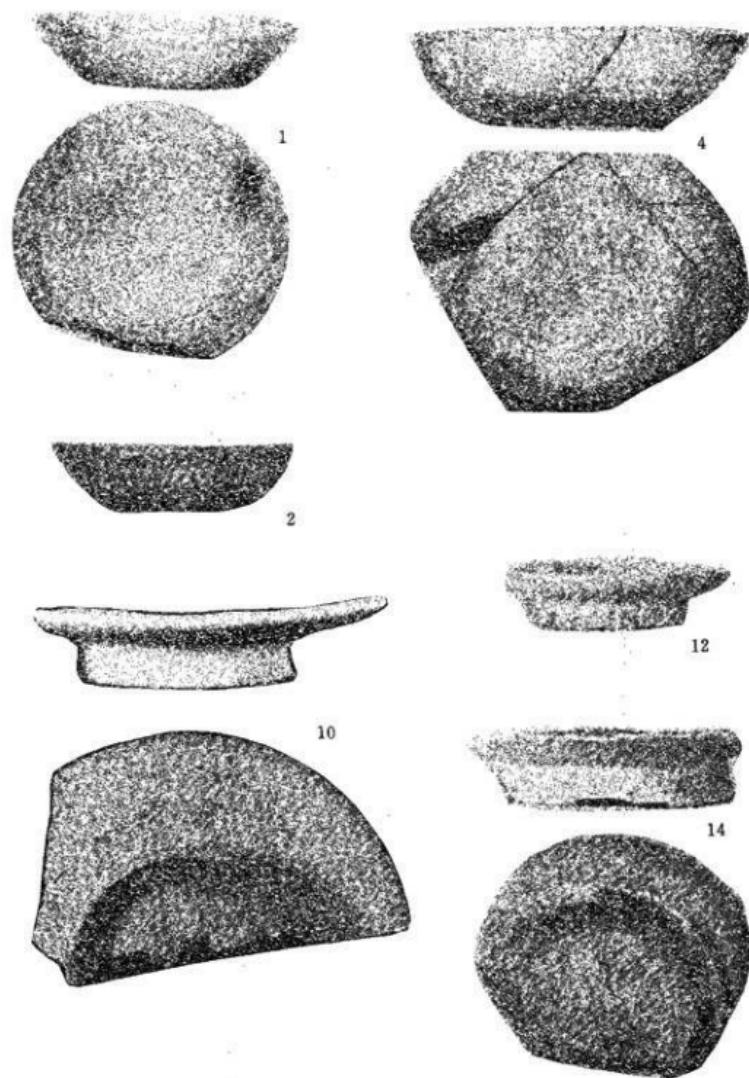






IV区歴史時代住居跡出土土器(1)





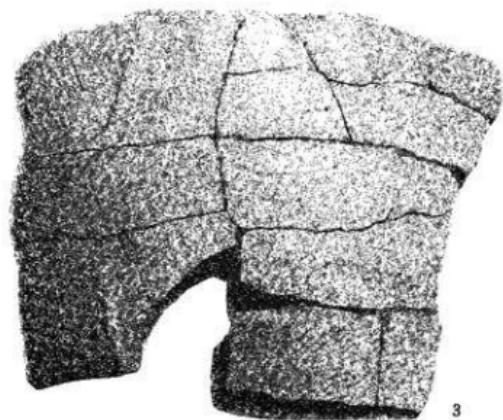
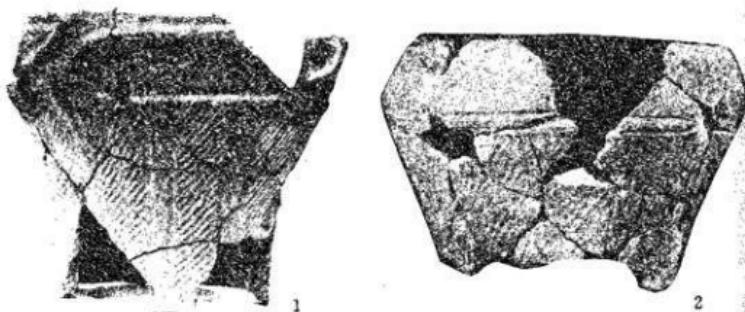






図60の1

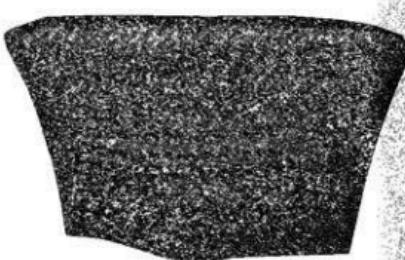


図60の2

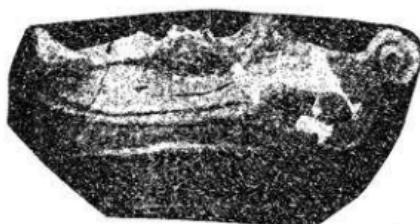


図60の4



図60の3

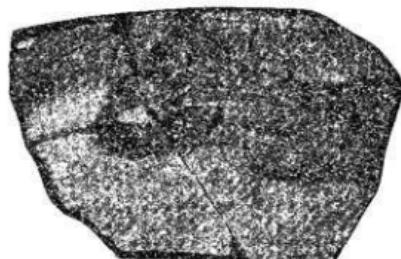


図61の1

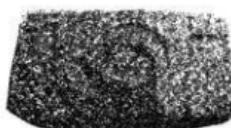


図61の2

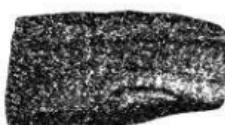


図61の3



図61の4



図61の5

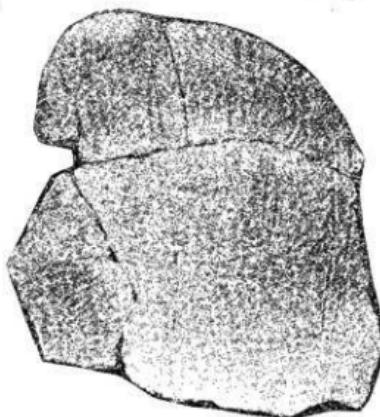


図61の6

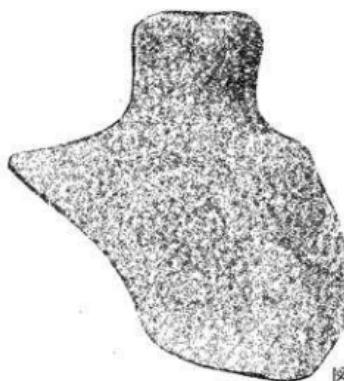


図62の1

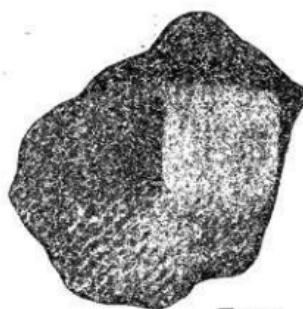
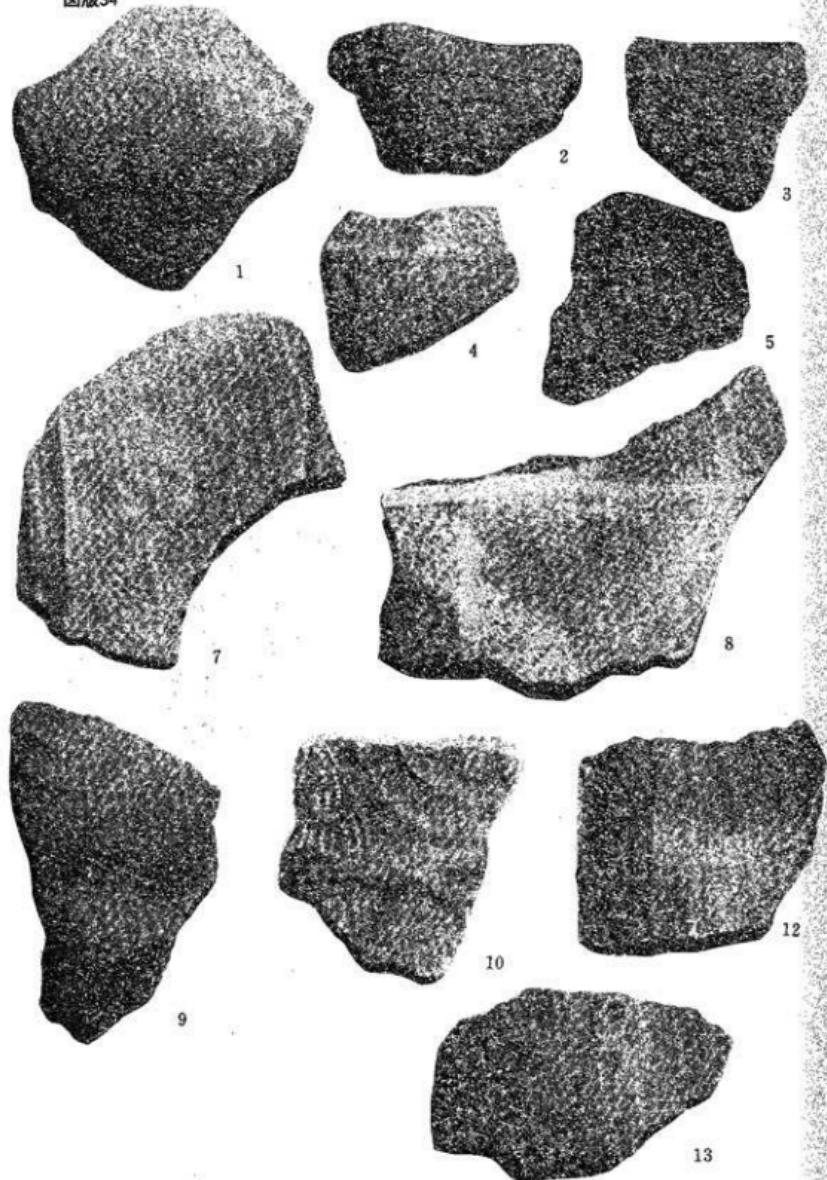
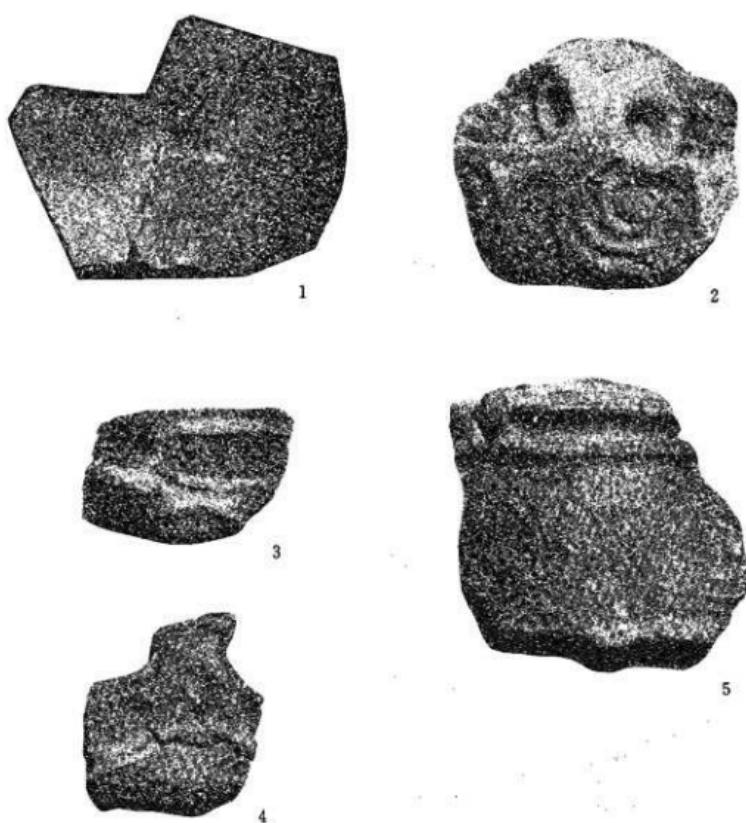
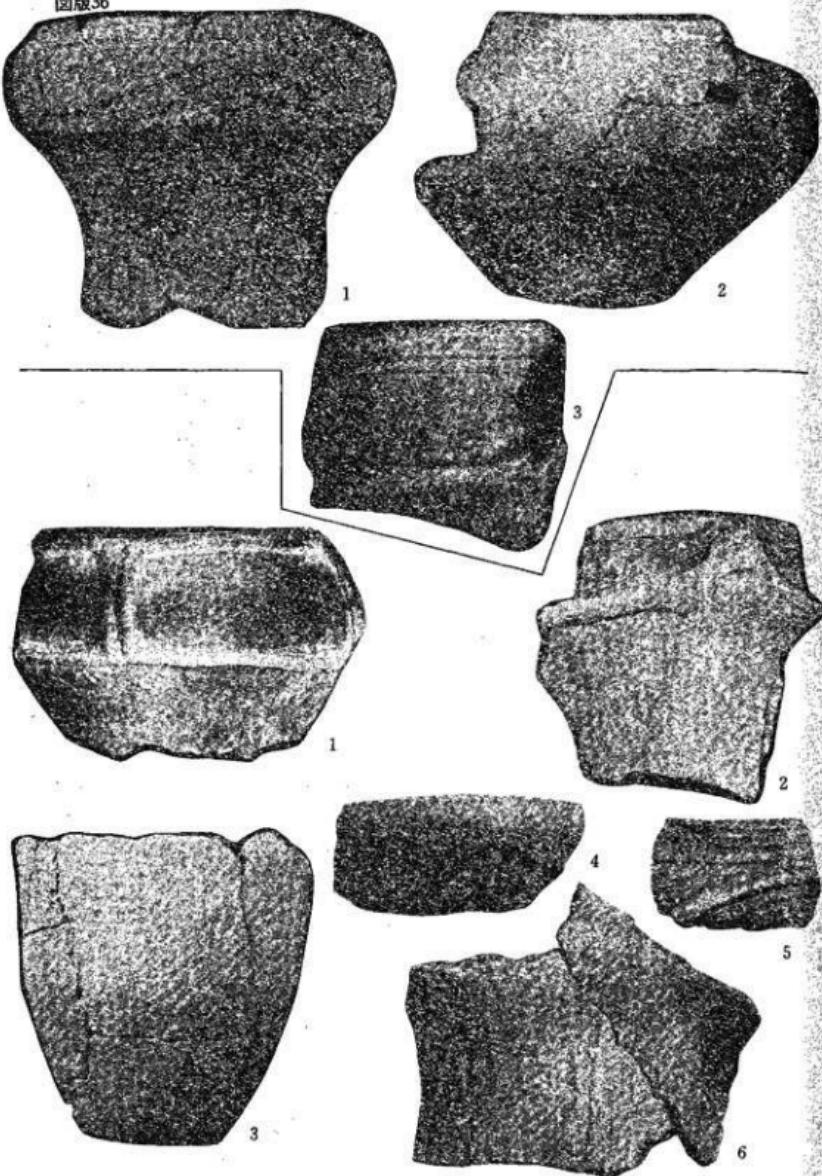


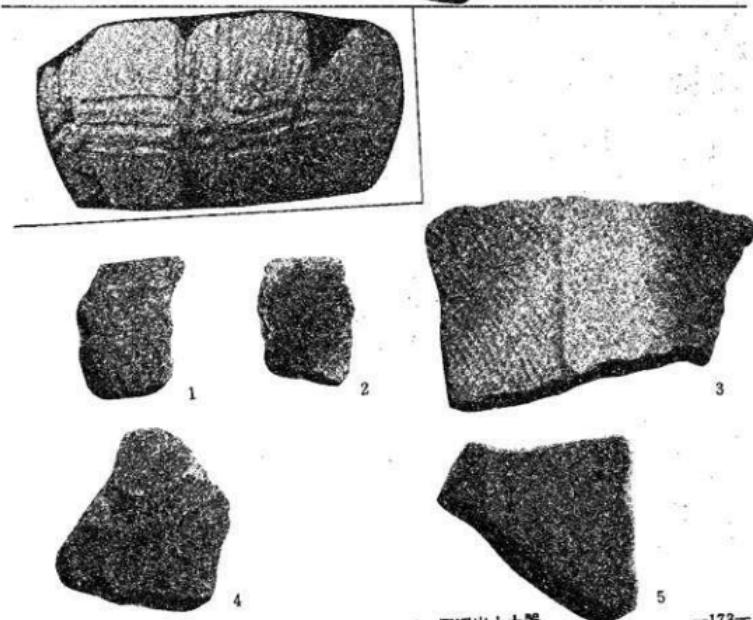
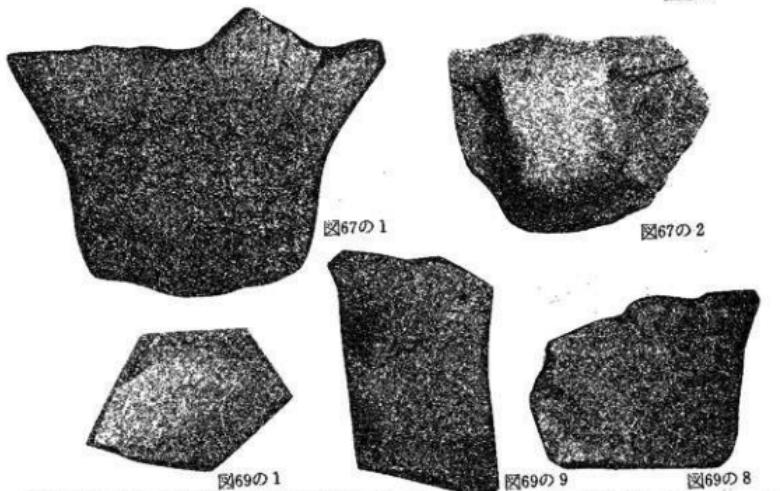
図62の2

上 V区2号住居跡出土土器(2)  
下 V区3号住居跡出土土器(1)









上 V区1号屋外炉使用土器、周辺出土土器  
中 V区2号屋外炉使用土器  
下 V区1号土壤出土土器

図版38



図71の1

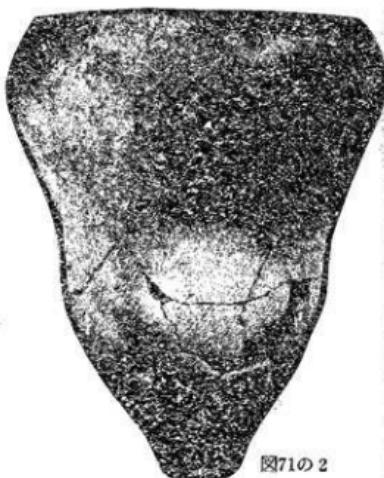


図71の2

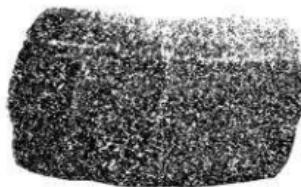


図72の1

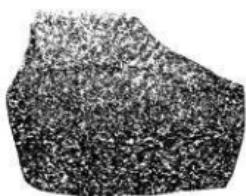


図72の2



図72の3



図72の4



図72の5

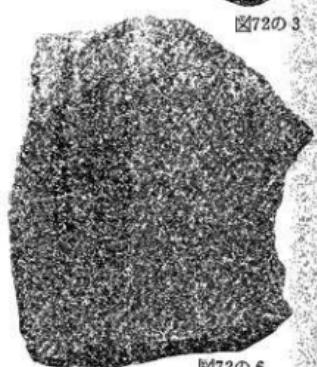
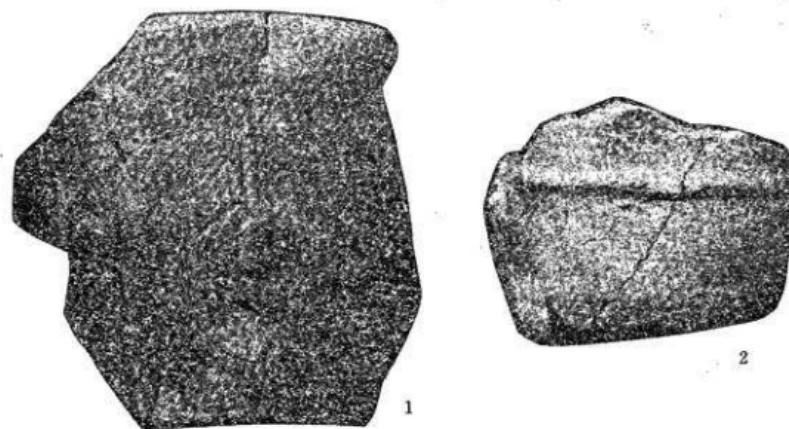
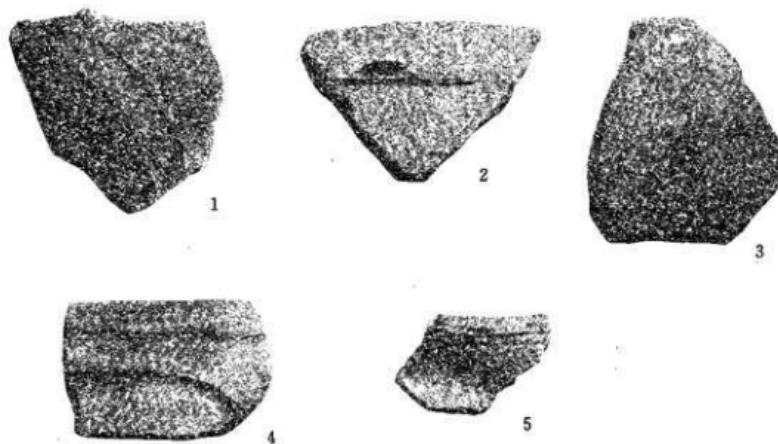


図72の6



上 V区3号土壤出土土器  
下 V区遺構に伴わない土器

図版40

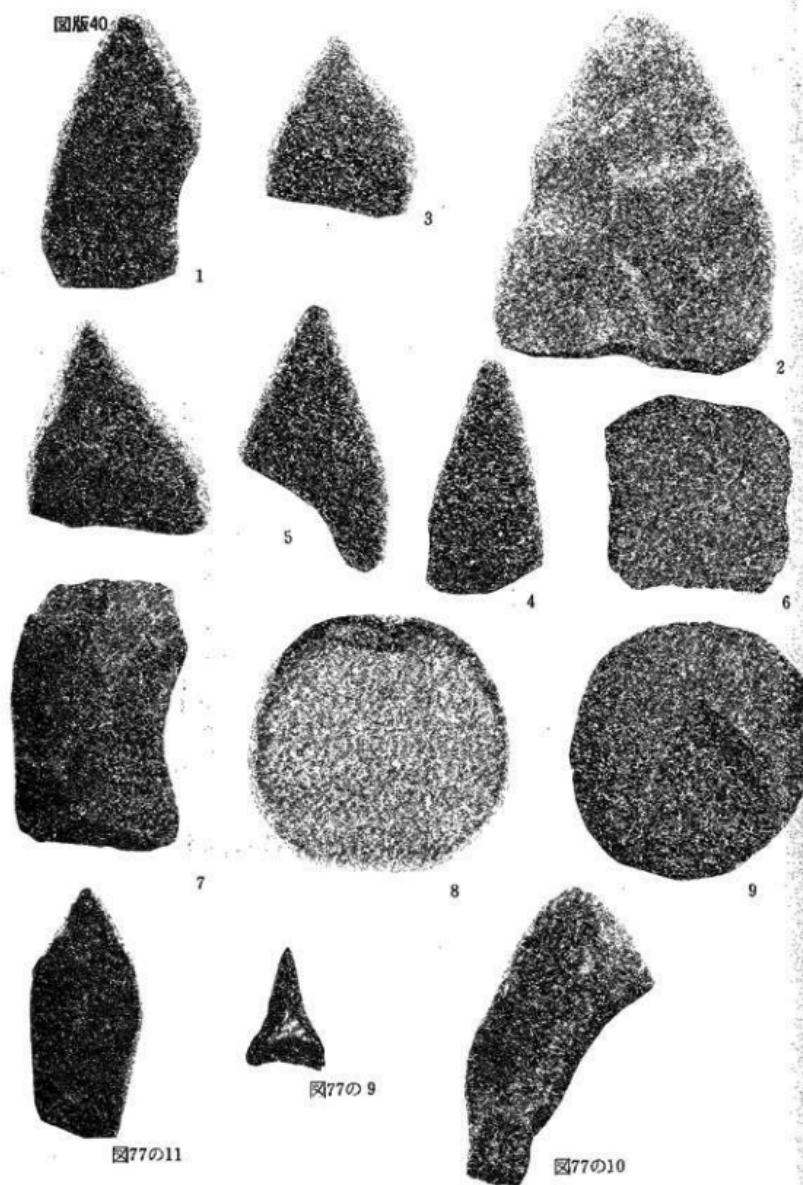
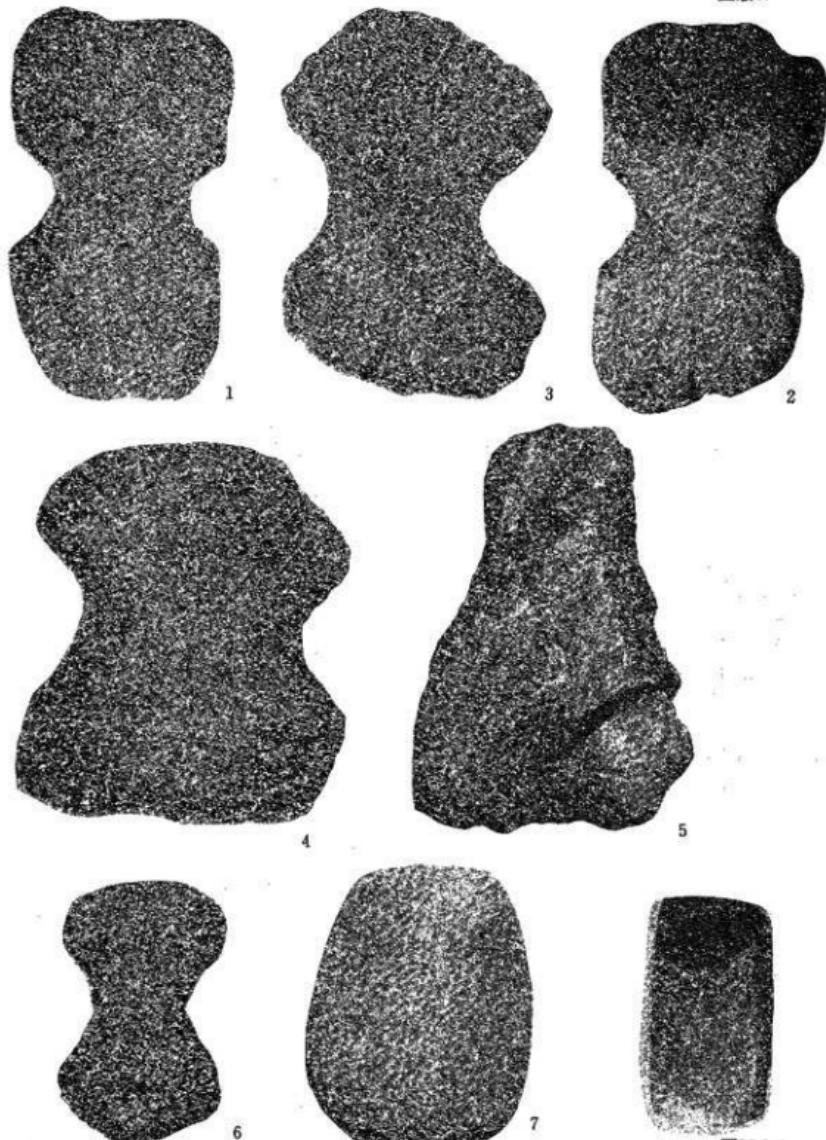


図77の11



北の内遺跡出土石器(1)



北の内遺跡出土石器(2)

図77の8

-177-

図版42



図76の8



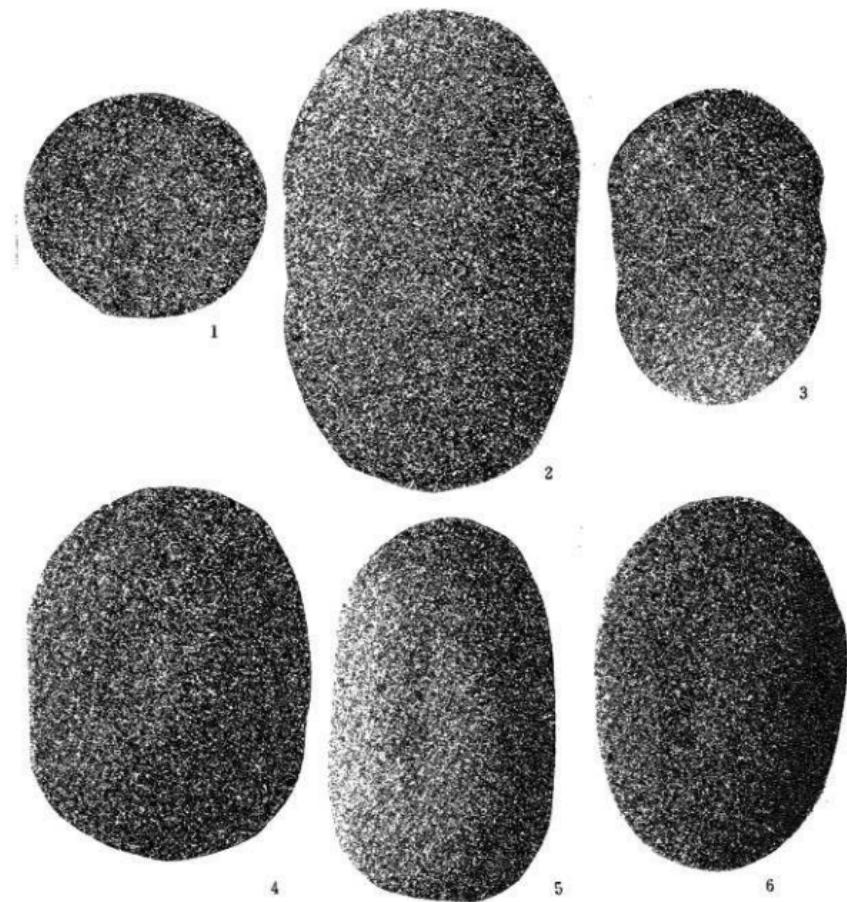
図76の9



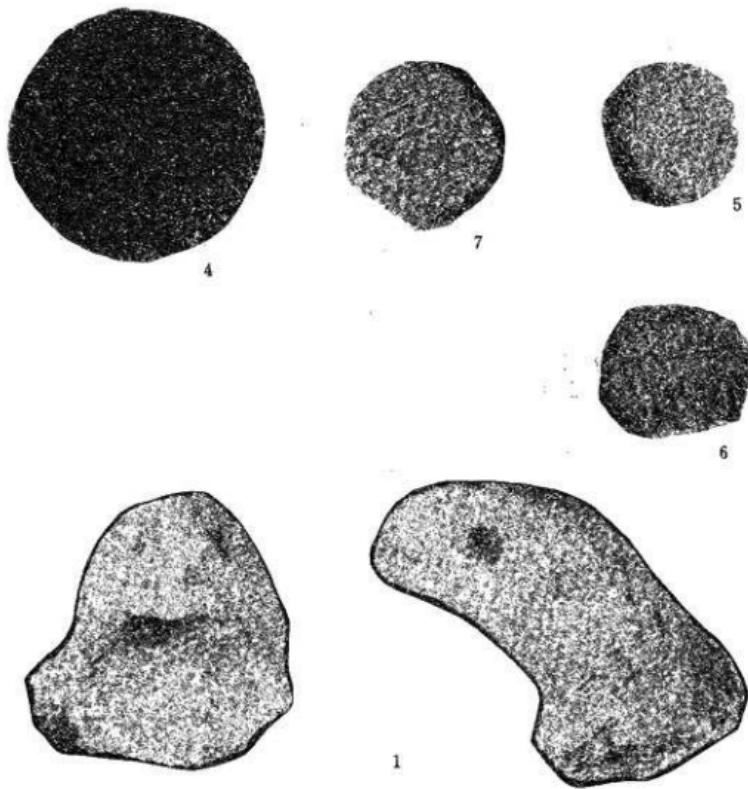
図77の12



図77の7



図版44



栃木県埋蔵文化財報告 第 31 号

北の内遺跡発掘調査報告

発行日 昭和 54 年 10 月

発行者 栃木県教育委員会

印 刷 株松井ビ・テ・オ印刷